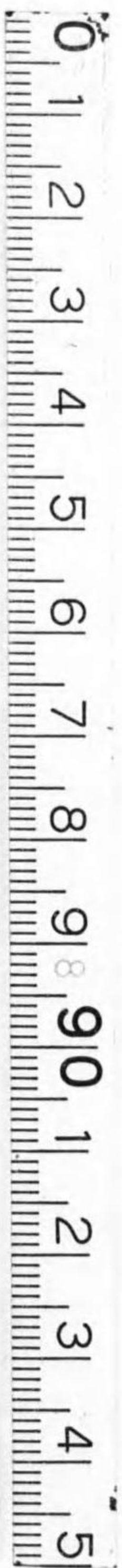


始



特212
62

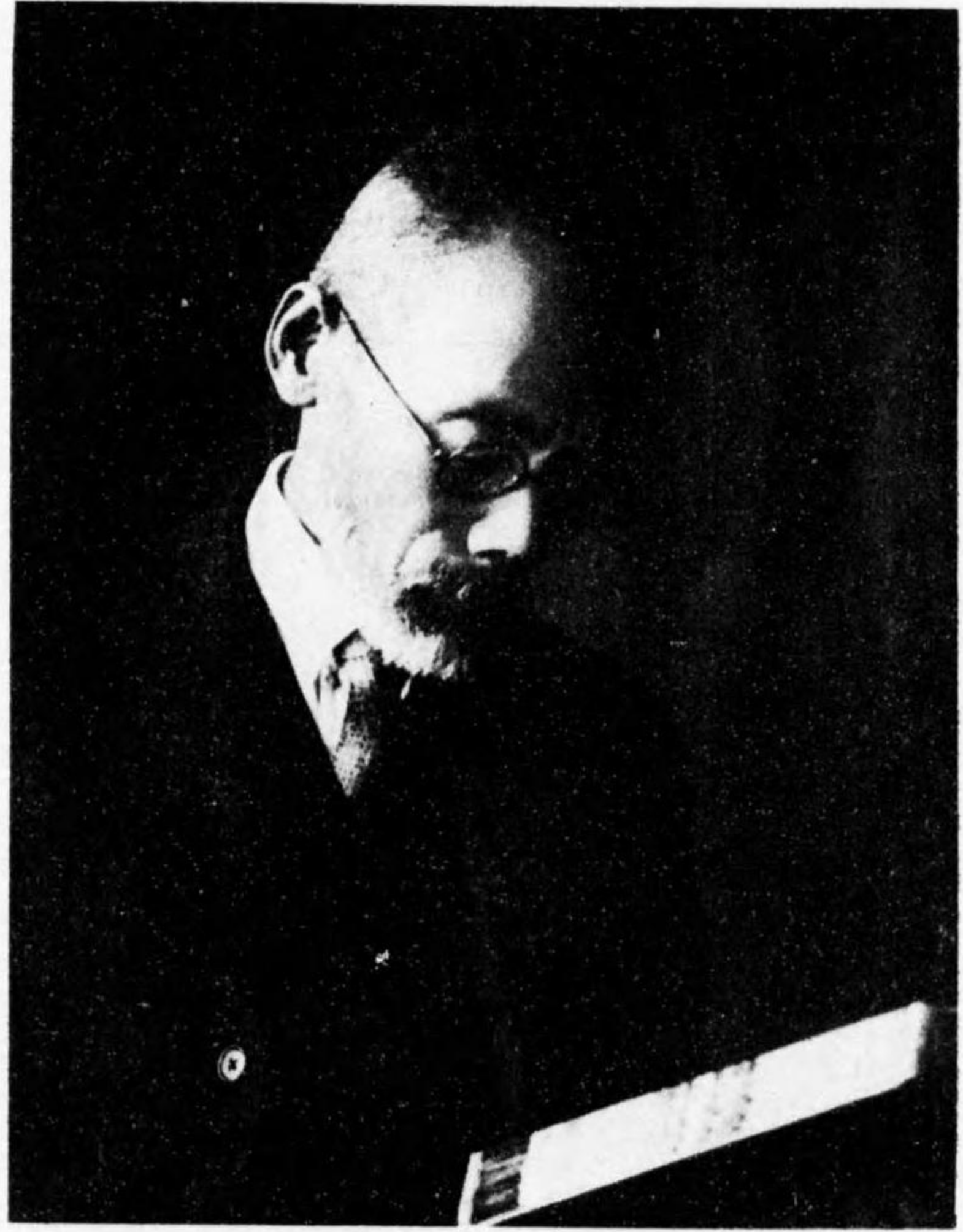


西晋一郎先生講述

老子講義

訂正改版





西晉一 郎先生

序

これは老子の私の講義を本間君が筆記されたものであるが、今これを讀んで見ると私の饒舌の寫眞であつて、老子の主意に遠ざかる自分の姿を見せつけられるやうである。さりとして自分が喋つたところであるから今更取り消して、これを謄寫などしないがよいといふは、いよゝゝ以て老子に遠ざかる。元來至て高い境涯を語つたものであるやうであるから、よく分かる筈はないが、とにかく老子の口眞似をして學生諸君にかかる世界人生觀も東洋にはあるものと一應とりつぎをするのである。尙ほ私の見た解釋の中では澤庵和尚のが一番面白く、それで老子の大意も分つた所が多い。

昭和十二年十一月三十日

廣島

西 晋 一 郎

例言

- 一、この書は西晋一郎先生が廣島文理科大学に於て昭和十一年の春から秋に亘つて學生の爲に講述せられた老子の講義を拜聽筆記したもので、
- 一、文體は先生の講述せられた御口調を其の儘に傳へもつて先生の溫容慈言に接して親しく教を聞くの思ひあらしめんとした。
- 一、併し編者固より不敏にして誤記遺漏あるを免れず、責は凡て編者にあり、茲に衷心よりその累を先生に及ぼすことのないやうにと願つて止まない。

昭和十二年四月廿五日

廣島興徳寺にて

編者 謹識

老子講義

目

次

| | |
|-----------|----|
| 道可道章第一 | 三 |
| 天地皆知章第二 | 七 |
| 不尚賢章第三 | 〇 |
| 道沖章第四 | 一四 |
| 天地不仁章第五 | 一六 |
| 谷神不死章第六 | 一九 |
| 天長地久章第七 | 二三 |
| 上善若水章第八 | 二七 |
| 持而盈之章第九 | 三〇 |
| 載營魄章第十 | 三五 |
| 三十幅章第十一 | 四〇 |
| 五色章第十二 | 四二 |
| 寵辱章第十三 | 四四 |
| 視之不見章第十四 | 四六 |
| 古之善爲士章第十五 | 四九 |
| 致虛極章第十六 | 五三 |
| 太上章第十七 | 五五 |
| 大道廢章第十八 | 五七 |

| | |
|------------|-----|
| 絕聖棄智章第十九 | 五八 |
| 絕學無憂章第二十 | 六二 |
| 孔德之容章第二十一 | 六六 |
| 曲則全章第二十二 | 六八 |
| 希言自然章第二十三 | 七三 |
| 跂者不立章第二十四 | 七六 |
| 有物混成章第二十五 | 七八 |
| 重爲輕根章第二十六 | 七九 |
| 善行無轍迹章第二十七 | 八一 |
| 知其雄章第二十八 | 八三 |
| 將欲取天下章第二十九 | 八五 |
| 以道佐人主章第三十 | 八六 |
| 夫佳兵章第三十一 | 八九 |
| 道常無名章第三十二 | 九一 |
| 知人者智章第三十三 | 九四 |
| 大道汎兮章第三十四 | 九六 |
| 執大象章第三十五 | 九七 |
| 將欲喻之章第三十六 | 九八 |
| 道常無爲章第三十七 | 九九 |
| 上德不德章第三十八 | 一〇一 |
| 昔之得一章第三十九 | 一〇五 |
| 反者道之動章第四十 | 一〇〇 |

| | |
|-------------|-----|
| 上士聞道章第四十一 | 一一一 |
| 道生一章第四十二 | 一一三 |
| 天下之至柔章第四十三 | 一一七 |
| 名與身章第四十四 | 一一八 |
| 大成若缺章第四十五 | 一二〇 |
| 天下有道章第四十六 | 一二一 |
| 不出戶章第四十七 | 一二三 |
| 爲學日益章第四十八 | 一二四 |
| 聖人無常心章第四十九 | 一二五 |
| 出生入死章第五十 | 一二六 |
| 道生之章第五十一 | 一二八 |
| 天下有始章第五十二 | 一三〇 |
| 使我介然章第五十三 | 一三三 |
| 善建者不拔章第五十四 | 一三五 |
| 含德之厚章第五十五 | 一三六 |
| 知者不言章第五十六 | 一四一 |
| 以正治國章第五十七 | 一四三 |
| 其政悶々章第五十八 | 一四六 |
| 治人事天章第五十九 | 一四九 |
| 治大國章第六十 | 一五一 |
| 大國者下流章第六十一 | 一五二 |
| 道者萬物之奧章第六十二 | 一五六 |

| | |
|-------------|-----|
| 爲無爲章第六十三 | 一五九 |
| 其安易持章第六十四 | 一六一 |
| 古之善爲道章第六十五 | 一六四 |
| 江海爲百谷王章第六十六 | 一六七 |
| 天下皆謂章第六十七 | 一六九 |
| 善爲士者章第六十八 | 一七一 |
| 用兵有言章第六十九 | 一七五 |
| 吾言甚易知章第七十 | 一七六 |
| 知不知章第七十一 | 一七八 |
| 民不畏威章第七十二 | 一七九 |
| 勇於敢章第七十三 | 一八〇 |
| 民不畏死章第七十四 | 一八二 |
| 民之飢章第七十五 | 一八四 |
| 人之生章第七十六 | 一八六 |
| 天之道章第七十七 | 一八七 |
| 天下柔弱章第七十八 | 一八八 |
| 和大怨章第七十九 | 一九〇 |
| 小國寡民章第八十 | 一九二 |
| 信言不美章第八十一 | 一九三 |

附 錄

| | |
|-----------|-----|
| 現代と老子の柔の教 | 一九七 |
|-----------|-----|

改版發行に際して

昔、雲門は自分の所説を學人が筆で書き留めるのを非常に嫌つて絶対に書かせなかつた、ところが其の弟子香林は雲門の尊い所説を後世に傳へたいといふ願心から紙の衣を作つてそれを着て師の説かれる所を聞くに従つてソット自分の着てゐる紙衣に書きつけてゐた。雲門は香林が禁を破つて書き留めて居ることを知つたが其れを見て見ぬふりをしてゐたといふことであるが、今、自分の如き淺學の者が西先生の深遠なる所説の一端を世に傳へんとすることはをこがましきことであり又老子の無爲の教の主意にも遠ざかることになるが、敢てそれを爲すは師の教を受けし者の一人として吾が心中已むを得ざるものがあつたのである。

尙先生は寸暇もなき御身であるに拘らず朱筆を執つて筆記原稿に一々訂正補筆を賜つたことは誠に感激に堪へざるところである。

終りに附録として「現代と老子の柔の教」といふ論文を附け加へた。これは大

正十二年頃に先生の著書「教育と道徳」(大村書店發行)の中に載せられたものであるが、本文理解の助けともなり又老子の原文を参照し得る便宜もあらんかと版を改むるに際して附加した次第である。

昭和十四年二月十一日

函館師範學校にて

本間日出男識

西先生講述

老子講義

本間日出男聞記

老子の思想は東洋思想の一大方面ですから、一度は知つて置かなければならない。支那には佛教が這入つたが、それは他所から這入つたものです。佛教の大乗に餘程よく似た近いものである。道はいづれ一つだから儒教にもさういふものがあるのだが、儒教では名分を明らかにすることが眼目になつてゐるが、名分を餘り立てると却つて治まらない。名分も何もない本を老子は云つたもので、名分を用ひて行く根本の心持を説いたものと云つてよからうと思ふ。

老子には多くの解があるが廣瀬淡窓の解(老子摘解)がよく當つてゐるやうに思はれる。淡窓は日本ではよく老子を理解した人である。又澤庵和尚の解もよい。老子は佛教と通じたもので、僧のした解はよく當つてゐるやうに思はれる。儒者の解は字句に捉はれるところがあ

老子については、老子は孔子よりも少し先輩であるとも、又後のものだとも云はれてゐるが、此處ではそんなことを穿鑿するのではない。兎も角老子といふ一つの思想がある。東洋の三大思想の一つである。書物が出来たのは後世であるにしても、其の思想の種はずつと前からあつたもので、さういふ大思想は支那民族のずつと前からあつたもので、それを見て行かうとする立場である。

老子五千言で、これで大いなる思想を現はしてゐる。世界に珍らしいものと云つてよいのです。老子は周の時代に孔子より少し前に出で、賤しい役人であつた。關所を通る時に何か一つ書き残して置いてくれと頼まれて書いて残して去つたと云はれてゐるが、それに現はれたものは老子自身の書いたものかどうだかは茲では問題ではない。後に書き加へたものであるにしても一貫した思想である。

道可道章第一

道可道非常道。名可名非常名。無名天地之始。有名萬物之母。故常無欲以觀其妙。常有欲以觀其徼。此兩者同出而異名。同謂之玄。玄之又玄。衆妙之門。

道の道とすべきは常の道にあらず、此の章は老子全章の眼目となる。此處で老子の老子教の全貌が見られると云つてよい。又よく引用される言葉である。道の道とすべきはといふのは、此れが道だと斯う名ざすと、さういふ道は本當の道じやない。本當のものは變らない。此處が道だと押へて、此れに相違ないと限定していふやうな道は本當のものでない。道は有の儘のものである。曲つて居れば曲つた儘に、眞直なものは直な儘に道である。柱は豎、鴨居は横、其の儘にある。何でもあるがまゝが道なれば、特に道といふものがない。凡て道ならざるものはないといふことになる。

名の名とすべきは、常の名にあらず。譬へば、今これを名について見るに、これは水である、これは火である、これは牛である、これは馬であるといふやうに、又これは牛である馬

でない。彼にあらすして此、此にあらすして彼と名指すものは本當の名ではない。皆んな相對的なものに過ぎない。假のものである。炎々と燃えるものが火だと云つてあるのではない。假に火と名附けたのである。流れる水を川といふも只約束に過ぎない。それで名に拘泥して彼此云つてゐると、ものゝ真相を取り違へるものである。今日の哲學で普遍妥當性といふとはやそれに拘泥して物の道理を知る上に邪魔になつてゐる。西洋の哲學者が認識論の上に云つたことを、其れに泥むと真相を失つてしまふ。凡て名に拘泥する所から争ひが起る。世間の事は其處から六ヶ敷なつて来る。さういふ名といふものは本當の名ではない。其の様に道といふものも是れが道だといふと道でなくなつてしまふ。

無名は天地の始め。天地の始めには名は無い。天地が開けた時に俺は天地だと言つたことはない。西洋倫理で理性を研究するが、俺は理性だといふことはない。凡て天地の始めは名がない。名がなければ、あゝだ斯うだと示すべき名は無い。そこで有名は天地の母。名といふものがあるによつて萬物が始まつて来る。これは牛だ、これは馬だといふ。又かういふものが國家だ、又斯かるものが社會だ、これが利益社會で、こんなのが共同社會だといふが、皆畢竟便宜から來たものである。名のある事と萬物が起る事と同じことである。無名が天地萬物以前であつて、名といふと兎角名が現はす、言葉といふものが表はす。

無欲によつて其の道の妙を観んと欲す。無欲でないと道が見えぬ。欲があると其れに拘泥して道の妙なる所が見えない。欲といふと、名利の欲、食色の欲等をいふが、茲では一切の念慮の動くのを皆欲といふ。必ずしも食色の欲を逞しくするか、名利の欲を逞しくするといふことを指したのではない。佛教で云へば、煩惱一切を欲といふ。其れを離れて始めて道が見えるのである。其の妙を見るといふのが眼目である。

常に有欲にして以て其の微ミクロを観る。ここで其の微といふのは竅で、隙間、穴である。物の由つて生ずる所である人間の耳、目、口は皆穴である。見たいと云ふ欲があるのは、目といふ穴があるから見たいといふことになり、耳といふ穴があるから聞きたいといふことになる。目といふ穴があるから美しいものを見ては、美しかつたもう一度見たいと思ひ、口といふ穴があるから食べて甘かつたら又食べたいと云ふことがある。

此の欲があるから道が見えないのだが、是れが又人間の妙用なんでせう。元來肉體は込み入つた組織なんです。様々な穴がある。見たり聞いたりする所がそこが人間なんです。これが無くなつてしまへば人間でなくなる。有欲にしてといふのは、人間に七つの穴がある。此處に目があつて見る、成程面白いものだ、其の微の妙なる所を見るのである。生れながら欲のない者は、随つて覺りもない。欲があればこそ悟りの妙味もある。欲があつた所に幸福な

人間の生活もある。

此の兩つの者同じく出でて而て名を異にす。無欲も有欲も出所は同じである。二元的なものでない。皆道から出たもので、無欲の儘が道であり、有欲のまゝが道である。同じ所から出て只名が違ふだけである。此の有欲、無欲同じ所を玄と云ふ。玄は奥深いことを云ふ。普通においては見難いからこゝを玄といふ。有欲がそのまゝ無欲だと知つた時には其處が玄である。奥の又奥である。玄の又玄、は言葉の文である。こゝが衆妙の門である。門といふのはくゞる門でない。門を入れれば其の境内になる。衆妙といふのは別に妙なものがあるのでなく、ありとあらゆるものが妙である。そこでよろづの妙で、それが境涯である。茲の門は入口でない。境涯を云つたものである。

特に道といつて、是れが道だといふものでない。柳は緑、花は紅、柱は堅、鴨居は横の様に、そのまゝが道である。と云つて、楠公の忠、尊氏の不忠の區別が無くなるのでない。逆賊は逆賊である。それなりに道が見えてゐる。本居宣長などは、皆神様の業だと云つてゐる。禍津日神の仕業である、人間が如何ともすることは出来ぬ。そこで禍津日神の御氣嫌をとつて早く行つて下さるやうにお願ひするとさういふ悟つた境涯を云つて居る。然し楠公でも尊氏でもどちらでもよいと云ふのではない。宗教の世界は其の取りやうが悪いと道徳を無視す

るやうになる。一方を取つた以上は、其れを何處までも守ることがあつてよいのであるが、茲は根本を説いたものであるからである。

天地皆知章第一

天下皆知^レ美^ニ之^ヲ爲^ス美^ニ。斯^レ惡^ニ已^ミ。皆知^レ善^ニ之^ヲ爲^ス善^ニ。斯^レ不善^ニ已^ミ。
故^ニ有^ル無^ニ相^シ生^ス。難^シ易^ニ相^シ成^ス。長^シ短^ニ相^シ形^ス。高^シ下^ニ相^シ傾^ス。音^ノ聲^ノ相^シ和^ス。前^ニ後^ニ相^シ隨^ス。是^レ以^テ聖^人處^ニ無^ニ爲^ス之^事。行^ニ不^レ言^フ之^教。萬^物作^ヲ焉^ニ而^シ不^レ辭^ス。生^ニ而^シ不^レ有^ル爲^ス。而^シ不^レ恃^ス。功^ヲ成^テ而^シ不^レ居^ス。夫^レ唯^ニ不^レ居^ス。是^レ以^テ不^レ去^ス。

美といふのは形に顯はれたもので、聲が美しいとか、色が美しいとかで、善と云ふものは形に顯はれないものをいふ。廣く天下の人は皆これが美だと固く心に思つてゐる。さうする

と皆悪のみ。此れが美だと固く思ふと、さうすることが其の儘悪となる。長所は短所といふが、其のことである。其の場、其の場のものとするれば、長所は短所となるのではない。長所の外に短所があるのではない。立場によつてさうなるのである。是が美だ、是が善だと思つて居ると、どうしても此の善でなくてはならん、どうしても此の美でなくてはならぬとなると他のものを捨てることになる。さうすると其のまゝ悪となるのである。元來一物として捨つべきものはない。何でも使ひ方によつて皆役に立つ。牡丹が美しいといつても、世の中が皆牡丹では牡丹が美しいと云ふこともなくなる。元來これが美だと知つたといふことは悪を知つてのことである。善と言つた時には既に悪が顔を出して居る。隣に悪が來て居るから、美と知り善と知るのである。故に有無相生する。有は無によつて生じ、無は有によつて生ずる。有ればこそ無くなる。始めから無ければ、無いといふこともない。木の葉があるから落ちて無くなる。又葉が無いところから春になつて出るから有るのである。無より有、有より無で有もあれば無もある。有無相生する所を云へば、譬へば難易相生す、難かしい事があるから易い事があるのである。日本中坂道ならば難路といふこともなくなる。長短もさうで、長いによつて短があらはれ、短かいによつて長いがあらはれる。凡てさうである。物の音と人の聲と相和する。鉦太鼓の音に和して人が歌ふ。前後相隨ふ、前があるから後もある。丁

度そのやうに、有無相生じ善悪相生するのである。是を以て、即ち有無相生するものだから聖人は知つてあゝしよう斯うしようとしない。自然に任せて拵へことがない。併し何んにもしないことではない。無理の無い所を行くのである。劍道で云へば向ふに隙間があれば竹刀が這入つて行くので、欺したり、すかしたりして隙間を作るのではない。何ともない事をやつて行く。

不言の教を行ふ、といふのは、斯うせよあゝせよと口では云はない、不言の教である。普通の不言の教とは、口で云はずして爲て見せる事を云つてゐるが、茲ではどうかうのと理窟を云はぬこと、それが善いのですね。國體の精神とか、是れが日本の精神だとか、此れは間違ひだとか云ふが、論争では一方が勝つと云ふことはない。何とか理窟の附くものであつて、その争ふことが本來の精神に合はぬことになる。

萬物作る。万物をつくるとは云はない。又生ずるとも云はない。草が生えても天は辭せない。多ければ多い、尠なければ少いで成るまゝになす。そこで萬物が生じても我が物だとなない。僅かなものでも兎角生ずると我が物としたがるものであるが、斯ういふことがない。世の中の事は凡て創作した、作つたといふ。特に現代はさうですね。生産過剰だとかいふ。舍でも生産過剰で作らない田を作つたらよからうと云ふ様なことになる。

此れは自分がしたのだといふ所がない。爲しても、自分が爲したとしない。恃みにしないだけでなく、忘れて居る。善い事なれば他の人がしても自分がして善いのである。功成つて居らず、物を生ずるのも皆手柄であるが、手柄が成就しても自分が其の手柄の上に居らない外の様思つてゐる。居らなければ去るといふこともない。始めから居らんから去ることもない。どんな位に居つても、居りながら別にそれに心を懸けて居らなければ、去つたといふこともない。入れば出る。生ずれば滅する、會ふ者は分れる、生者必滅會者常離であるが、遣入つたとするから出る事があるので、金が懐に遣入つても俺の物だと思はねば、出て行つても無くなつたとは思はない。凡て心の置所からさうなるのである。例へば貯金をして通帳を出しては積つて行くのを樂しむといふことも、いつ迄も其れが心に留まつて居ないならば、無くなつても其れ迄のことである。美の美とすべきは美に居るのです。善の善とするのも居るのである。居つては本當のものではない。

不尙賢章第三

不尙賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見見可。

欲^ス使^ム心不^レ亂^ル。是^ヲ以^テ聖人之治^ハ。虚^ニ其^ノ心^ヲ。實^ニ其^ノ腹^ヲ。弱^ニ其^ノ志^ヲ。強^ニ其^ノ骨^ヲ。常^ニ使^ム民無^レ知^ル。無^レ欲^ス。使^ム夫^ノ知者不^レ敢^テ爲^ス也。爲^ス無^レ爲^ス。則^チ無^レ不^レ治^ス。

賢を尙らず、儒教の言葉で云へば尙ぶなんです。誇つてはいかない。老子の主意から云へば尙ぶといふことが早やいけない。賢を尙ぶと其處が争の本となる。元來世の中は其の差別に拘泥する所から事がむづかしくなる。老子は其處を超脱したものである。賢だ愚だと云はない。善人は榮えさうだが、さう早く榮えないものである。愚人は貧賤に陥りさうだがさうとも行かない。悪人がすぐ災難に訶なまれることもない。さうて、きは、きしたものでない。差別をさうて、きは、きしてはたまらないものだ。其れでは世の中は立ち行かない。そんなら人殺しをしても濟むかと云へばさうでもない。何時か見附けられて罰せられる。天網恢恢疎にして漏さず、取り逃がして居るやうだけれどもさうでない。大いに善を行ふ人は何時か世に認められて幸になる。莊子は、悪い事をしてよいが首を刎ねられる様な悪いことをするな善をしてもよいが名を成す程の善い事をするなと云つて居る。物を極端に云はないところ

である。それと同じ精神である。現今は優勝劣敗と云ふ、さう今日のやうにきつく云はない。例へば入學試験だと、難關を突破して這入つたと云ふから世の中が試験地獄で六ヶ敷なる。文化といふことは、人間の拵へ事が重なり重なつて來ることなんで、老子は文化を有難がらない。賢人だと云つて持囃さず、そこで無能だと云つてすぐ免職にしないが、有能な者は何時の間にか上の地位に上り、一時の成功は長持ちがしない。元來賢人を尙んで、あの人こそ用ひて行かうとなると皆競争するやうになる。又用ひられると何か一つしなければならぬと何か目論んでやる。其れが争の本となる。

また本當の寶は得易いもの、空氣、水、米とか麥とかは得易いものだが、得難い金とかダイヤモンドを得ようとするから世の中が難儀になる。遂に泥坊する様にもなつて來る。それが周の時代の有様であつた。やはり今日もさうである。そこで老子はその半面を見せたので半面を知つて其の他の半面が役立つので、世の中の緩和劑である。田舎で百姓をして居れば美しい着物を着たいとは思はぬが、町に來て人が美しい着物を着て居るのを見ると欲しくなる。心を亂れしめる。今日汽車に乗ると贅澤を覺える。食堂に這入つて、あんな御馳走があるかと知ると食ひたく思ひ、一度食つて見て甘ければ、もう一度食ひたくなる。腹一杯麥飯を食つておけば、どんな御馳走を見せても欲しくなくなる、却つて嫌になる。心を虚しくす

るのは丁度腹を満すやうなものである。

其の志を弱くして其の骨を強くす。老子の弱いといふのは柔軟のことで、謙遜のことである。角々しく己を張らないで、心の優しい謙つたことを云ふ。虚しいならば、例へば自分に一文無と心得るならば謙遜する。腹一杯食つておれば謙遜であつて、物に動じない。一物を持つて、あゝしようかうしようといふ事があると動く。一番下の位に居れば落ちることはなし。一番高い位に居れば、動けば落ちる迄である。一番下なら動けば上るより外はない。さうすると骨を強うすべしで、將校でも下の者は命懸けの事をするが、上の者はまあ止めて置かうと骨が弱くなる。

知ることなく、欲することなからしむ。兎角知るといふことがいかない。知るから欲する。老子は莊子と違つて、天下國家を治めることをいふが、儒教と違つて、唯その裏を行くだけである。夫の知る者をして敢て爲さざらしむといふのは、あれは見識者だ、手腕家だと云つて使ふと様々な事をし出す。やらうと云つて腕を鳴らして居る者にやらせたら何をしでかすか分らない。「大臣になりたくない者を大臣にする」とプラトンも言つてゐる。兎角せんでもよいことをするからむづかしくなる。やつても、やつても足らないが、自ら事を設けてむづかしくしてゐる。教育にしても、色々と學校で事を設けてむづかしくしてゐる。研究會だの

雑誌の發行だのと事を設けて、それで子供がうまく教育されるかといへば、さうでない。何にも爲なければ、無能だと思はれるから態とする。無爲を行ふ、爲す無きを爲せば凡ておさまつて行く。然し斯うは云つてあるが、是れを實行するとなれば却つてむづかしいと思ふ。老子は其の心得を云つたものである。

道 沖 章 第 四

道^ハ沖^ニ而^テ用^ラ之^ヲ或^ハ不^レ盈^ク淵^乎似^ニ萬^物之^宗挫^ニ其^銳解^ニ其^紛和^ニ
其^光同^ニ其^塵湛^兮似^レ若^存吾^不知^ニ誰^之子^象帝^之先^一

或ひはとか、似たり、とか云ふところが老子の特色である。あゝかも知らん、かうかもしらんと、てきはき、云はない。沖は空虚なことで、道といふものはむづかしいものではない。何も無いといふのではない。差支へないものだから無いんですね。喋つても差支へないことを言へば耳に立たない。餘計なことを言へば、一言云つても最う澤山だといふことになる。道はこれを善き程に使つて行く、能率を上げよう、充分絞つて使はうといふから悶著が起る。

然し充分使ふなとも云はぬ。能率を上げるなと云へば角が立つ。まあ上げぬ方がよからうといふところである。家を建てるにも、文化住宅を建てるといつて、寸分の無駄のないといふ風な家は飽きがすぐ来る。無駄な所があつて却つてよいことがある。

道と云つてあるが、元來それが問題であるが、其の道は淵、深い、その道から萬物が出て来るので、萬物の本源に似たり。本源だとも云はない。何だか斯ういふやうだと云ふ。其の鋭さとはその心の鋭いこと、鋒先の鋭い所を磨り減らす、譬へば頭が鋭敏でもそのまゝ露はさない、それでは人がたまらぬし、又自分の身を危ふくする。其の紛を解く、紛は心即ち知情意の往來である。煩惱のことである。自然と起つて来るもの、それを解きほどこく、超脱することである。と云つて、それが有つてもそれに取り合はないこと、丸切り無くしてしまふことではない。

其の光を和らげる。其の智徳の光を和らげて光らぬやうにする。塵とは世間のこと、世の中で、我れ獨り澄めりといふやうな顔をしたくない。其の儘にして其れに取合つて居らない。塵に同する。兎角かど立てない。湛としては水の溜つてゐることで、道のあるやうなものに似てゐる。一体目立つたものは、あれは誰の子かとすぐ尋ねるものであるが、道といふものは誰の子か、世の中を治めた五帝以前に似て居る、どうやら其のやうだ。(四月二十八日講)

天地不仁章第五

天地不_レ仁_〇以_ニ萬物_一爲_ニ芻狗_一。聖人不_レ仁_〇以_ニ百姓_一爲_ニ芻狗_一。天地之間_〇其猶_ニ橐籥_一乎_〇。虛而不_レ屈_〇動而愈出_〇。多言數窮_〇不_レ如_レ守_レ中_〇。

これは老子と儒教とのやり方の違ふ所を云つたものである。儒教では仁が根本となるが、老子の道は何ともない所、仁とか不仁となると一段下つたものとなる。仁といへば不仁に對立したもので、はや一段下つたものとなる。仁は不仁に對するものでないので、天地は仁とか何とかいふものではないことを仁と云つてあるので、老子では道を天地で現はした。道は天地自然で一つとして拵へごとがない。それで芻狗、犬で、草を以て狗の形に作つたもの、本當の犬ではない。藁の犬を作つて祭に用ひ、祭が済むと捨て、しまふもの、其の場に使つて其の場に捨て、しまふ。そのやうに天地は萬物を生むが俺が生んだのだと云はない。生みつぽかして、特にだき抱へてそれに捉はれることはない。雨降らば降れ、風吹かば吹け、さ

うしておいて萬物を生々してやまず。其處が道の道たるところである。天地の行き方を以て手本とする。民を育ふところの政治も丁度そのやうに仁政を施すの何のといふことにこだはつたのではない。百姓を擱へて可愛い、何とかするのでない。自然に育ち、其の場に行ひ其の場に忘れてしまふ。其の場に人生を行ひ其の場に人生を忘れてしまふ。其の邊が儒教と違ふ所なんです。

大きな天地といふものは丁度輪_カのやうなものである。輪の中には何も這入つて居るものではない。そして屈せず行き詰らない。空氣か水の這入つて居るやうにあるのならば、吹き出してしまへば無くなるが、中に何も無いからいくら吹いても風が出て来る。中に入つたものなら千万の量_カを極めてゐても無くなつてしまふのであるが、輪は中が無いから動かせば動かす程出て来る。盡きない。天地不仁であるから萬物を生じて盡きることがない。親が子を育てるが其の場其の場に世話をやいても忘れてしまつてゐる。人のことであると、斯ういふ世話もした、斯ういふ盡力もしたと思ふ。さう思ふと最う是れ以上盡くせないといふことになる。我が子のことであるといくら盡しても忘れてしまつて斯うもしてやつたとは思はない。其處を不仁といふ。日本でも本居宣長が忠だ孝だと云ふのはよくないのである、親の慈悲も孝行もない所に慈悲とも孝行ともなるのだと云つてゐる。是れは理窟をこねたものでない。

實際さうなんです。

多く言へば數窮る、元來天地とか道はあゝだかうだと説明する程差支へる、あゝだと云へばあゝ差支へ、かうだと云へばかう差支へが出来る。片端しか掴まへられないから差支へる云へば云ふだけ角が立つ、多く云へば言ふ程差支へが出来る。網を細かにする程小さい魚が捕れるやうに、細かく法を作る程罪人が多く出来る。疎にするがよい。天網恢恢疎にして洩らさずで、今日でも小作爭議で調停法を設ける、それで済むかといふと、さうでない。細かい規定を作る程多く引懸つて来る。根本を修めなければならぬ。まして天地といふやうなことは、哲學者が多言を費せば費す程分らなくなつて来る。

中を守るに如かず。…黙つて居ること、じつと腹に藏つて知つて居るに如かず。それを説明しようとすると言つてしまふ。西洋でも「沈黙は金なり」と云つてゐる。佛教の方でも文珠と維摩との問答で、文珠は色々と言つてしまふ「維摩の一默雷の如し」とある。口をつむいでしまふ外はない。さういふ道であるから、仁だの愛だのと小癡なことをいふと真相を失つてしまふ。斯ういふ所は老子の特色である。莊子に大仁は不仁とあるが同じ意味である。「至徳之世相愛而不_レ知_レ以爲_レ仁」とあるが、至徳は相愛してそれが仁だといふことを知らない。仁ばかりだから仁といふことを知らない。それが至徳である。これも同じ意

味である。茲に「物と相和する」といふことがある。それとびつたり一つになつてしまふからして、例へば親と子が隔がないから別に子の爲とは思はない。子も親の通りになつてをれば親の爲に斯うするのだとは思はない。天地萬物二つでないから物と相和するのである。「林鳥相忘不_レ避_レ人」といふことがある。林の鳥が人と相忘れて人が來ても人が來たとは思はない、驚いて飛び立つことはない、人が來てゐても來てをらんと同じことである。例へば來客があつても客が來られたと覺悟すれば何ともない、相忘れる。聖人と百姓に於ても同じことである。それを養ふのを中を守るといふ。

谷神不死章第六

谷_レ神_レ不_レ死。是_レ謂_ニ玄牝_一之門。是_レ謂_ニ天地之根_一。綿綿_レ若存_一。
用_レ之_レ不_レ勤_一。

谷は物の「うつろ」な所、つまり虚しいことを現はす、谷神はその「うつろ」の魂で、虚無の道を云つたものであるとの説もあるが「うつろ」の神とは少し念が入り過ぎる。これは神を養つ

て死せずとの解がよいかと思ふ。谷は穀と通じ、穀はやしなふといふ。養ふと云ふのは中を守るに如かずで、餘り心を用ひない、じつと黙々として守つて居ること、是れが神を養ふことである。不死といふのは死なないといふことでなく、長生きするといふ意味で、永遠に死なないといふ意味ではない。養ふといふのは儒教の徳を養ふといふ意味の養ふとは意味が違ふ。老子は徳だの不徳だのといふことはない。何ともない所を道とする。神を養ふのも其れなんで、斯ういふ修養をしたらよいとかいふのではない。心を静かにする、虚静で、さうすると長生きする。是を玄牝、玄は奥深いこと、牝は雌、雌といふものは凡て静かなもの柔なるもの、剛に對して柔で、動に對しては静かなもの、女性は静かで柔和である。道は虚静な所から剛直な作用らきが出て来る。奮闘ばかりでは何時か倒れてしまふ。夜は休むから晝活動が出来るので、人生全體に通じてさうである。大體、老子は闘ふといふ言葉を嫌ふ。此の頃奮闘とか戦ふと云ふことが流行る。闘志の無い者は死んだ者のやうに云ふ。奮闘と云つても喧嘩腰で居ることは日本では褒めないことなんです。柔静、これが道に近いのです。それで牝といふことで表はす。周易は剛の方を本とする。歸藏の易は坤を本としてをる。老子は歸藏の易と同じことで陰を本とする。人間で云ふと女性は静かで柔和である。積極的に出ないその方が道の本體に近い。玄といふのは、元は黒いといふ意味だが、牝は動物の雌であるが

文字の使ひ方は老子の方はインプレッシブ(impressive)になつてをる。角立つてをる。老子はさうなると強い言葉を使つてある。孔子は何でも目立つやうなことはせられない。實行から云へば老子の趣旨と合つてゐる。老子の使つた言葉はきつ、いと云つてよからうと思ふです。

門といふと入り口といふことではない。何も門と云つても入り口でない、部門です。玄牝の所といふことです。是れは哲學の部門である倫理學の部門であるといふやうに領域といふことです。之を天地の根といふ。精神を餘り使はないのが長生きすると云つたが、それが玄牝で、雌の奥深い所で、そこから天地も出て来る。さて天地の根といふ程のものなら嚴然として在りさうなものだが、綿々細々と續く、絲を引張つたやうに有るか無きかの如くにして消えない、續いてゐる。有ると云へば有る、無いと云へば無い如くである。老子は斯うだと云はずして、此の様だとある。

之を用ひて勤めず……神を養ふ所、此の道を用ひて行くこと、勤めるといふのは勉強する是非かうしよう、是非あゝしようとするのが勤めるので、少しでも能率をあげようとか、何かやらねば無能と云はれるから、頻りにやるのが勤めるで、其の場の必要があればやる、それは勤めずで、已むを得ずやれば目立たない、獨でに成つて行く、そこで行詰りが無い。い

くらでも出来るのです。

獨逸民族は勤めるですね。勿論勤めるのが人間たる所ですが、能率を上げるのが獨逸人の主義ですね。だが能率主義ばかりでも行かない。イギリス人は何處となく謙虚な所がある。現在獨逸が勢立つてゐるが果して永續きするかどうか、ヨーロッパ人は形の上の効果をあげようとする。支那でも禮儀三百威儀三千の裏を老子が見たもので、文化文化といふから、さういふものではないと、其の活動はよいが、その活動の根本を云つたものである。これは我々にも當嵌まるもので、學問をする上にも公の仕事をするにも適宜考へてよからうと思ふ。と云つて横着をする事ではない。

獨逸人はこれをどう解釋して居るか一つ書いて見ませう。

O Geist, du tiefste Quell alles Seins,

Du ewiglich gehimsvolles Weifi

Der Himmel und die Erde sind dein Tor,

Dort, wo sie Wurzeln in dem ersten Sein.

Unendlich, unaufhörlich ist dein laises Walken

Und müheles wirst du dem Menschen dich entfalten.

韻をふんで譯してあるが大体の意味がどこか表はれて居ります、玄牝之門の門は入口ではないが Tor とあり、勤めずといふ所も眞意を得て居ないやうに思はれる。我々が玄牝とか根とか勤めずとか支那の文章を今日本の言葉に翻譯してどれだけしつくりと實際に分るか問題ですね。今此の獨逸譯と本文とを較べて見ても何處か其の意味が表はれてゐるが氣持が大分違ひますね。哲學の如きは抽象的で血肉の乏しいものであるから、いくらか了解し易いが、併しそれも血肉が土台となつて居るので本當の氣持を了解することはむづかしい。日本人の解と獨逸譯と何れが老子に近いか、老子に問つて見れば面白いことだらう。我々の方が老子に近いと思つてゐますけれども。

天長地久章第七

天^ハ長^ク地^ハ久^シ。天^ノ地^ヲ所^ニ以^テ能^ク長^ク且^ツ久^キ者^ハ。以^テ其^ノ不^レ自^ラ生^ズ。故^ニ能^ク長^ク生^ス。
是^レ以^テ聖^人。後^ニ其^ノ身^ヲ而^シ身^ヲ先^ニ外^ニ其^ノ身^ヲ而^シ身^ヲ存^ス。非^レ以^テ無^レ私^ヤ耶[。]故^ニ能^ク成^ス其^ノ私[。]

天長地久。天長節地久節といふのは茲から出たものでせう。天も地も永く亡びることなきもの、併し天地が長久であるといふのは自ら生ぜざるの故を以てである。俺が生じたのだといふことがない。天地は無心のものです。俺が生じたのだとなると長久でない。盡くることが来る。自ら生じたのだと思はない。わざと思はないのでなく、元來無心なんです。長久自ら生ぜざるの故を以てである。是を以て聖人は天地と徳を等しうするものです。天地の通りに倣ふのが聖人です。孔子と雖も「予言ふこと無からんと欲す、四時行はれ萬物生ず、天何をか言はんや」と云つて居られる。弟子に答へられてゐる時、もう何も云ふまい、天何をか言はんや、黙々として作つたと云はずに造つて居る。それで何も云はなかつた。孔子と老子は其處に至つては同じ所がある。茲に治論が違つてをる。聖人は自分の身を後廻しにする、我が身を忘れて人民の爲に盡す、愛の塊のやうになつて盡してをる。我が事を忘れてをる。すると人が却つて尊敬して崇める。自分で前に、さばり出るやうな者は何時か人が引込めてしまふ。是れが本當に先立つといふことです。自分が先に立たうといふのは例へば代議士が金を出して「出してくれ」といふやうなやり方で、さういふ流儀は老子の流儀ではない。元來東洋の流儀ではない。西洋でも宗教の方から云へば、キリスト教は矢張さうである。(西洋流は)それも希臘民族の性情から來てをる。我々は老子を學び學問によつて違つた天地のあることを知り

る。我を捨てゝかゝる、そこで我を存す。捨てるけれども人が大事にする。「身を捨てゝこそ浮ぶ瀬もあり」と云つてあるが、此れは萬一の場合に己を捨てることを云つたのであるが、平生からさうである。

二宮尊徳先生の歌に

己が身を元の主にかへしおき

民安かれと願ふ此身ぞ

とある。元來此の身は我が身でない。もう元の天地にかへし我が身を捨てゝ民の安らかならんことを祈られる。民の爲に力を盡され、當時にあつても尊敬されたが、現代迄も尊敬されて其の名が残つてをる。是れは儒教の方でもさうだらふと思ふ。「汝あるか我なきに非ず」無私だからさうなんです。これだけの事をしたと自ら生じないのだから盡きることはない。尊徳翁も終生活動されたが我が爲ではなかつた。我を爲すとは我が欲を遂げることではない。其身存すとは崇められることをいふのである。自ら生ぜずといふと林註に無欲心之意と云つてある。無心にしての意で、生じよう生じようと殊更斯うといふことが無いことをいふ。それですから老子の道のことを自然ともいふ。殊更やらない、「自ら然り」である。本居翁が漢意を排して日本の道を説かれたが、其處に自然といふ事が出る、そこで老子的であると批

評されてゐるが、老子の眞似をしたのではない。老子は儒教の裏の方を云つたものである。杜甫の詩に、

江山如_レ有_レ待。 花柳更無_レ私。
寂々春將_レ晚。 欣々物自私。

といふことがある、此れは身を後にすることを云ふ。春將晚、これは此頃の（五月頃をさす）時節で自然の草木自ら私す、私とは私欲を計るのでない、何も人の爲の何の爲もない、唯自分嬉しさに榮えてゐることをいふのです。

「池魚自樂誰知_レ我」、池の鯉が自ら悠々と泳いでゐる。唯自分の三昧境にあり人に見せるのではない。池魚自ら樂しむ境涯を誰が知るか。自らといふのも他と區別した自ではない。「林鳥相忘」と同じことである。花は自ら咲いてゐる、人に見せる爲ではない。さういふ境涯は老莊の境涯で佛敎でも衆生を濟度するものであるが、其の中に斯ういふ敎がある。儒敎は人生を行ふといふのであるが斯ういふ様子がある。西洋にもあるかも知らんが、老子の境涯これが「唯我獨尊」の世界なんです。併しこれを自分の實際にするには容易なことではありますまいが學問をすれば其の境涯を彷彿せしめる。今日の生存競争奮闘の世界を幾分緩和する、そしてさういふ世界と別の世界があるのだといふことを知らせる。これを老莊研究といふやう

に研究題目としては老莊の意にかなはない。

要するに文化といふことは人間が骨折つて耕すので、人間の拵へ事が多い。老莊は其の緩和劑である。老子の考へが漢民族にある譯である。漢民族は一番古い民族である、ギリシヤローマは亡びてしまつてをる。漢民族を攻撃した民族も、契丹、蒙古等は一時は漢民族を浸畧したが亡びつゝある、近いところで滿洲人も今日では段々亡んで行つてゐる。然るに漢民族は依然として存續してゐる。誰が來て政治をしようとも實質的には漢民族が勢力を持つてゐる。其れは老子のやうに負けて勝つといふところがあるからである。争はない。消極的であつて、陰の方である。

上善若水章第八

上善若_レ水。水善利_ニ萬物_一而不_レ争。處_ニ衆人_一所_レ惡。故幾_ニ於道_一矣。
居善_レ地。心善_レ淵。與善_レ仁。言善_レ信。事善_レ能。動善_レ時。夫惟不_レ争。故無_レ尤_ト矣。

最上等の善は譬へば水の如きものである。云ふのは水善く萬物を利する。水のお蔭を被らないもの一つもない。日本で唯神道(かんながらの道)神のまにまにといふが、水は其の器の通りになる。それが争ふ所がないことで、水は低い所穢い所に流れて行く、こんな卑しい所には行かぬとは云はぬ。好き嫌ひがない、寧ろ人の嫌ふ卑しい所に居る。故に道に幾し。道は丁度この水といふもので心得てほしい。道は水でないが道を得た者はこれに近い。或禪宗の坊さんが飯炊き役をしてゐた。他の者にもう飯を食はして後から小鍋に物を煮て食べてゐる。其れを他の僧が見て、内證で甘い物を食つてをらしいと告げた。行つて見ると、ぶんと嗅がした、此れは一体何であるか。其の坊さんの曰く「これは貴方がたのお上りになれるものではない。流しに流して溜つたものや残つて腐んだもの、人の食ひ残したものを集めて食つてゐるのだ」と云つた。衆人の惡む所に居るとは此のことで、誰もが欲しい所の物を食はず、皆の惡むところのものを食べてをる。

居善_レ地。地とは居るからして地といふ。何處に居つても居る所が善い、其の人が居れば何處でも善くなる。至る處に安んずるからして悪い地といふ處はない。皆善くなる。好き嫌ひは自分の私から起る。私が無ければ何處でも善い。

心善_レ淵。淵は靜深な所、心は深く靜かです。心は靜深なところ靜かなところ、靜深なんです。道を得て居る、與は共にする、仁は慈悲、慈悲を施すんです。これは感心な者だから慈悲を施す此れを遣らうといふのではない。高きも卑しきも、好きな者にも好きでない者にも、どんな人にも善くする。水が所嫌はず流れて行くが如くにする。頼朝の如く悪い者は必ず罰するといふ如くしない。言ふことを聞く者も、きかぬ者も區別を知らんかの如く與へ、慈悲を以て交はる。

言善_レ信。……有の儘を云ふ、お世辭を云はない。理窟を附けない。それが「水萬物を利する」で飾りが無い、それが本當の信です。お上手をいはず、理窟をこねない。唯有の儘を云ふ。政善治、とは、又政治では無爲を以て治めるのが治である。法を設けてするのではない。唯善い政治をすると云つただけでは意味をなさない。詰り無爲を以て治める。事善_レ能。能は能力あることでない。無心を以てするから何事も差支へなく通るといふことである。譬へば隙間があるから竹刀が這入るといふやうに虚心坦懐である。さうすると這入らざるを得ない。穴があれば水が流れて行く様なもので、殊更穿つのではないが、何處にでも這入つて行く。勤めずして萬能である。

動善_レ時。時を得る、進退時を得る、これも時を得ようと考へない、自然に進むべき時には進むやうになる。無心にしてそうなる。一言にして云へば争はずといふことになる。悪いこ

とも黙つて見て居るといふことではない。善し悪しを挟まないことで、強ひて卑い所に居るといふのではない。例へば御馳走を出された時それを強ひて断るのではない。そこが咎がな

三〇

持而盈之章第九

持^チ而^ニ盈^レ之^ヲ。不^レ如^カ其^ノ已^ニ。揣^ニ而^レ銳^シ之^ヲ。不^レ可^ク長^ク保^ツ。金玉^ニ滿^レ堂^ニ。莫^シ之^ヲ能^ク守^ル。富^ニ貴^ニ而^レ驕^ル。自^ラ遺^ニ其^ノ咎^ヲ。功^ニ成^リ名^ニ遂^ニ身^ヲ退^ク。天^ノ之^レ道^ニ。

持するといふのは確く執つて離さないこと。盈は一杯にして行かう行かうとすること。擗まへて離さず、もつと一パイにしようとするのである。之といふのは名利です。金ならば得たからはどこ迄も離さない。まだ一パイにらんまだ一パイにらんと、もつと一パイにしようとする。まだ百萬圓で足らんから千萬圓にしようとする。位でもさうですね。もつと高い位に昇りたいと思ふ。それが盈つるのです。何處で盈つるか限りがない。盈てよう盈てようとする心持である。本當に滿てば此の上滿てるといふことがないが、もつと／＼と思ふ

ことである。百萬圓になれば千萬圓になつたらと思ひ、千萬圓になればまだ其の上にならうと思ふ心持である。位でも矢張さうです。勳三等では足らんからもう一等得たいと思ひ、其れを得ればまだ足らん。一等で滿つるかと思ふと、其處にまだ何かある。物足らんと思ふ。それが已まないのですね。満足といふことを知らない。是れでよろしいといふことを知らない。其の上その上と得ようとする、ひつくり覆ることが来る。これは我々日々にあることです。高い者は高い者、低い者は低い者、金の有るものは有る者で、又無いものは無い者で、皆さうです。名利は世間の道德からいへば勿論さうですが、老子から云へば學問道德も皆さうです。有れば有つてよし、元來德に進むことは結構なことですが、老子の立場から云へばさうでない、其れでは際限が無くなつて来る。學問をしても、あの書物では足らん、此の書物では足らん、此頃はマルクスが流行るからマルクスを讀まうと思ひ、知らぬと足らんと思ふ。學問もこの足らんと思ひ知らうと思ふことで進むのであるが、老子にあつては、其れが争の本となる。金錢も得よう得ようとする所から争が起るが、思想なら思想の争が起る。それに憂き身を消すのは金錢に對すると同病なんです。足ることを知るは名利のみならず學德もさうである。

譬へば陰陽、晝夜といふことがある。又寒暑といふものがある。斯ういふものは相俟つも

三一

の、陰は陽を助け陽は陰を助ける。具体的に云へば男女もさうで、男は女を女は男と相俟つものである。又晝ばかりでも夜ばかりでもない。寒暑もさうで暖かいのがよいと云つても、年中暖かいのが善いわけではない。ハワイ等は一年中春のやうな氣候であるが、日本人などは一向善いとは思はない。偶たまに行つて見ると善い……これは自然と交代し助け合ふものです。

これと並べて、徳、不徳となると分りにくい、徳は不徳を助け、不徳は徳を助けるとなると、徳は不徳を助けるといふことは分つても、不徳が徳を助けるといふことになるに分らない。が併し、是れが世間の實際なんです。徳ばかりでは徳は徳でなくなる。孔子の天下に徳をすゝめたのも、釋迦が出家したのも世の中に悪い事があるからなんです。貧富ならば尙更です。我々が日常生活して行つてゐるのも皆貧からです。例へば机なら机は其れを作るには山から木を伐つて来て其れを骨折つて作り上げるのも皆貧からである。皆んなが百萬長者になつたら誰がそんなものを作るか。汽車が運轉されるのも、皆んなが百萬長者なら誰が火夫になるか、動くことが無くなつてしまひます。皆んな貧者があるからです。然し眼を轉じて観るとさうでもないところがある。それで老子から云ふと徳を尙ぶのでもなく、勿論又不徳を尙ぶのでもない。明と不明とあるが、皆明なれば、皆智慧を持つてゐると私などは食ふこ

とが出来なくなる。諸君よりも少しよく知つてゐる所があるからで、諸君もさうで、知らない者を相手にして行く。不明があるから明といふことがある。不徳があつて徳を磨く、徳があつて不徳を磨いて行くので、我々が皆んな徳ある者なれば釋迦もキリストも要りはしない。此の行き方も孔子と老子とで違ふ、孔子は不徳を引き上げて行かうとするが、老子は何ともないところを云つてある。そこで盈るといふことは名利も學徳も已むことを知ることなんです。

揣おさめて之を鋭とくするは長く保つべからず。揣めるといふ事は磨いて鋭くすること、鋭い上にも鋭くすると結局折れてしまふことになる。凡てさういふやうなものだ。揣めて鋭くするといふことは此れと云つては居らん、槍の鋒先に當嵌るが、何に就ても此のことが云へる。頭を鋭敏にするのも、切れ過ぎて却つて悪いことがある。ぼんやりしてゐるのが善いこともある。然しこれを悪い様に學んでばける人もあるが、これはずるいので、自然にさうならねばならんです。

金玉堂に滿れば之を能く守ることなし。金玉即ち金銀珠玉が家一パイに滿るとなか／＼三代と續かない。自分一代すら續くことはむづかしい。一時は富を蓄へても無くなることもある。まして子孫に至つては續かない。これも世間の實際ですね。併し金があつても、其れを盈

てないやうにする、他に施すんです、徳を施すんです。然うすれば満ちて溢れずといふことになる。これが長く保つことです。其の外驕らぬといふこともありますが、片端から片端から他に施すやうにするのです。富貴で驕りますと自分で自分に咎を受ける。或ひは子孫に咎を受くるんです。これも元來驕る考がなくても富貴になると奢るんですね。尊徳翁はこれを次のやうに云つて居られる。

一 寶開關 年々歳々
約 富奢貧 不止不轉

奢るから貧となる。貧となると約する。約するから富となる。

富めば自然と奢るやうになる。此の理を知れば長く保つ、長く難儀をしない。

そこで功成り名遂げて、……功名を成就して退くは天の道である。天然自然がさういふものなので、花が開いてしまへば散つて實の爲に讓る。是れは偉い人でもむづかしい。ブルタークの傳にも斯ういふ思想もあるが西洋は積極的ですから何處迄も行かうとする。例へばビスマルクも獨逸を統一してしまへばそれでよいのに、元の通りに何處迄も支配しようとするから若いカイゼルと衝突して悶々の



中に生涯を送らねばならんことになつてゐる。これは東洋的の道德の道であるが、これは天理です。それかといつて何も退くことを急ぐことはない。適當に時を知るのが大事です。

載營魄章第十

載^セ營魄^ニ抱^レ一^ヲ。能^ク無^レ離^ル乎^{コト}。專^ニ氣^ヲ致^シ柔^ク。能^ク如^ク嬰^兒乎^{コト}。滌^ク除^ク玄覽^ヲ。能^ク無^レ疵^{キズ}乎^{コト}。愛^シ民^ヲ治^メ國^ヲ。能^ク無^レ爲^ス乎^{コト}。天門^ヲ開闔^シ。能^ク無^レ雌^ノ可^ク。明^ク白^ク。四^ニ達^シ。能^ク無^レ知^ル乎^{コト}。生^レ之^ヲ畜^シ之^ヲ。生^レ而^テ不^レ有^ク。爲^シ而^テ不^レ恃^ム。長^ク而^テ不^レ宰^ス。是^ヲ謂^フニ^テ玄^ノ德^ト。

魂魄といふと魂は精神の方魄は身體に屬する方をいふ。魂が魄を載せるといふのは、精神が身體を載せてゐる、精神が主となつて身體を宰つて行くといふこと。此の魂魄が分れないやうにする。魂と魄とが離れないやうにする。營といふのは衛々です、或ひは營々で、元來養ふといふことで、我が肉體をさす。耳目口鼻は孜孜營營として我が身を養はんとしてゐる

ものです。我々が考へるのも耳目口鼻の欲を満たさんとして孜孜營營としてゐる。其れに追ひ廻されるから苦みが出て来る。魂魄を載せるものであると思ふとさうでなくなる。

抱」といふのは哲學でいふ統一性、プロチノスのヘンを離れない「一」は即ち我々の虚無です。耳目口鼻は唯載物で、そんなものが我々人間の本质ではない。離る無からん乎といふのは離れないやうにせよといふ云ひ方である。氣を専らにす、専らにすると靜になる。專一になると靜かとなる。心が分れ氣が散るから騒がしいのである。柔といふのは素直な事です。柔順といふ。順はそのまゝ受け取る、老子の道は唯何ともないもの、其の儘のもの、山は高し川は低し、柳は緑、花は紅と見る。是れはいかぬ是れでなくてはならぬといふことは分別で、それも大切だが、其の根本は柱は堅、鴨居は横といふ所です。本居宣長が禍津日神の氣嫌を取つて早く行つてもらふと云つてゐる。尊氏の出たのも禍津日神の業わざと見る。一般に宗教にはそんなところがある。尊氏はいけないと抑へるのは楠公、親房で、和尚さんは尊氏をも教へる、別に悪いと抑へない。道德と宗教の違いを云へばそんなところである。

柔順で嬰兒の如く人の云ふ通りになつてゐる。寝かして置けば其の儘寝てゐるし、おんぶすればおんぶされてゐる。柔を致すとは極地まで到ること、柔に徹底すること、順は西洋では宗教で教へる。西洋でも宗教では矢張さすがに順といふことを説く「惡に抵抗する勿れ」と

教へる。然し其の中に何程か反抗的なところがある。柔そのものを主張する様子が見えるが、老子は「恨に報いるに徳を以つてする」と云つてゐる。キリストは「上衣を取る者がをれば下衣もとらせよ」「右の頬を打たば左をも打たせよ」と云ふ。反抗氣分がある。老子では上衣を取れば取つただけでよろしいので、キリスト教の方はそれに較べると鬭争的な所がある。キリストの教は柔和な教であるがその中に挑む様子がある。又キリスト教の弘まり方にも其の様子があつた。兎も角も宗教は順である。中世の monastery の三つの誓の中の一つに柔順といふことがある。これが三つの誓の根本になるんです。一つは poverty 貧で、つまり物を持たないこと、もう一つは獨身 celibacy で、貧は物欲を絶つ、獨身は肉欲を絶つ、次に柔順で神の教に素直といふことであるが、柔とは自我をなくすること、丸切り任せることなんです。此の柔といふことが大事で、奮闘といふことをよく言ふが斯ういふことは現代の風、世間一般の有様なんでせう。現代如何といふのはいかないが偏つてゐることを知らねばならん。何處か奮闘しなければならんが、汗だくになつて奮闘するのは老子の道ではない。

滌除……名物の塵を滌すすぎ色々の煩惱をすゝいでしまふ。心を綺麗にする、そして心の奥深い所から物を観る。佛教に「妙觀」といふことがある。其處から物を観る。「無欲を以て其の妙を觀る」これが妙觀である。無欲がよい、有欲が悪いといふことではない。欲は欲なりに眞

理である。自分自身には欲を濼ぎ放つて、そこで有欲無欲を見る。煩惱の中にも眞理を見る。煩惱はいかないといふのではない。「毛を吹いて疵を求めると云つて思慮分別を逞しくするが、さうでなく「玄覽」すれば疵はない。清きも濁れるも共に見て行く、然し自分は清くせねばそれは出来ない。醫術が発達するとX光線で見るといふやうに診察は發達するが却つて毛を吹いて疵を求めて苦しむことがある。血壓を計つたりして今迄何とも思つて居なかつたのに計つて見て血壓が高いと云つては心配する。呼吸を調べてお前の呼吸は少し變だと餘り精密に見て却つて疵を探し出すと、心配して却つて悪い。それよりも斯んな風に血壓が高いが此れほどの程度のもので、此の位のことにはさう藥を飲んで役に立つものではない、さう健康に心配はないと見附け出す、そこは疵なからんである。

愛民治國……これは民を愛するのだ國を治めるのだとムキにならない、これが無爲で、無理の無いことである。何でもかうせねばならぬとすると却つて悪い。例へば寄附金を集めるのに何でも斯うせねばならぬと思つて集めると不承不承に出す人もあることになる。さうするとよくない。

天門開闔……天理は陰陽の作用らきとよくいふが、天門は女子の陰部、開闔は男女の交はり、男女の交はりはあるつても其の心はない。執着がない。雌雄の念慮が無いことでそれを

天地陰陽の道に持つて行くことが出来るが、雌雄の念の無い子供の如きもので、是れは男女のことだけを云つたものでなく一般のことを云つたものである。

明白四達……何でもよく分つてゐる、世間の事はよく知つてゐるが知つたと云はない。知つても知らん振りをするのでない。知つてゐるが知つたと思はない。自分が知つたと思へば他人の言ふ事は聞かない。知つたと思はんから人の云ふことはよく聞く、聞くから明らかになる。これは高いところを云つたもので、知ることすらむづかしい。況んや知つて忘れてゐることは尙更である。長者の家に生れた者は金の有ることを忘れてゐるかも知らんが、斯ういふことはむづかしい。

生之畜之……これは天地の作用らき、天地は萬物を生ずる。自分が生んでも此れは俺が生んだのだと思はない。萬物を成長しても主宰者となつて宰配しない。これを玄德といふ。文字の上で斯う見ることは出来るが、玄德とは果してどういふものか、實際はむづかしい。併し老子はさういふところに居つたのであらう。生じて恃まずといふことはむづかしい。生ずることが既にむづかしい。むづかしいから生ずれば恃みにする、何でもさうなる。學校でも創業當時は俺が折角骨折つて作り上げたとなると何時迄も宰配したくなる。生じて其の場其の場に忘れることはむづかしい。

三十輻章第十一

三十輻共一轂。當其無有車之用。埏埴以爲器。當其無有器之用。鑿戶牖以爲室。當其無有室之用。故有之以爲利。無之以爲用。



此の章は老子の道が一番よく分る。轂に輻を通す。そして空なる所に心棒を通して運轉する。三十の輻は一つ轂を共にする。其の穴、無に當つて車の用あり。其の穴が詰つてゐては車の用をしない。また空であるから輻が集る。そこで用を爲すものである。車は分り易いから例にとつてさう云つたが、これは何でもさうで、隙間の無いものは結合しやうがない。茲から物理学の接觸を考へて見たいと思ふです。觸れるといふことは一体どういふことであるか、觸れると一つになつたのか、それとも二つでなほ隙間があるのか、一つなれば接する

とも云へず、離れて居れば接するとも云へない。醫者が脈を見る時、手頭に接するが、觸れて一つになると分らない、又離れて居れば感ぜない。何でも空といふものがなければ一つにならない。粘土を捏て茶碗や皿などを作る。その無、即ち空いてゐるところから用ひられるので一杯土があつたら茶碗とならん。何も無いから、何でも入れられるのである。室を作つても、戸があり窓がある。之を全部壁に塗つてしまつては入ることも出来ぬ。中に一杯詰つてゐては室にならない。何も無いから入ることが出来、室の用がある。無といふものが用をなすからである。是れは何でも世間一般にさうである。

利といふこともさうである。又何の色も無い所に紅も緑もあり、高低の無い所に、山は高く、川は低いことも出て来る。赤色ばかりならば赤色もない。音も寂として音なき所から音が起る。凡て無といふことがあつて、有といふことがある。我々が知識を得るのもさうである。人と人とが協和するのも無があるからである。人の主張と自分の主張とを無くする、そこに協定が出来る。何程か譲る所がなければ協定は出何ぬ。西洋の繪は一杯に描くが、日本の繪は空いた所が多い。此の空いた所が用をなす、この空き方に大いに關係がある。何も描いてない所が大いに大切なのである。

五色章第十二

五色令_レ人目盲。五音令_レ人耳聾。五味令_レ人口爽。馳騁田獵。令_レ人心發狂。難得之貨令_レ人行妨。是以聖人爲_レ腹不爲_レ目。故去_レ彼取_レ此。

五色燦然たる美しい色は、それによつて人の目は亂れ眩んでしまふ。人は色を求めてゐるが、それが却つて目を盲せしめる。妙なものなんです。眩ますのです。それから五つの音、色々の音があるから耳聾になる。五味、甘い鹹い酸いかいふことがあるから、何が旨いか分らんやうになる。麥飯は旨いのに色々のものを求めるのは口がたがつてゐるのである。毎日料理屋のものを取つてゐるとさうなる。獵人は狂のやうになつて獲物を追つ駈けてゐる。普通の着物とか食物を求めればよいのに、得難いもの、食物なれば其の土地に出来ないで遠方から取り寄せたりなどして珍らしいものを食はうと思ひ、又何千圓出して軸を買つたとか指環を買つたとか、さうなると幾等金があつても足らんやうになる。手も足も出なくなつてしまふ。そこで聖人は心の内を養つて外物に心を向けない。五音五味得難き物を持つことを

捨て、無爲を取る。

「無相の相、無識の識を見る」といふのは無相の相を見るから本當に見るので、之を見ずして本當に見たとはいへないといふ意味です。色々のものゝ音を聞き色を見るから、精を傷け明を損する。エネルギーを傷け、明を傷附けるのである。そこ迄行かなくても善い色善い音を聞き、始終刺戟を求めると自然心が亂れる。此處等が、賀茂眞淵、本居宣長が自然と云つてゐるが、確かに老子と通ずるものがある。日本は單純である simplicity 其處に味はひがあるのである。伊東博士の建築の話の中に、日本の建築の單純なものは大社造り、伊勢神社などであるが、最も單純なものは四本の木で出来てゐる鳥居である。此れが日本の建築の一番簡單なものである。タウトといふ獨逸建築家は日本の建築で鳥居が一番立派なものである。何故日本人は之を日本のシンボルとしないのかと云つてゐるが、昔の通りに残つてゐるのは神社である。

老子は文化に反對したものであるが、反動的なものではない。支那人は文化を尙ぶが、文化は人間の拵へごとである。その一面に自然を尙ぶといふのがあるが、老子は其の一面を現はしたものである。(五月十九日講)

寵辱章第十三

寵辱若驚。貴大患若身。何謂寵辱。辱爲下。得之若驚。失之若驚。何謂貴大患若身。所以有大患者。爲吾有身。及吾無身。吾有何患。故貴以身爲天下。則可寄於天下。愛以身爲天下。乃可以託於天下。

若の字の讀方が問題になる。寵はつまり名譽のこと、辱は「はづかしめ」で、世間の富貴は寵、貧賤は辱で、それは驚くに足らんものであるが、しかも驚く。大いなる患ひを貴ぶことは、身は誰しも貴ぶが、そのやうに貴ぶ。澤庵には寵辱なんぢ、驚くと讀んである。寵を得ても辱を得ても心を動かす。嬉しいとか悲しいとか、心を動かされる。そんなものは驚くに足らないのにもか驚く。大患を貴ぶ若の身なりといふことは、身といふものがあるから大いなる憂ひがある。寵辱は若驚くとは何の意味か、寵は上、辱は下、富貴を得たならば上である。貧賤を得たならば下である。之を得ても驚き失つても驚く。辱を得ても殘念なことをしたと思ひ、寵を得ても心を動かす、得る方は辱、失ふ方は寵と見るとよく分る。上を得たら喜び

下を得たら悲しむ。意味は普通なことであるが文章がむづかしい。若の身があるから大患を貴ぶ、此の身があれば此の身を心配する。此の身さへなければ何の心配もないのである。それで身を以て天下を治むるよりも身の方を貴ぶ時は、これは林氏の讀方である。澤庵の方は貴ぶとは「はづかる」ことである。貴いものは軽々しくしない、それで身を以て天下を爲さむることをは、ば、か、る、時、は、と讀む。又次は身を以て天下を爲むることを愛む時はと讀んである。吾が身體を授け出して天下を治めることをはばかる。宰相の印章を帯びて天下を治むるよりも吾が身を大切にする人、そんな人にこそ天下を託すべし、總理大臣になつてくれと云つても其んなことは詰らんと吾が身を愛しむやうな人は天下を託するに足る。我が身を思はず大臣になりたがる人間を大臣にするなといふ意味である。此の吾が身を愛しむとは、吾が身一身の安樂をするといふことではない。斯ういふことを老子が云つたのは老子には元來天下を治むるといふことは單なる名利だから餘計なお世話だと考へてゐるので、大臣になりたくないやうな人こそ大臣とするに足る。プラトンにも同じことがある。「爲政者になりたい者を爲政者にしてはならぬ、爲政者になりたくない人こそ天下を治めさすに善い」と云つてある。此處では身といふ意味が違ふのである。此處の所を獨逸人はどういふ風に解してゐるかを見るに「身體を捨て、國家を愛せよ」といふ意味に取つてゐる。無垢子曰く「爵祿權豪は身の

大患なり、然るに世人これを貴重すること命の如し」とある。現代の世相は、世間の變態であるものゝ、老子に云はせると、總理大臣になつたが、夫れ見たことか、殺されたではないか、といふことになる。支那では「明哲身を保つ」といふことがあるが、支那の國情からすればさうであるが、日本の國柄としては普くない。天皇の臣民である。我々は飽迄天皇の爲に働かねばならぬ。個人主義の國では一身を全うするといふところがあるが、我が國ではさうでない。然し理としては通ずるものがある。

視之不見章第十四

視^レ之^レ不^レ見^〇名^〇曰^レ夷^〇聽^レ之^レ不^レ聞^〇名^〇曰^レ希^〇搏^レ之^レ不^レ得^〇名^〇曰^レ微^〇此^〇
三^〇者^〇不^レ可^〇致^〇詰^〇故^〇混^〇而^〇爲^〇一^〇其^〇上^〇不^レ皦^〇其^〇下^〇不^レ昧^〇繩^〇々^〇兮^〇
不^レ可^〇名^〇復^〇歸^〇於^〇無^〇物^〇是^〇謂^〇無^〇狀^〇之^〇狀^〇無^〇象^〇之^〇象^〇是^〇謂^〇惚^〇恍^〇
迎^レ之^レ不^レ見^〇其^〇首^〇隨^レ之^レ不^レ見^〇其^〇後^〇執^〇古^〇之^〇道^〇以^〇御^〇今^〇之^〇有^〇能^〇
知^〇古^〇始^〇是^〇謂^〇道^〇紀^〇

これが又老子流の文章を現はしたところで、道は如何に目を見張つても見えない、之を夷といふ。夷は平らなことで、平らなものは見えない。或は山が聳えてゐる、或は淵となつて深いといふものは目に着くが、平坦なものは見えない。之を夷といふ。或は夷をつねと讀むが、常とは變らないことで、何か變つたことがあると目に着き易いが、變つたことがない。又耳を欬ても聞えない。これを希といふ。之を搏れども取れない。之を微といふ微細な塵のやうなものは握らうとしても掴まれない。これは老子の道を形容したもので、其れを究めることは出来ない。詰は詰問の詰で、つきつめて愈々斯うだと云ふことが出来ない。故に混じて一としてしまふ。一は三つを合せて一にすることでない。この三つ(希夷微)は元來同じものであるが、三つ形容したから三つと云つてあるので、一と云つても數の一つではない。畢竟道のことをいふ、ヘン、カイ、パンといふプロチノスの「一」です。混は混同でなく渾沌としてゐることである。上つても皦らかでない、道は明らかでもなく暗くもない。道は分るでもなく、分からんでもない。見る眼があれば丸出しであるが、此れが道だと云つても分らない。二宮尊徳翁が、種から草になる、草から花になる、花から實になると云つて居られるが、是が悟道である。

一圓一元の根本を知るとなると誰もは分らない。道は少しも隠さず明々白々であるが、視



元一圓一

れども見えぬ、聴けども聞えないものである。森羅萬物、名の附けられない程多くあり、有餘る程あるが、けれども皆物の無い所に戻つてしまふ。元無い處から出たから復た無い處に歸つてしまふ。次々に代りが出て来るから何時もあるやうに思ふが、萬物皆無きに歸する。いふのは元無かつた處から出るからである。

無より出て無に歸るといふのが老子である。物無きに歸つたと云つて物無きところを見た理ではないがそのまゝにして無いところを見抜く。形なき形、無狀の狀、それを無象の象とある、何だか無いやうである。極樂があるとか寂光淨土があるといふが、目を開いてもある譯でない。見ゆるものは唯混濁の巷である、然し其の中に金剛不壞のものがある。然し出して見せよと云つても出せない。永遠なものがなければ、此の世に根柢が無い。佛教に「無相の相を相として」とあるが、佛教の梵語を解釋するには老莊の文章を使つてある。是を恍惚といふ。夢現ではつきりしない。有るかと思へば無い、無いかと思へば有る。之を迎へる、即ち前から見ても頭が見えず、後について行つても尻尾が見えない。古の道、これは實在的の古で、古いといふことでない。それを掴まへる。執れども得ないところのものであるが、それをしつかり呑込む。元來我が身があり社會がある、又萬物がある。それで人間は持て餘して

をる、それで困つて居る。それを何で操つて行くか。萬古不變の道を會得して居れば順境にあつても、逆境にあつても、大波小波、何に出逢つても御することが出来る。能く古始即ち古今を超脱した道を知ること、これを道紀といふ。これはつまり形容しただけで取り着く嶋もないやうなことです。

古之善爲士章第十五

古之善爲士者。微妙玄通。深不可識。夫惟不可識。故強爲之容。豫兮若冬涉川。猶兮若畏四隣。儼若客。渙若冰將釋。敦兮其若樸。曠兮其若谷。渾兮其若濁。孰能濁以靜之。徐清。孰能安以久之。徐生。保此道者。不欲盈。夫惟不盈。是以能敝不新成。

古の善く士たる者は、……古の善士はといふことで、偉人と云はずに善士と云つてあるとこ

ろが面白いところです。見る目を持つた者には微妙玄通にして（妙なる奥深いこと）、其の奥深い所を體得して居るから深遠にして知ることが出来ない。偉いとか何とか滅多にはれない。さういふ古の善士は何とも形容が出来ぬが、強ひて之を形容すれば次のやうである。偉い人は斯ういふ外はない。豫としてはためらふことで冬寒いから川を渡るに躊躇ふやうな様子がある。颯爽として明朗なものでない。何だか進まん氣にして川を渡つて居る様子がある。善を爲すにしても我れこそ善をなすといふやうな、大いにやつてをる様子がない。やつてゐるかやつて居ないのか分らない。又そんな者は絶対に寄せ附けないぞといふやうな様子がない。潔白ぶりは見せない。やり兼ねまいでもないが、隣が見てゐるからまあ止めておかうといふ様子がある。評判になる程善いことをするなといふところ。佛教で「善を見ても進まず、惡を見ても捨てず」といふことがある。善も角々しくしてゐない。儼として客の如しとは、お客さんはシヤンとしてゐる。客に招かれた時には心がシヤンとしてゐる。其れが面にも出て來るのであるが、極く靜かな様子を云ふ。いかめしいことではない。何となく心に落着のあること。渙として、氷の融けることをよく渙然としてといふが、氷の解けるのは水やら氷やら分らんやうにして融けて行く、水と氷の堺が分らぬやうに融けて行く、霏々しくなく。敦として樸の若し、伐り出したばかりの木のやうである。まだ皮の剥いてない木で、匏を掛ければ美しいやうだが、最う其れだけであるが、伐り出した皮の剥いてない木は奥深いところがある。渾として、渾は濁れること、きつぱりして居らん、何か濁つて居るやうである。そこで濁つて居るやうであるが、其儘にして置いて何時とはなしに清らかになつてゐる。一時も早く清らかにならうとする様子がない。靜寂であつて急に立つて活動するのではなく、何時の間にか動いて活動して來る様子がある。天然のものがさうで、種子も蒔いて置けば何時とはなしに芽が出て來る。其の勢は靜かであるが防ぐべからざるものがある。誰がさうするか、古の善士より外はようしない。此の老子の道を保つ者は精一杯といふことを欲しない。虚無といふと角立つから盈るを欲せずと云つてある。此れは何でもさうです。富でも位でも學問でもさうである。積んだ上にも積み、養つた上にも養はうといふことは、位や富ばかりではない、學問もさうです。

それで古いままにして新にしない。是れは古いから新調しようといふのではない。古いものは古い儘で、それでちやんと成就してをる。際立つたところがない。此頃の常緑樹を見ても銀杏の葉のやうにパラパラと散らない。一枚一枚散つて何時散つたか分らないが、何時の間にか新芽が出てゐる。革新といつても新機蒔直しといふところがない。さういふ所は又一方から云へば、日本は新機蒔直しをするといふ様子がある。此の點からいふと、イギリス人等は

さういふ(老子流の)ところがある。制度を改革してゐないこともないが際立つた改革はしてゐないやうである。元來制度の改善といふことは下手で、古い儘で徐々に内容を改善すればよい。日本は老子流といふのも一面から云ふのであります。一個人について云つても、一旦立てたものは何處迄も盛り立てるといふ氣質の者と、前にあつたものを全く捨て、遣り換へるといふ氣質の者もあるが、それも氣質によるのですが、イギリス人は古いものを捨てない所がある。それが歴史性でせうが、獨逸人は之に反して随分思ひ切つた改革をするやうであります。政治だけでなく萬事さうです。然し改變せないので善いとばかりいへない。遅々として進まない缺點もある。英國のロンドンの小學校の改革の如きでも、まだ半分は私立學校があり、善い學校もあるが悪いのも随分ある、それを市で統一することをやらない、又出來ないのですね。それで改善が出來ない。私立の不完全な學校が尙あるのも、這入り手があるからで、あの學校の方が善いからといつてすぐには他へやらない。姉もやつたから弟も遣らうといふ風に依然として元の所へやるからである。イギリス人にはさういふところがある。古くても新しく爲ないが、遅延ながら改善してゐる。それを日本人も眞似よと云ふのではない。人のやり方が必ずしも手本にならない。

致虚極章第十六

致^シ虚^ニ極^ヲ守^ル静^ヲ篤^ク萬物並^ビ作^ス吾^レ以^テ觀^ニ其^レ復^ヲ夫^レ物芸^ヲ芸^ス各^レ歸^ル其^レ根^ニ歸^ル根^ニ曰^ク静^ト静^ト曰^ク復^ト命^ト復^ト命^ト曰^ク常^ト知^ル常^ト曰^ク明^ト不^レ知^ル常^ト妄^ト作^ス凶^ト知^ル常^ト容^ト容^ト乃^チ公^ト公^ト乃^チ王^ト王^ト乃^チ天^ト天^ト乃^チ道^ト道^ト乃^チ久^ト没^ル身^ト不^レ殆^ト

殆^ト

虚極を徹底せしめる。之を無くし、又之を無くする。飽迄静かな處を守れば、此の眼前に並んで生長し、社會人間の活動も實にめまぐるしい程發達し、草木も生長し、機械文明も發達するが、静徳の人は其の萬物が元に戻る所をちやんと見てゐる。どんなに草木が成長しても成長したものは亡んでしまふ。又どんなに金を積んでも無くなり、どんなに血氣盛であつても死ぬ時が来る。それで自分も其れに連込まれて奮闘努力するやうなことをしない。斯ういふことは一片の概念で承知出来るものではない。静徳を守らねば出來ない。一念も動ぜずといふところがなければならぬ。萬物は凡て無に歸することを知つてゐる。位を得れば落つる事を知つて居り、富を得れば失ふことを知つてゐる。萬物は云々として多くあるが、各

根に歸る。その根に歸ることを靜といふ。靜かにじつとしてゐることではない。根に歸ることをいふので、靜なるを復命といふ。復命とは例へば使が斯様斯様でありましたと復命することであるが、出て行つた者は歸つて復命する。種子から出て花が咲き實を結んで又種となつたのが「唯今歸りました」といふところで、これを復命といふ。是れこそ常の道である。此の常を知るのが明で、智慧才覺ではない。其處を知らぬと無闇に動く。勿論人は活動しなければ死物のやうなものであるが妄りに作してはいけない。餘計なことをすれば、食べるにも不必要なものを食べればきつと身體の爲に悪い。書物を讀むのも、何でも多く讀んで善いといふのではない。妄りに作して凶である。かういふことは随分多いものである。

容れるといふのは、寛大といふことだが、好き嫌ひがないといふことで、善惡共に容れるといふ所がある。どこか自然なところがある。容れば乃ち公。私の好き嫌ひが無い。これは正しい、此れは正しくないと云つても、それは元來了簡で、元來正邪が自分の思ふ通りのものではない。儒教でも孔子は甚しきを爲さずと云つてある。或ひは其の方が善いかも知れん。老子の方はその云ひ方が強く響く。公なれば乃ち王者である。王道といふが、王者たるものは萬人を容れるので、世には賢人もあれば愚人もあり、善人もあれば邪惡な人もある。それを差別を立てゝは王者たることは出來ない。天はさういふ賢者も作れば愚者もつくる。

何でも容れる。悪人と雖も自分から生れたものではない。天から出たものである。天は乃ち道、この天は儒教の天でなく、天は道と云つた方が奥深い。さて道なれば昨日のものではない。古今のもので久し。その萬古變らぬ道に沿つて行けば、勿論此の身は死ぬのでありますが、死ぬ迄は殆くない、その殆くないといふところに老子の保身主義が見えてゐる。

(五月二十六日講)

太上章第十七

太上^ハ下^ニ知^ル有^レ之^ヲ。其次^ハ親^シ之^ヲ。譽^ス之^ヲ。其次^ハ畏^ル之^ヲ。其次^ハ侮^ル之^ヲ。故^ニ信^ス不^レ足^ニ焉^ヲ。有^レ不^レ信^ヲ。猶^{トシテ}今^ニ其^ノ貴^ク言^フ。功^ヲ成^ル事^ヲ遂^グ。百^ノ姓^ノ皆^ク曰^ク我^ハ自^ラ然^リ。

老子の主意は云ふところ皆同じですが、此處の太上は一番上、時日でいへば大昔、この太上は下の者が之あることを知る。上には天子がござると知つて居るが、天子がどうかうだといふのではない。斯ういふお蔭があるとか、かういふ御恩があると見るのは未だ足らざるところがあるからである。其の一段下ると仁を以て治めるとか何とかいふことになる。人民はそれを譽める。それで又一物あるのですね。それは第二段のことである。之を親しみ、之

を譽めるのはまだよろしいが、義であるとか禮であるとか云つて、上を畏れて已むを得ずに従ふといふことになる。其の次は最う聲を勵まして、喧しくいふやうになると、人民は云ふことを聞かない。是れは後の世になる程、最う却つて下の侮りを受ける。これは勿論天下に就いて云つたのですけれども、一部分でもさういふことがある。學校の中でも一家の中でもかういふことがある。

故に信足らざれば信ぜざることあり。……それで畢竟悔るとか、畏れるといふことも、此方の信が足らんからである。これありと信ずるは信じ切つてゐるからで、親しんだり譽めたりするのは、早一段下つてをる。畢竟信が足らんからである。尙叱り附けたりすると行はれないやうになる。國でも色々詔勅が出るやうになると、さうすると中々行はれないやうになる。其れとも氣附かずして、どうのかうのと言を爲す。法律の如きはあゝしてはいかん、かうしてはいかんと、最も言を貴ぶ。さうなると末の末である。功なり名遂げ、……これは又元にもどつて論じたので、功成り事遂げても、それでも誰がしたのだとは云はずして、民は自分で斯うなつたのだ、渴いては井を掘つて飲むといふ様に自然になつたやうに思つてゐる。其れが老子の主意で、周の時代は禮が細かで煩さくなつた。禮が細かくなる程嘘が多くなる。廣く云へば文化が進めば進む程煩さくなる。其れに反抗したものと一應思はれる所もあるが、

支那には斯ういふ一面もあるのである。

大道廢章第十八

大道廢^{ステレテ}有^テ仁義。智慧出^テ有^テ大偽。六親不和^{シテ}有^テ孝慈。國家昏亂^{シテ}有^テ忠臣。

此れは名高い言葉です。斯ういふところを擗へて孔子と老子は違ふといふのですが、尤も教の立て方は違つてゐます。けれども老子は主義のないのが主義である。大道が行はれて居れば仁とか義とか喧ましく云ふ必要はない。孔子に於てはまだしも、孟子に至つては頻りに仁義を説いてまはる。末の末である。一家の内でも親子、夫婦、兄弟、親は子を愛するとか、兄は弟を愛するといへば、最う事々しくなる。何とも思はぬ所がよいのである。智慧出で、大偽あり、智慧を貴ぶ、其處から偽を云ふのである。六親は親子夫婦兄弟で、和して居りさへすれば親の慈悲とか孝行とか言はない。云ふ必要もなく孝慈とも感ぜない。國家昏亂して忠臣あり。これは、楠公は國家の忠臣であるといふのは、天子に長多も北條氏の如き武人が齒向ふといふところから、楠公とか新田が出て來るので、國が亂れもせず、何ともな

ければ忠臣も何もない。斯うなると老子の教は全く理想的で、仁義が喧ましくなる處から斯ういふやうになるのであり、同時に支那は一面にさういふところがあるのです。反動とのみでない。

絶聖棄智章第十九

絶^チ聖^ヲ棄^テ智^ヲ。民^ノ利^ハ百^シ倍^シ。絶^チ仁^ヲ棄^テ義^ヲ。民^ニ復^ス。慈^ニ絶^チ巧^ヲ棄^テ利^ヲ。盜^賊無^ク有^ル。此^ノ三^者以^テ爲^ス文^ヲ不^レ足^ク。故^ニ令^ム有^ル所^ニ屬^ス。見^レ素^ヲ抱^キ樸^ヲ。少^ク私^ヲ寡^ク欲^ス。

これも前章と同じ意味で、聖を絶つての聖は聖智で、智と並んだもの、そんなものを重んずるから利益を争ふやうになる。そんな聖とか智を棄て、しまへば争ふことがなくなる。唯何ともなしに親を大事にする。孝だの愛だのと喧しく云はない。「念々これ忠」といふことがある、忠ばかりならば忠も忘れるといふことである。そこで孝慈がわかるのである。無爲に歸れば自ら孝慈といふことが出て来る。本に復るとよく云ふが、儒教でも後世では復性といふ

ことを云ひ、禮に復れと孔子も云つてをられるが、禮は聖人の作られたものである。儒教では歸れと云はず天子の教に従へといふ。そこで伊藤仁齋の如きは復性の説は老子流だと云つたのも此の爲である。

巧は結果を見る方で、その巧を棄てる、すると盜賊はない。畢竟智慧を愛し巧利を争ふからさういふことになる。其れを棄てれば自然に盜賊は無くなる。俄に捨てられないが人々の反省にはなる。現代でも智巧の世の中で、物質文明となると發明發見で其の度毎に國民の生活が安樂になるかといふとさうではない、いふのが不思議であるが、老子から云へば却つてさうである。何の時代でも文化の世の中である以上我々の反省材料となる。今日では巧利の上にも巧利をいふから行詰るのである。國民精神と云ふから國體に背くことになる。國體明徴論をやめてしまへば元に復る。國體明徴を云はねばならぬのは現代がよくないからで、さういふ議論をやめてしまつたら善いかといふとさうでない。さうすると却つて老子の絶つとか棄てるとかいふ意味には合はない。文化が過ぎるから國を治むるに足らないのである。人民を四方に集めて教を聞かせる。そして此の三つのは即ち上述の三つのは棄てることである。此れは文足らないこと即ち素樸なところである。故に所屬する所がある、ちりぢりばら／＼にならない。そこで質素を知る。樸は切り倒したまゝの木で、素樸な儘を守つて

みると、私といふものが尠ない。色々の欲がない。三つのものを捨てるのが善いのだといふ意である。

文化價值といふことをよくいふが、それは一體何であるかを考へなければならぬ。文化とは何かを考へねばならぬ。リツケルトの價值論を突詰めて見ると價值とは獨逸文化に歸着するやうです。さうせぬと文化の内容がなくなる。それでこそ獨逸文化である。其の文化を老子は嫌ふのであるが、一體文化價值は無いのであるか、飢ては飲み、衣服は寒を防げば足りる。又住宅は風雨を凌げば足る、そのみならず老子は學問も餘りやらぬ方がよいといふ。そのみならず徳も磨き過ぎてはいかぬといふ考へです。すると人生の價值は何處にあるのかと疑ふであらうが、老子からは疑ひはせぬ。太古に歸つてしまへば心配はないが、飲んで食つて唯だ生きてゐるといふことになつてしまひはせぬか。一體人生の價值は何ものであらうか。我々のやうな粗末な家に住つてゐるよりも大厦高樓に住つてゐる方がよい。麥飯を食つてゐるより米の飯の方がよい、無學問より知識を持つてゐる方がよいといふが、其れは比較的な話で、大厦高樓も百萬圓の長者が大厦高樓に居ても千萬長者のに較ぶればよくはない。皆比較的なもので絶對的價值ではない。老子は價值論をひつさげてゐるのでないが、唯なんともない所が此の儘でよいのだといふので、若し今日の人生價值が何處にあるかと問うて見

ら、我々から云へば何でもなし。價值は比較から起ることであるといふことが價值で、そのある所をどう感ずるか、といふところに價值の價值たる所がある。人間が生きてゐるとは息をしてゐる、眼を開いて見てゐるところに其の儘價值があるので、無上の價值である。幸ひに麥飯の一杯も食ふ事が出来る其れが無上の價值である。年が寄り家に寝てゐるのも、足が立たんで家に引込んでゐる者は價值が無い邪魔者かといふとさうではない。春には木の芽が出て秋には實のる。夏は茂り冬は枯る、其の儘が價值である。人間は草木によつて生きてゐるが、草木を手段とするのではない、諸共に價值である。然るに道徳を修めたから價值があるといふのは比較的事で、其れを誇ることがあつては價值ではない。有難く思ふ所に價值がある。人間も生死のところを窮すると助けて下さいと叫ぶ、生きてゐるだけで結構ですから助けてくれといふ。木から落ちて死にかけた生死の間にあつては、どうしても唯生きたいと願ふ。二十町の田を持つてゐるのが水飲百姓になつてもよいから唯生きたことだけでよいと思ふ。息が恢復するとせめて一町でもとなり、全く恢復すると二十町では足りなくなる。絶對的價值は無一物の時に出て来るので、生きて居ればこそ苦しませてもらへるのである。あとの話は皆比較的なことである。老子に言はせたら斯ういふであらうと思ふ。本當は文化の價值を積むと難儀が重なる。此の身を本に歸すのがよいのである。美衣美食に慣れる

と身體が悪くなる、さうすると玄米飯を食へ、野菜を食はねばならぬとなると、斯うなつて來て食物の有難さが分る。こんなことなら生きてゐる價值がないとはいへない。文化が必ずしも悪くないが文化萬能と思うといかない。老子も根本は見識がある。唯太古の素樸な所に歸ると思つてはならない。ある程のものは皆價值がある。價值を論ずる人間が既に生きてゐるからである。先づ息、其處に戻つて來なければならぬ。

絶學無憂章第二十

絶^テ學^ヲ無^シ憂^シ唯^ト之^ヲ與^レ阿^ト相^ト去^ル幾^ノ何^ゾ善^ト之^ヲ與^レ惡^ト相^ト去^ル何^ゾ若^ク人^ノ之^ヲ所^レ畏^ル不^レ可^ク不^レ畏^ル荒^ク兮^ク其^レ未^ダ央^カ哉^ニ衆^人熙^々如^ク享^ニ大^牢如^ク春^ノ登^レ臺^ニ我^レ獨^リ泊^シ兮^ク其^レ未^ダ兆^ス若^ク嬰^兒之^ヲ未^ダ孩^ニ乘^々兮^ク若^ク無^レ所^レ歸^ル衆^人皆^レ有^レ餘^リ我^レ獨^リ若^ク遺^ス我^レ愚^人之^ヲ心^也哉^ニ沌^々兮^ク俗^人昭^々我^レ獨^リ若^ク昏^ク俗^人察^々我^レ獨^リ悶^々澹^兮其^レ若^ク海^颺兮^ク似^ク無^レ

所^レ止^ム衆^人有^レ以^テ我^レ獨^リ頑^ニ且^チ鄙^シ我^レ獨^リ異^ニ於^テ人^ニ而^シ貴^ク求^ル食^ヲ於^テ母^ニ

茲に學といふことがありますが、澤庵は學とは禮のことだと云つて居られるが、支那で學といふことは禮を習ふことである。日本で學ぶとは「まねぶ」ことで、支那では學ぶとは元來禮儀作法を習ふことです。支那でいふと今日文化といふことが禮といふことで盡きてゐる。世の中に出来るもので、其の世の中に出来た文化は習はなければならぬ。今日でも専門で漢學を研究するとなると禮が根本的なものとなる。やはり根本は廢つてゐない。徂徠が禮樂が本當の學だと云つたのはさういふ意味がある。今日でいふと文化に當る。禮が當時餘り煩さくなつて來た、それで此の學を去つてしまへば憂がない。「唯」とは長上に對して云ふ、友人なれば「阿」と答へると、禮で喧ましくいふが、「唯」と「阿」と元來幾ばくの相違があるのか元來同じではないか。それにこだはつてはいかぬ。善と惡とは根本的に相去るのではない。然し善も惡も同じといふのではない。世間の所謂禮に當るのを善といひ、外れるのを惡といふ。さういふことは相離るゝ事幾何ぞ、愈々の本性を調べれば學問の無い田舎人も、リファインされた都會人も、外面は善ささうでも意欲の動く所はちつとも違ひはしない。根本に歸つて見れば相隔るいくばくぞ。然るにそれを人生に一番大事なものと思つてゐるのがいけな

い。然し畏れねばならぬ所は矢張畏れねばならぬ。法度、刑罰、神社、佛閣、皆神様の前では神を畏れる。そのやうに畏るべき所は畏れる。亂暴な人間にしてしまへといふ譯でない。都會人は田舎人に較べると修めておとなしくして居るが根本にどれだけの違ひがあるのか、探ぐつて見れば名利に離離して窮まりがない、何處も違ひはしない。

衆人熙々として大牢を享るが如し、……衆人はゆつくり楽しんで、お祭の時に牛と豚と羊を御供へする、これが一番御馳走で、例へばボーナスを懐に入れて楽しんでゐる、よい氣持になつて春の山に登つて四方の景色を眺めてゐるやうな様子がある。そのやうに衆人は名利を得て得意になつてゐる。所が自分は一向賞與もないし、月給も上らず又表に現はれて來ないどうして居るのか一向存在を認められない。自分は人の眼中に無いやうな有様である。又嬰兒は頻りに笑ふやうになるが未だ出來た儘で笑はない、丁度其の様子である。嬰兒は唯そこに何か生きてゐるといふだけで笑ふでもなく唯轉ばしてある。はきくせず何處に歸るか歸るべき處もない。人生の目的は何かといふやふなところがない。醉生夢死の如き様子がある。丁度見た所では歸する處のない嬰兒の如くである。

衆人は皆餘あり、皆澤山にあつて懐が暖かい、然るに我れ獨り遣れたるが如しでまご／＼してゐる。人は皆充分持つてゐるが、自分は忘れて空で歸つたといふ様子がある。世間から

見れば自分はこれ程馬鹿な者はない。智慧才覺をしぼらぬ、とんでもない阿呆だ、目鼻の無いやうな様子だ。俗人ははきくして居る、あの男ははきくしてゐるといふ、そして俗人は見透して目から鼻と抜け通るが、我れ獨りぼんやりしてゐる。澹として即ちあつさりとしてゐて海上にサツと起る風に任せて何處に往くやら風のまに／＼吹かれてゐる。止る所無きが如し。人生の目的は何かとか、ギリシヤ人の様に善は何かと頻りに詮議してをるが、自分は唯ふはり／＼とやつてをつて止る所がないといふ様子である。

夕立の風にほかけて行く船は

いづこの浦にしるべあるらむ

とあるが、丁度其の様に風のまに／＼行つてゐるといふ様子がある。

惜しまるゝ花をさそひて吹く風は

何處の里に宿さだむらむ

風は宿はない、丁度その様子がある。衆人は何の爲にといふ。そして無意義にするといふことはない。Why, whatといふ。我一人頑愚にして賤しい、名利も學問も一向何もなささうにしてをる。名譽もかまはない、又外聞もかまはないから、外聞も賤しい。恥も外聞もない様子がある。我獨り大勢の人と違つてゐる。食を母に求むることを貴ぶ。林註では母といふのは萬

物の母で道の事をさすと云つてある。多くの書物がさうである。ところが澤庵の解は母は母で、嬰兒は食を母に「うま〜」と云つて求めてゐる、其の様にごくうぶな生活を指してゐるのである。唯乳をあてがへば其の儘飲んでゐる様子がある。大人は嬰兒のやうに母の乳を吸う譯に行かぬが、自分の食膳にあてがはれたものを戴く、麥飯が出れば其れを戴く、御馳走が出ればそれを戴くが、もう一度食べたいものだといふ心を起さない。實際は斯ういふことがむづかしい。たやすい事が我々には却つてむづかしい。

孔徳之容章第二十一

孔徳之容。唯道是從。道之爲物。唯恍唯惚。惚兮恍。恍其中有象。恍兮惚。其中有物。窈兮冥兮。其中有精。其精甚眞。其中有信。自古及今。其名不去。以閱衆甫。吾何以知衆甫之然哉。以此。

孔徳は大いなる徳で、其の大いなる徳とは無爲に徹底した人の徳で、道を得た容貌は、道

といふものは分らないが、大人物は何か彷彿として現はれるものは何とも云はれぬ容貌がちらつて来る。そんなら道は何であるかと云へば、有るが如く無きが如し。うつとりしてゐる。けれども何か形がある。無爲といつても本當の赤ん坊の如くではない。無爲の道人はさうでない。何かそこにもものがある、暗い中に精、きつすいがあり、純一で嘘が交らない。其中に信がある。信も眞も精も皆同じであるが。皆形容なんである。唯よささうに表面を飾つたものではないのだ。有る如く無い如くであるが、有ると云へば此れ程あるものはない。此れ程存在の確かなものはないが、其れを掴まへようとするとな掴まへやうがない。世間の方は「有れども無きが如し、」であるが、無きが如くで有るもの、此れこそなければならぬ。金剛不壞なものがなければならぬ。其れが無ければ人生は根柢がない。

古より今に及んで其の名を去らず以て衆甫を閲す。衆善、諸々の善美なるものをすつと見て廻る。どの善も、どの善も此の道に統べられてゐる。あらゆる善は此の道に漏れるものはない。検閲官が一々検閲して漏れる者がなく如くである。然るに其の諸の善美は道に統べられてゐる。道に外れたものはない。何處を以て知るか、道で知つたのである。眞理は、自證の外はない。道を體得すれば分るのである。道は道を以つて知る外はない。

(六月二日講)

曲則全章第二十一

六八

曲則全^{ナルトキハ}枉^チ則直^シ。窪^{ケレバ}則盈^ツ。弊^{ヤフトキハ}則新^{ナリ}。少^{キハ}則得^ル。多^{キハ}則惑^フ。是以^テ聖人抱^テ一^ヲ爲^ス天下^ノ式^ヲ。不自^レ見^ル。故^ニ明^ク。不自^レ是^ス。故^ニ彰^ル。不自^レ伐^ス。故^ニ有^ル功^ヲ。不自^レ矜^フ。故^ニ長^シ。夫^レ惟^レ不^レ爭^フ。故^ニ天下^ニ莫^ク能^ク與^フ之^ヲ。爭^フ。古^ノ之^ヲ所謂^ル曲^{ナルトキハ}則^シ全^シ者^ニ。豈^ニ虚^ニ言^フ哉^{ナラシ}。誠^ニ全^ク而^{シテ}歸^ル之^ヲ。

曲つて居るものは則ち全い。柳に雪折れ無しといふが眞^{マコト}です。兎角^{コト}強々^{コト}しくなつて行くと毀れるですね。曲つて行くといふと身を全うする。茲は老子の行き方です。之を迎合だとして悪く取るといけない。直情徑行も其の人の氣質で、人の傾向なんです。強ひて曲げるのもよくないが、鋼^{ハガネ}は曲らないが兎もすると刃^ヤが毀れる。なまくらならば曲るがこぼれることはない。老子は曲ることを尙ぶ。

枉^{カガム}げて行くと直^{チカ}なんで、繩^{ヒモ}は幾らでも枉^{カガム}るからそこで墨繩^{ヒモ}が出来る。人との附合でもそれがある。昔でいふと主君に諫めるといふことがある。主君の枉^{カガム}つてゐる所をつか／＼と諫言^{カガム}するが、怒^{イカリ}にふれて退^ヒけられ、或^シひは殺^{コロ}される。結局自分の意見が通らない。然しさう一本

調子に行かんで暫く様子を見、時を見計らつて諫め、又言ふといふ風にすると正しくなつて成功もする。さういふことが枉^{カガム}れば則ち直^{チカ}といふことです。

唐の則天武后は自分の秩序で天下を立てんとした、そんな亂暴な人ですが、狄仁傑が宰相ですが、やはり其の則天武后の云ふ通りにして直言を以てせない。そこで信任を得てをる。そして餘り王のやり方がひどくならないやうにして行く、而て時を見計らつて張柬之を薦めた。そしてつまりは忠誠を成就した。直に通つた譯です。是れも場合によることなんですけれども、老子の態度がさうです。

窪^{ケレバ}んで居ると則ち一杯になる。自分を虚しくしてをれば凡て這入つて来る。悪い事、善い事と選擇して捨てないと盈ちて来る。弊^{ヤフト}なれば則ち新^{ナリ}なり、木の葉でも古くなると落ちて来る。その代り新しい葉が出て来る。古い葉が頑張つて居ると新芽が出やうがない。強ひてもぎ取つて新しいものを出さうとしない。破れて来れば自然に新になる。破れてゐる着物を着て居れば、貧乏な親でも最う破れたから新しいのを作つてやらねばならんといふことになる。新しい着物を作つてくれ作つてくれと云はんでも破れて居つても素直に着てをれば自然と新になる。附屬小學校の校舍も随分古い、ぼろ／＼になつてをるが、今度は新しいのが出来る。出来て見れば四、五年前に出来たものより新しい。

物が充分あると勤めない。尠いと努めるから即ち得る。凡てその富貴に居る者は矢張貧賤な者が多い。大臣、大將といふ風な人を見ても、中には親も大臣であつたといふ風な人も無いではないが、大抵貧賤な所から出て来るんです。學問の如きも金持といふ風な者は随分學問は出来るやうだがやらない。貧乏な者が種々色々工夫してやる。書物も一杯蓄へてゐるやうな者は案外勉強せない。書物も買ふことが出来ないで借りて寫すやうな人が却つてよく勉強する。山崎闇齋、荻生徂徠、二宮尊徳などのやうな人もさうです。

多き時は則ち惑ふ。多くあると惑ふ。例へば多く着物を拵へて居ると、今度は何を着ようか、彼方の箆笥にも此方の箆笥にもある。惑ふ。一枚なら惑ふことはない。學問が多いといふと惑ふ。アリストテレスは斯う云ふ、プラトンは斯う云ふ、さてどの説にしようかとなる。或生徒が先生に問ふて曰く、「善惡の標準が色々あるが一体何時極まるんですか」と。次々に色々な學説が出て来る。極まりやうがない。それを書物を皆讀んでそれで善惡の標準をきめるとならば際限がない。歌學に長ずる者は歌が下手である。文法の詮議や歌の議論を多く知つて居る人は、あれこれ惑つて結局歌を詠まないことになる。そこで聖人は虚無の「一」を尙ぶ。數の一といふのではない。唯一といふならば是亦頑固である。融通無碍の「一」で、これではければならんといふことはない。多くあつてもよい、虚心淡々であれば多くあつても一と同じである。惑ふことが無い。其の「一」を我々の手本にしたら宜しい。

自分で見よう／＼とすると見た丈のことになる。自分で見ないと人は色々言つてくれる、そこで色々の智慧を得る。自分は黙つてゐると人は色々の意見を云つてくれる。自分が自ら知とすれば人は誰も云つてくれない。自らは是とする者は決して人は褒めない。決して名譽はない。自分は至らぬ至らぬと心からさう思つて居ると何時とはなしに名が高くなる。自分の手柄を誇る者は功を全うすることが出来ない。伐ら^{はた}ないから功を全うすることが出来る。自ら功に誇らないから無事長久なんです。徳に誇れば誇る程人が與^{くみ}せない。何でもさうですね。自分が偉がつてゐると同じ偉さでも人が偉くしたくないといふ氣になる。謙遜であるとする偉くなる。然しこれもずる／＼構へて其の裏道を態と通ふことは感心しない。心からさうでなければならぬ。

争はないから天下の者が之に同ずるですね。聖人は人と争はないからなんです。凡て争は終を全うするものではないのです。此の頃鬪志といふものを珍重する。奮闘するとか階級鬪争とかよくいふが元來西洋思想の輸入で西洋歴史にはそれが多し。日本でも無いとは云へぬが、皇室は争はれないですね。藤原氏が勢力を得ても徳川が天下を取つても争はれることがない。一兵を用ひずして天下が歸する。我が國特別のことですが、如何にもさういふことが

ある。

思想には思想で闘うこともあるやうだが、思想をもつて説き伏せることが出来るものではない。理窟は一方むきのもので無いのです。必ず裏を掴むもので、例へば唯物論に反対する唯心論であるならば矢張其の反面がある。論争して勝てば痛快ですが、其れで納るものではない。本居宣長も争はない流儀であるけれども、儒教を向ふへ廻して排斥して居られる。一方では日本の道を説かれたが一方では極端になつてをる。後になると何程か儒教を探らなければならなくなつて來てをる。相手を向ふへ廻して論ずるのは善くない。唯自分は斯うだと自分の考を主張すればよいので人を掴へて争つてはならない。英國のミル等も大いに主張したが、そして自分の存在を明らかにしたが唯一面です。

古の所謂曲なれば則ち全しといふのは老子の言葉でない古來の言葉らしい。古くからさういふことがあるが、豈虚言ならんや。誠に全うして之を歸す、全うして歸すのです。人も生れた時は全いのです、其れを自分で散々に枉めたり傷つけたりするのですが、それを全うして歸すんです。

希言自然章第二十三

希言自然。故飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地尚不能久。而況於人乎。故從事於道者。道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。同於失者。失亦樂得之。信不足。有不信。

希に言ふといふのが自然なんで、元來色々お喋りするものが拵へごとである。本當を云へば天地はものを云はない沈黙 silence は自然だといひたい處を角立たぬやうにさういつたのです。「涼風も朝の間」といふ、涼しい朝風も何時迄も吹いて居らない。村雨は一日中雨が降つて居るのではない。何時迄もくどく吹いたり降つたりして居らない。自然の現象に持つて行つて證明した譯ですね。是れは誰がするか、天地がするんです。天地すら尙然り、況んや人に於てをや。人も何時迄も富貴を握つて居るとか、何時迄も貧賤に居るものではない。變つて行くものです。失ふを嫌つて何時迄も得ることのみに齧り附いて居らうとする、其處が間違ひである。

老子の所謂道を知らうとする者は、道は道に同じ、徳は徳に同ず、一所になることです。道なら道に一つになる。徳は徳で一つになる。又道なり徳なりを失つた者は其儘に失となつてしまふ。失は失に同ずる。其處が老子の老子たるところで、やきもきして不道を嫌ひ、早く不徳を去らうとしない。其の儘にしておく。善を見ても進まず、惡を見ても去らずといふやうな様子がある。例へば何も善い學校へ行かねばならんと云つて、一中へ行かうか一高へ行かうかとしない。近い所に學校があれば其處へ行く、道と一體となつて居る者は又道も亦之を得る。強ひて道でならんことわれないが道を得る。徳も徳で宜しいと樂しむ。失に同ずる者は不道不徳も亦之を樂しむ。選擇をきつくしない。善は善、惡は惡なりに安んずる。此處を去つて是非彼處へ行かうといふのではない。然し信仰の足らぬ者は惡を樂しむといふ筈のことはない。斯う云つても信念の足らぬ者は上に云つたやうなことは聞き入れない。

凡そ一般にヨーロッパの文明論議は、それを貶す譯でないですが、言ふこと書く事が非常に多いですね。日本は古來「ことあげせぬ國」でさう言はない。言葉數は尠い。然るに今日は至る處言葉が多い。又筆にして書く事も多い。元來日本の言葉は比較的簡潔である。支那でも多い方であるが西洋に較べると尠い。獨逸人の如きは一寸した書を著すとしても、三百頁四百頁といふものを書く、カントの如き今迄の人の云つたことのないやうなことを書くのは

已むを得ないが、さうでない何でもなく多く書く。一言でも尠い方が善い。言はんでもすむことは言つた程値打を減するものである。言葉希きは自然なり。其處がいゝのです。勝つたと云つては優勝旗を一年中飾つて居る。しつこいですね。昔は勝てば團扇を呉れたものです。あほげば涼しい、それでよいので、然るに優勝カップなど一年中執着してをる。そして其れを眺めてをる。日本流ではない。勝てば勝つて嬉しいが直ぐ忘れて居る、それがよい。一休和尚の話に、作り話かも知らんが、子僧の時に和尚と町を歩くと、肴屋が蛸を賣つてゐる和尚如何にも欲しさうに見える。後になつて和尚に其のことをいふと「貴様まだ蛸を食つて居るか」と云つたといふことである。蛸を見て旨さうな匂がすれば旨さうな顔をするけれども通リ過ぎれば忘れてしまふ。小僧の方は未だ覺えてをる。執着して居るからである。伊川と明道の兄弟が或る時宴會で今日で云へば藝者が出た。明道の方は女と席を同じうして一向平氣で居る。それで他日弟の方がどうも面白くないと詰ると、兄の方が「お前まだ藝者を買つて居るか」と云はれた。

優勝旗も長く飾つて置くのは日本精神に叶はない。元來他所の風なんですね。それを反對すると又いけないが。

本居宣長は老子の方に賛成である。今日我々は老子の言に聽くべきものがある。世の中は

兎角拘泥する。型を執つて行かうとする。超脱した所が無ければならぬ。我々の學校でも高等師範こそ教育の大本山だといふが、さうしたものでない。他の大學も検定も矢張長所はある。飽迄自分の所を守るのですが、他を排斥すべきではない。師範教育にも長所がある。矢張一面に長所は同時に短所で、短所もある。一から十迄善いと考へてはならないのです。何もこんなことは老子に依らなくても考へられる事ですが、さういふ風なものゝ考へ方を教へて居る。さういふこともあると老子に教へられるところがある。

跂者不立章第二十四

跂者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也。曰餘食贅行。物或惡之。故有道者不處也。

跂つまたつ者、足の先で立つんですね。伸び上つて見ようとするが、何時迄も立つて居れるものではない。何時の間にか落ちてしまふ。人よりも先を見ようとするとは何時の間にか疲れて落

ちてしまふ。股を擴げて歩くといふこともよい加減にひろげないといふと行くことも出来なくなる。自分で見に行かうとする者は兎角見えない。人の意見を撥ね除けるから眼界が狭くなる。矢張見識の勝れた人は多くの人の意見を採るんですね。井上侯も伊藤公も皆さうです。虚心坦懐に善處する人である。自分から偉いと思つてゐる者は兎角人が名譽を呉れないですね。功を伐る者は誇るから功があつても自ら亡ぼしてしまふ。元來功があれば自分で伐らんでも人が見るのです。餘計なことを附加へるから其の功その徳を傷付けてしまふのです。黙つて居ればよいのに……。

餘食は食べ物の餘りもの、殘飯なんです。贅行とは餘計なもの、丁度十人分なら十人分拵へて置けばよいのに餘分に作るから捨てなくてはならぬやうになる。自ら矜ることは餘計なことです。黙つて居ればよいのです。餘分なものは目に附いていかないものです。餘り上手な演説をすると却つて嫌なんです。虚無の道を心得た者はさういふ所には心を据ゑない。人情の弱点として餘計なことはいかんと知つてゐながら自分を誇示したがる。我々も書かんでもよいのに書き散らして置くと人に突張られる。多言を費せば費す程差支へがある。此れは我々自身にあることです。

有物混成章第二十五

七八

有^レ物混成^〇先^ニ天地^ニ生^〇寂^〇兮寥^〇兮獨立^テ而不^レ改^〇周行^{シテ}而不^レ殆^〇
可^シ以^テ爲^ニ天下^ノ母^〇吾不知^ラ其名^ノ字^ヲ之^ヲ曰^フ道^ト強^テ爲^ニ之^ガ名^ヲ曰^フ大^ト大^ト
曰^ヒ逝^ト逝^ト曰^ヒ遠^ト遠^ト曰^ヒ反^ト故^ニ道^ハ大^{ナリ}天^ハ大^{ナリ}地^ハ大^{ナリ}王^ハ亦^モ大^{ナリ}域^中有^ニ四^ノ
大^〇而王^處一^焉人^法地^法天^法道^法自然^〇

物あり混成すといふのは、何かあるといつて之を指すことは出来ぬが、混沌として成就してをる。目鼻も何もない。無いかといへば出来て居る。道といふものを形容したので、有るといへないが何かある。此の物は天地以前にあるといふのです。老子がいゝ加減なことを云つて居るならば其れ迄の話ですが、天地に先立つものがあるなれば知りたいたいですね、所が寂たり寥たり、何もない。たつた獨りあるのみである。萬古變るところがない。何處にでも行く。此處には行くが彼處には行かないといふことがない。何處に行つても殆い處がない。神主がお寺に這入ると坊さんにしたゝかやりつけられる。坊さんが儒者の仲間に入るとしたゝか、やつつけられる。ところが神道とか佛道とか儒道とかいふものでないから何處に行つても

殆い所はない。故に萬物の母で本になる。老子の道から佛道も儒道も出て来る。印度では印度人の性情によつて佛道の形をとつて来る。何でも其處から出て来るから母といふ。老子は柔の道ですから母といふ。それに我々は名の附けやうがない。そこで文字を借りて道といふ道と云つて見ても物足らんから逝くといふ。「逝くものは斯くの如きか晝夜を舍かず」、あの逝くです。逝くといふと限りがない、無限に逝くのは實に深遠なものです。奈落の底へ行つてしまふかといふと反る、本の通りなんです。逝いて逝かないのです。流れて居るやうだけれども依然として本の儘である。故に道は大である。天地以前だから道程大なるものはない。道も大である、地はなほ下であるが地も大である。普通は王者を大としてゐるが天地に較べると小さい、けれども王も亦大なり。世界中に四大あり、其の四大の一つに王も居る。王も大と見て差支へない。人間世界は地を手本とし、地は天を手本とし、王は道を手本とする。道は自然より深いかといふと、さうでない。唯言葉を換へた迄のものである。

重爲輕根章第二十六

七九

重^キ爲^ニ輕^キ根^〇靜^ハ爲^ニ躁^リ君^〇是以^テ君子^ハ終日^行不^レ離^レ輜^〇重^〇雖^レ有^ニ榮^リ

觀^〇一^〇燕^〇處^〇超^〇然^〇奈^〇何^〇萬^〇乘^〇之^〇主^〇而^〇以^〇身^〇輕^〇天^〇下^〇輕^〇則^〇失^〇臣^〇躁^〇則^〇失^〇君^〇

老子の道は重で、重いものが軽きことの根本になる。又静は躁々しいことの根本で、自分が静かにして居れば自然に周囲も静かになる。軽い者の中に這入つて自分もふはくしてゐては駄目である。是を以て君子は終日行つても輻重を離れない。輻重といふのは現今の輻重兵の輻重と同じで、食糧其他を載せて行くもの、始終その根本にある。食物も道具もある、故に君子は輻重を離れない。榮觀ありと雖も、燕處して超然たり。立派なものが諸方に澤山あるが之を見ようとしなない。あすこに善いものがある彼處によいものがあると思つて見に行きたがらない。他の者は皆東奔西走して立派なものを見ようとするが自分は安んじて居る。萬乘の主、君主でありながら我が身を天下よりも軽くするが、天下を治める爲に自分の一身を捨てることはいけない。大臣大將といへば立派なものです。然るに身を軽くするが、日本の如きは別です。人氣を取らうと思つて政治に疲れ身を疎かにすることから身を失ふこともある。これも國家の爲に盡したといふのならよいが、茲はさうでない。畢竟名利の爲であるからといふ考へで、支那では然うである。軽いと臣下の心を失つてしまふ。躁々しい時には君たるの位を失ふ。

善行無轍迹章第二十七

善^〇行^〇無^〇轍^〇迹^〇善^〇言^〇無^〇瑕^〇譎^〇善^〇計^〇不^〇用^〇籌^〇策^〇善^〇閉^〇無^〇關^〇鍵^〇而^〇不^〇可^〇開^〇善^〇結^〇無^〇繩^〇約^〇而^〇不^〇可^〇解^〇是^〇以^〇聖^〇人^〇常^〇善^〇救^〇人^〇故^〇無^〇棄^〇人^〇常^〇善^〇救^〇物^〇故^〇無^〇棄^〇物^〇是^〇謂^〇襲^〇明^〇故^〇善^〇人^〇不^〇善^〇人^〇之^〇師^〇不^〇善^〇人^〇善^〇人^〇之^〇資^〇不^〇貴^〇其^〇師^〇不^〇愛^〇其^〇資^〇雖^〇知^〇大^〇迷^〇是^〇謂^〇要^〇妙^〇

上手に行く者は轍の迹がない。本當に上手に行く者はじつとして居つて千里を行く。これが上手に行くもので足跡のある者は眞に上手に行つた者とはいへない。行かずして行く、これが老子の道なんです。よく言ふ者は玉に瑕である。本當によく言ふ者は言葉に怪我がない。本當に上手な演説師は怪我がない。本當の上手は一言を吐かずして千言萬語に勝るところがある。よく計る者は即ち上手に算盤を使ふ者は算盤を使はない。よく閉づる者は門とか鍵が無けれども開く可からず。金庫などを備へて居つても道具で打破る。けれども上手に藏つ

て居る者は何處に置いてをるか分らない。いふのは元來さう澤山持つてゐないからです。持つて居らんけれども不足しない。

法律を拵へて、きつと違ひませんと誓を立てる。又間違つたら斯うするぞと刑罰が控へてをると却つてそれを犯すものである。さうでなく無形の繩で結ばれてをる。是を以て聖人はよく人を救ふ。あゝしようかうしようと善し悪しを分たず、知識の選擇の無いことで、此處はしつかり締めておかねばならん、此處は充分言つて置かねばならんといふことがない。ところが其れがきついと、此の人は善い、此の人は悪い、と選擇があつて人を棄てるところがある。悪い者も善い者も用ひ方によつて役に立つ。一向棄てない。又物を棄てない、生かすのである。彼の人は明がないと云つて棄てるが、不明の明は明を包んだものである。

善人は善人を見て自分の師にするが、不善人は要らぬ者かといふとさうでなく、不善人が善人の資になる。不善人が無ければ善人もなくなる。不善人があればこそ忍耐もし克己もする。善人は不善人を善くしようとするから善人で、善人計りなら善人もない。お互なんです。善人は不善人の師でもあるが、悪人は善人の資本である。其の資を愛せざれば自分の助けにならん。知なりと雖も大いに迷ふ。目を塞いでしまふといけない。明君はさういふものではない。上に述べたやうなことは實際高い境涯で、此の境涯に至ることはむづかしい。唯高い

境涯を云つて見るといふことになるが、さういふ處を見て幾分さういふところもあるかと、別の境涯を知ることが出来る。何分虚無の道のことですから體得することは普通のことではないと思ふです。

(六月九日講)

知其雄章第二十八

知^チ其^キ雄^ユ守^ル其^ノ雌^ヲ爲^ス天下^ノ谿^ヲ爲^ス天下^ノ谿^ヲ常德^ヲ不^レ離^レ復^シ歸^ス於^テ嬰^ニ兒^ノ知^チ其^ノ白^ヲ守^ル其^ノ黑^ヲ爲^ス天下^ノ式^ヲ爲^ス天下^ノ式^ヲ常德^ヲ不^レ忒^レ復^シ於^テ無^ニ極^ニ知^チ其^ノ榮^ヲ守^ル其^ノ辱^ヲ爲^ス天下^ノ谷^ヲ爲^ス天下^ノ谷^ヲ常德^ヲ乃^チ足^リ復^シ歸^ス於^テ樸^ニ樸^ニ散^ズ則^チ爲^ス器^ト聖^人用^ヒ之^ヲ則^チ爲^ス官^長故^ニ大^ニ制^ス不^レ割^セ

雄は強い方、雌は柔かい方弱い方で、強いことを知らないのではないが、弱いところを守る。元來弱いから弱いところを守るのではない。腹の底は強いが弱いところを守る。谿は窪んだ所で、それで凡てのものが集つて来る。強がつて居ると誰も集つて来ないが、弱を守つて居ると天下の者は集つて来る。常德は「徳の徳とすべきは常の徳に非ず」といふ老子の徳で

嬰兒のやうに人の言ふ通りになつてゐるところ、其處が本で人間も嬰兒から成人して来る。何も知らない嬰兒が萬づのことを知る本となる。そこで嬰兒に復歸すると云つても全く赤ん坊になつてしまふのではない。

明らかかなところがあるけれども分らないところを守る。誰の言ふことをも聞くのは知らぬからでない。色々の人の言ふことを聞きますのです。そこで衆人の云ふことをも聞いて處置するから天下の式となる。自ら知ありとして爲した事は偏つたこととなる。天下の式となる時は常德たがはず。無極といふのは無の極で、無とは嬰兒の何も知らない、自分に一物持たずして人の言ひなりになつて居る。それが元來本で、そこに歸る。又富貴であつても貧賤を守る。富貴らしい風をしない。謙つてゐる。すると天下の人が皆集る。富貴らしくしてゐると諂ふ者は集つて来るが、人は皆嫌ふのです。樸といふのは削らない木で、削つてこれから色々にするのです。伐出した儘ですから目立たず無のやうであり、嬰兒のやうである。其處に戻るのです。さて樸を守らずして散ずる、即ち圓く切つたり、角に切つたりして散ずると器になつたり机になつたり色々になるが、聖人は樸といふ處を以て官の長となる。官の長となる者は丁度樸でなければならぬ。官廳は色々手分けしてあるが、その長となる者は樸といふことがなければならぬ。樸の儘にして置けば入用に應じて色々の器になる。官の長たる者も

部下の者のことに小さく手出をしてはならぬ。大割で細かく割かず、細かく切り裂いてしまへば用が限られてしまふ。細かく割らないと必要に應じて幾らでも細くなる。文字の意味はこれだけです。兎角細かく分けるですね。

將欲取天下章第二十九

將欲取天下而爲之者。吾見其不得已。天下神器不可爲也。爲者敗之。執者失之。凡物或行或隨。或噓或吹。或強或弱。或載或隳。是以聖人去甚去奢去泰。

天下の主とならうとする者、「天下取り」とよくいふが、今日でいへば政黨政派の盛な時代には誰某が天下を取つたと云つてゐた。不都合なことですが當時は其の氣分があつた。細工をする者は天下は取れない。得たやうでも滑つて逃げてしまふ。天下は人間の器ではない。神明の器であり、天下は天下のもので、如何に智者でも個人が天下を自由にすることの出来るものではない。細工で出来るものではない。爲す者は取り損なふ。明治以來の政治家の遣り

方を見ても矢張あるですね。明治以來は勿論 天皇の御親政ですから天下を取るといつても總理大臣になることは天下を取つたといふが、爲す者は取り損なふ者があり、なつた者は身を全うすることが出来ない。天下は神器爲すべからずです。

或ひは往き去つてしまふ者もあり、或ひは附いて來る者もある。嘘は天然の呼吸で、緩かな自然のもの、吹は強く息をする。そのやうに強い者もあり弱い者もある。成就する者もあり敗る者もある。これは「天下は神器爲すべからず」です。天下の者を見ても往くもあれば來るもあり、成るもあれば敗るゝ者もある。そこで聖人は甚だしきことを爲さない。奢は暮しの驕りで、金錢を多く費し奢つた生活をし、奢つて横柄驕慢の有様をするやうなことをしない。それ等を去る。いふのは無爲に歸すること、事々しきことはしない。そこで天下が歸するのである。甚、奢、泰は何れも事々しきことをいふのです。

以道佐人主章第三十

以道佐人主者不以兵强天下其事好還師之所處荆棘
生焉大軍之後必有凶年故善者果而已矣不敢以取强

焉果而勿矜果而勿伐果而勿驕果而不得已果而勿強
物壯則老是謂非道非道早已

此の道は無爲の道で、それが問題なんです。それを手に入れることは容易でないのです。道を以て人主を佐け兵を以て強がらず、兵力を多くして以て天下を争ふことをしない。然し兎角それを好むものである。兵力を持つてゐると、其れを恃み、或は多勢を擁すると、多勢の者が議會を制するやうになる。それが今日の弊害となつたのです。忘れてはならないのです。其のことを云つたので、何事でも自己より出づるものは自己に歸るものだ。萬事本に戻るものだ。だから兵を出し軍に長く居ると農業も工業も出來ず荒れ果てゝ荆棘が生える。天物を損ふのみならず人生を毀損する。人の生業を斷ち切つてしまふ。斯くて大軍の後には必ず凶年あり。先づ人間が多く死ぬ。そこで働く者がなくなり、農業が衰へる。のみならず元來軍は多勢の人の血を流すから自然の天の心に反いて、何となしに凶年といふものが來るのである。人の怨も、多くの人を恨まして平氣で居る譯には行かない。是れは勝つても負けても同じで、勝てば勝つて禍があり、負ければ負けて禍がある。歐洲戦争はよい例です。勝つた方も負けた方も大いなる禍を受けてゐる。戦つてそれで片が付くのでなく、戦は又戦を盈むの

です。ヨーロッパ戦争の最中に博多の修福寺に参禅した或人がお暇して歸る際、美濃紙に書いた經の文字を持つて来て、之をお前に上げると云つて書を下さつた。其れは、新聞に見ると大戦で一日に何千何萬と人が死ぬるが、實に氣の毒なことである。平生ならば日々の勤めが済んで休むのであるが、其の休む時を割いて日々十三枚づゝお經を書いて早く戦争が止むやうに祈願したものであるが、一枚上げると云つて貰つたといふ話であるが、是れはヒューマニチー (humanity) である。日本の如く祖先の國をお守りになるといふ正義の軍は別のことで、支那の軍もヨーロッパの大戦争も覇者の覇權を争つたものに外ならない。國を守る爲に國民が命を捧げるのは當然のことであるが、權勢を矜らん爲に戰を起すことは天の罰を免がれることは出来ない。又人情として忍びないことである。これは支那には随分覇權を争ふ戰があるからかういふ事を老子が云つたのです。

軍をしてもさつさと引き擧げてしまふ、それが果なるものです。已むを得ず戦つても何時迄も戦はない。自分の強いといふことを我が物にしない。すんでしまへばもう強いもない。其の時の勝敗でよい。勝つた時は團扇を擧げる。手拭の一本も貰つてすぐ忘れてしまふ。然るに優勝旗を校長室に飾つて居るといふ如きは元來西洋風である。何時迄も勝つたといふ事を忘れないやうにしようとするが、其の時は勝つても次は勝つとは限らない。勝つた事は早

く忘れるのがよい。これは競争心を刺戟するものです。人情の弱點には投合するが正しいものではない。さうでなく美なるものは果なるものである。果として即ちさつぱりとして矜ること勿れ。驕慢な心を起さない。戦ふといふのも已むを得ず戦ふので、嫌々ながら戦ふので、すぐ止めてしまふ。盛なれば衰へるのは自然の道で、何時迄も勝つて居るといふことはない。こんな強がりをするのは道ではない。道でないことは唯今からやめた方が宜しい。茲は道を以て人主を佐けるので大臣たる程の者に就いていふのです。次は大將のことに就いてである。

夫佳兵章第三十一

夫佳兵者不祥之器。物或惡之。故有道者不處。是以君子居則貴左。用兵則貴右。兵者不祥之器。非君子器。不得已而用之。恬淡爲上。勝而不美。而美之者。是樂殺人。也。夫樂殺人者。不可得志於天下矣。故吉事尚左。凶事尚右。是以

偏將軍處左。上將軍處右。言居上勢。則以喪禮處之。殺人衆多。以悲哀泣之。戰勝以喪禮處之。

軍の上手な軍人は禍の品物だ。斯ういふと軍人は怒るが、勿論日本の如きは國を守る爲に戦ふには、乃木、黒木、東郷の名將は何れも祥い器ですが、支那では欲で戦ふからかういつてあるのです。勿論日本でも妄りに兵を動かしてはならぬ。話ばかり聞いたのでは信玄、謙信の戦争は面白いが、實際自分が引き出されて戦に出たら面白くないのです。軍上手は天下の者が悪むのです。然るに兎角軍をしたがる。故に道ある者は兵といふ處に居らない。それで君子は平生事なき時は左を尙ぶ。左、これは上位です、兵を用ふる時は右する。それは祥くないからである。軍上手がめでたくない計りでなく、兵器その物が祥からざる品物である。これ程大事にしてゐる命を取るところの道具です。けれども國を守る爲なら無くてはならぬ、格別ですが、欲の爲に用ふべきでない。これも已むを得ず用ふることがあるが、濟んだらさつぱりとして恬淡を上となす。それを尙ぶのであります。競争でも勝てば其の時にさつと忘れてしまふのがよいので、優越心は元來卑怯なもので、其れを飽迄味ふのは卑怯なものである。故にたとへ戦に勝つても美しいものとしなない。若し其れを美とするならば人を殺すこ

とを好むことになる。乃木大將も、東郷大將も軍に勝つても人を殺すことを楽しみにされたのではない。已むを得ず斯うしたのであるといふのでなければ人を殺す事を楽しみにすることになる。人を生かすことを楽しみにする者こそ天下を得ることになる。吉禮は左を尙び、凶禮は右を尙ぶ。一方を受けた偏將軍は左に居る。上將軍(總大將)は右に居る。軍の時は上將軍が右に居ることをもつてすれば、既に軍は凶事であることになる。上に居る勢、右に處るのは喪の禮に處ることになる。名將は多くの人を殺したといふことを悲しんで泣く。楠公のやうな人ですね。戦に勝つ時の祝は喪の禮を以て之に處る。敵と雖ども個人に罪があるのでないから、勝つた者も決してめでたいのではない。國に仇する者を退けたのがめでたいのである。そこで立派な將軍は多くの兵を亡くしたといふことが念頭から去らないのですね。乃木大將がさうです。

道常無名章第三十一

道常無名。樸雖小。天下不敢臣。侯王若能守。萬物將自賓。天地相合。以降甘露。人莫之令。而自均。始制有名。名亦既

有^リ夫^レ亦^レ將^ニ知^レ止[○]知^レ止[○]所^ニ以^テ不^レ殆[○]譬^ハ道^ノ之^ニ在^ニ天^下猶^ニ川^谷之^ニ於^ニ江^海也[○]。

道常、此れはやはり所謂老子の道で名なし。名附けると道を毀けてしまふ、樸といふのは道の常で、未だ角に削つたとも、長く切つたともない所で、綺麗に切つて磨き立てゝないから實際は見映がない。往來に轉がしてあつても氣が附かない。目立たない。斯ういふ様な人は見映がないやうだけれども人が之を臣下として驅り使ふことが出来ない。自由によろしい。元來人の自由になるのは名利があるからで、それに附け込んで、或ひは利を以て誘ひ、名を以て動かし、して動かすのである。侯王よく守らば萬物は獨りでに賓客として此方に寄つて來る。此方が賓とするのでなく、向ふの方で自ら賓服して來る。人間のみならず凡てのものがさうである。

天地相合して甘露を降す、天然自然の雨露は草木を潤すから甘露といふ。態ごとではない。天地合するところから自然に降るのです。さういふ雨露は滿遍に降る。此處に濃く彼處に淡いといふことがない。始めて制して名あり。制するは人間の作ることで、其處から始めて名といふものが出来る。名とはつまり此れは佛教であるとか、これは孔子教であるとかい

ふやうなものである。元來道は俺は佛教だ、俺はキリスト教だと名乗つて出たものではない名も亦既にあり、名があるものは有る儘にする。出来れば出来た儘で、そんなものはよして仕舞へといふのではない。無理がない。それもよいけれども他のものを排斥してやつて行かうとすると弊害が起る。佛教でも弊害がないとはいへぬ。凡そ人間の立てたものは弊害がないとはいへぬが、偉大な人は廣く包容する。世界中佛教にしてしまふことも、キリスト教にしてしまふことも出来ない。佛教で救はれなかつた人でもキリスト教で救はれたといふ人もあるので、それを佛教或はキリスト教で世界を征服してしまはうのといふのが止る處を知らない者である。日本精神も、日本精神ばかり云つてゐると日本精神に反^そくことになる。忠君愛國もそうで無理があると反動が起つて來る。二宮尊徳が「忠勤を盡して其の弊を知らざれば忠信に至らず」と云つて居られる。忠勤、忠勤といふとはや其處に弊が起る。併しよい加減にしろといふのではないが、無理があつてはならぬ。尊徳翁でも日本中二宮主義にしようとする弊害がある。それも時を得なければならぬ。それと同じく西洋のものも當嵌る所もあるが合はぬ所もある。商工業の盛になつた今日二宮流の經濟が其の儘當嵌らない。又 天皇中心主義といへば既に他に對するものとなる。天皇中心主義などといふは餘計なことです。唯何ともない處がよいのである。

山から流れ出づる川は皆江海に注ぐのです。如何なる川も皆海に注ぐ如く、天下の道は皆此の道に這入つて来る。天下の萬物皆道に歸する。この道に止りさへすれば危いことはない地上のものは凡て地上にある。深い海も其の底は大地の上にある。高く聳える富士山も大地の上にある。空を飛ぶ飛行機も大地を離れたものではない。然るに大地を忘れて空中に飛ぶ。空中に居るも水中に居るも結局は大地に落着くのです。其處に腹を据えて置けば間違ひない。先づ價值を好むことが禁物なんです。大地に坐り込んでゐるのが一番安全である。正邪善悪色々の苦も、色々の楽しみも、道を外れたものではない。道がなければ悪事を爲すことも出来ぬし、道がなければ煩悩の起りやうもない。

知人者智章第三十三

知^レ人^ハ者^ハ智^{ナリ}。自^ラ知^ル者^ハ明^{ナリ}。勝^レ人^ハ者^ハ有^レ力^{ナリ}。自^ラ勝^ツ者^ハ強^{ナリ}。知^レ足^ル者^ハ富^ム。強^ク行者^ハ有^レ志^{ナリ}。不^レ失^ル其^ノ所^ニ者^ハ久^シ。死^シ而不^レ亡^ル者^ハ壽^シ。

人の身の上をよく知つて居る者は智者である。自分の心をよく知つてゐる者は明。人の事

をよく知つてゐる者は兎角自分の事に氣が附かぬ。自分の事を知つてゐる者は人の事は餘り知らうとはせない。

これは拵へ事か知らんが、孔子が子貢にお前はどうか、子貢人を愛すと答ふ。結構だ、顔淵に問ふ、私は自ら愛したいと答ふ、明君子なりと。

人に勝つ者は力ある者であるが、人に勝たう勝たうとすることが既に自分の欲に負けてゐること、元來人に取り合つてゐるので、其れだけ弱い。自ら勝つ、自分の欲に打勝つ者が本當の強者で、自らに勝たうとする者は人に勝たうとする暇はない。足ることを知れば富めり。一旦極めた所は何處迄も爲し遂げる、其れは志の強いものである。自分の居り場所を失はない。空を飛ぶ鳥は其の處を失はず、魚は水を離れず、日本人は日本を離れない。各々其の所あり。或ひは學問教育に於て各々其の處があり、男子は男子、女子は女子、其の處を失はぬ者は長持がする。幾ら水泳が上手でも何時迄も水中に居られるものではない。結局本に戻る。幾ら日本人が外國人の眞似をしても結局地金が出ずには居らぬ。死んで亡びず、不生不滅といふが、自分で其の境涯に至つて見ねば分らんが、死んで亡びざる者は壽長し、そこ迄行けば大丈夫です。

大道汎兮章第三十四

大道汎兮其可左右萬物恃之以生而不辭功成不居衣被名有愛養萬物而不爲主故常無欲可名於小矣萬物歸之而不爲主可名於大矣是以聖人能成其大也以其不自大故能成其大

大道は汎として右にでも左にでも縦横自在に行ける。天空開濶である。萬物も其の大道から生じて來るのである。其處を恃にして生ずるが、生ずれば生ずる儘で辭退をしない。幾ら生じても制限をしない。功を成就しても俺がしたのだと手柄に處らない。道は萬物に行き渡るが、俺のお蔭だと主となることはない。又欲することがないから見映がない。あれども無きが如く、それで小といふ。普通の者はそれを眼中に置いて居らん。萬物が歸しても歸したとも何ともない。俺が主であるといふことを忘れてゐる。普通の人は僅かなもの、主人となつても自分は主であると思つてゐる。然るに萬物が此れに歸しても萬物の主であるとならぬ。其處が大なるところである。そこで聖人は自ら大としないからして大である。

執大象章第三十五

執大象天下往而不害安平泰樂與餌過客止道之出言淡乎其無味視之不足見聽之不足聞用之不可既

大象とは即ち道のことです。大いなる象は是れぞといつて掴まへることの出来ないもの、そんなものこそ大きいもので、何とも限定の出来ないものこそ大である。何處に往つても邪魔にならない。一物持つてゐると或所には善いが或所には差支がある。儒教でも佛教でも其れを免がれない。大象は何處に往つても物の邪魔にならない。元來是れぞといふところが無いから邪魔にならない。けれども無いものではなく嚴然としてあるものである。佛教で「無畏を施す」といふが、大膽不敵ではない。天下往くとして害せず。邪魔あれば蹴飛ばして行くのは無畏ではない。ゆつたりとしてゐる。故に安く平かに泰なり。

お客さんは何時迄も居るものではない。お客が來られたらそれ迄で、音楽も面白いからとて何時迄も音楽をやるのでなく、又旨かつたからといつて何時迄も御馳走を置く譯ではない。

これ程の道ならば大いなるものであるかと思ふと、淡泊で何の味ひもない。いふのは是れ

ぞといふことはない、唯ある通りにあるからです。然るに在る通りに見えない。花は紅、柳は緑である。「逝くものは斯くの如きか」で滔々として流れて行く。昨日の花は最う青葉になつてしまつてゐる。価値だの存在だの、そんなものではない。聞けば値打があるといふものではないが、實は値打が無いのでもなく、幾らでも盡きない。酒でも正宗だといつても旨くても其れ迄の話であるが、水なれば無味であるが、是れで酒も出来れば醤油も出来るし、それで飯も炊けるのである。

將欲噏之章第三十六

將欲噏之必固張之。將欲弱之必固強之。將欲廢之必固興之。將欲奪之必固與之。是謂微明。柔之勝剛。弱之勝強。魚不可脫於淵。國之利器不可示人。

これから緩めようと思へば先づ以て張る。之を弱めんとすれば先づ以て固より之を強くする。強い者を弱めてこそ弱めることが出来る。廢てようとなれば既に興して置くのである。

何もない者から奪ふことも出来ないから奪はんと思へば興へておくのです。茲は悪い政治家が悪用することがある。例へば四十萬石下さつたと福島正則が喜んでゐると次は其れを取り上げてしまふ。ずるいやり方である。老子の道はさうでない。弱いがよいとか強いがよいとか極つたものでなく、興廢與奪相寄つたものです。然るに興した時には廢れることが見え、満開の時には散ることが見えない。この道理は普通の者には見えない、そこで微明といふ。強い者が勝つのは分り易いが柔なる者が強いとは分りにくい。そこが微明である。魚は淵を逃れられない、その如く人間は道を外れることは出来ない。次に利器とは兵のことなんです。國の利器は人に示すべからず。ロシヤのやうに常備軍が何萬あるとか、飛行機が何臺あるとか云つて人に示すのではない。手腕を見せなければならぬとなると間違が起り易い。

(六月三十日講)

道常無爲章第三十七

道常無爲而無不爲。侯王若能守萬物將自化。化而欲作。吾將鎮之以無名之樸。無名樸亦將不欲。不欲以靜。天下

道とは例の常の道で老子の道である。無爲にして爲さずといふことなし。聞かうとせぬが耳は何でも聞いてゐる。天然自然で少しも拵へごとなし。自然のものは自然に出来るから爲さなくして無さずといふことなしである。侯王は人の上に立つものであるから此の無爲を守る。萬物すら自から化せんとす、萬物も自然であるから無爲を守ると自から靡き伏する。化すると何か一事起るのである。孔子の感化を受けると孔子流となり、感化を受けると其處に派が起る。例へば南洲翁が薩摩の青年を化すると何か起る。そこが氣を付けねばならぬ所である。化するならまだよいが世間では化せずして人を引き付けようとする。さうすると無理が出来る。

世間は騒いでも自分が出て鎮めてやらうとするのではないが、さうせんでも自然に鎮まる。老子からいふと無能の者が役に立つ。金でも無ければ一つやつて見たいとならないが、金があると一つやつて見たいといふことになる。そこで間違ひが起る。

上德不德章第三十八

上德不德。是以有德。下德不德。是以無德。上德無爲而無以爲。下德爲之。而有以爲。上仁爲之。而無以爲。上義爲之。而有以爲。上禮爲之。而莫之應。則攘臂而仍之。故失道而後德。失德而後仁。失仁而後義。失義而後禮。夫禮者。忠信之薄。而亂之首也。前識者。道之華。而愚之始也。是以大丈夫處其厚。不居其薄。居其實。不居其華。故去彼取之。

上德は德あらず。上々の德は德あつても自分が德あることを知らん。儒教ではさういふんですが、老子の方では德は元來無いんだといふ。上德はさういふ、附けたものはない。唯人間でよいので、德といふものを別にひつ附けんでもよい。何も無いのが上德で、德があればひつ附けたものである。列子が壺丘子といふ賢人に道を聞いたといふが、その行く時には列子

を見ると人々が道を譲り貴んだのに、道を聞いて歸る時には道を争つたといふ話がある。道を聞いて歸りには當り前の人間になつてゐたといふが、さうかといつて凡人ではない。そこに徳とも何ともいふことの出来ない自然といふことがある。

下徳、低い徳は何か一段際立つたものがある。それは取つて附けたもので徳がない。上徳は無爲なもので、それで斯様にしようとする事が出来ない。以てすることがない。例へば劍術に上達した者だと、此處を突込んでやらうといふ所がない、相手の隙を狙はないが、隙があるから自然に劍が這入つて行くのである。例へば水は這入つてやらうとしないが、穴があれば自然に流れて行く。其のやうにここは斯うしなければならんといふのではない。元來無爲であるからその場その場に爲すのである。

仁は徳よりも一段低いもので、徳は仁義禮智と隔つたものではない。仁となると不仁に對したものは、有爲に屬するものですが、仁者だから殊更にするのでなく、自然に行はれる。以て爲す人よりも一段高い。然しはや仁とか慈悲とかいふのであるから有爲なもので、不仁であつてはならぬとか、慈悲に違つてはならぬといふことがある。此處は違ふと理否の詮議をする。

禮といふものは形式で、作爲したものの、禮法なんです。義は其の心の方ですが、禮は道として形に現はれたもの、其の通りに従ひませんと、腕づくで引張つて行つて其の通りにさせ

る。法律の如きはさうです。支那の禮もさうです。さういふ次第ですから道は既に失してゐる。上徳といつても既に得たものといふ様子がある。上徳は無爲にして爲すなしと云つても得たものである。上徳は一應老子の立場から云へば道の方が上のもので、道は上も下もないもので、皆道から出て来る。道から下つて仁とか慈悲とか云ひ出し、又一段下つて善といひ尚一段下ると禮といふやうに形に現はれて人を率ゐて行かうといふやうになつた。

今日で云へば文化で、文化は人間の拵へ事です。拵へごとであるから天然の眞理と違つて来る。それで、其れを脱却して本然の道に歸らうといふのが老子の主意です。儒教は禮で世の中を齊へて行かうとするものであるが、老子は天然の趣意に依らうとする。人爲の禮の弊を説いたものであるか何れかよく分らないが、茲は其處がよく出てゐる。

道を失つて徳あり、徳を失つて仁、仁を失つて義、義を失つて後禮あり。今日文化といふことは、文化といふ其の文化といふことが既に飾ることです。支那の學問といふと禮の學問と云つてよいといはれる位で、其れだけ支那の生活は拵へ事で、さういふ風に人間生活を拵へるのです。日本の如きは老子に近いですね。ですから宣長と眞淵は老子を褒める。事實自然に近いからである。天然自然に近い。その一番よい標本は鳥居です。こんな簡易なものは何處へ行つても世界中にないのです。

夫れ禮は亂の始なり。今日でいふと法律のことでよく分る。法律は増す計りです。今迄の法律では其の目をくゞるから、それではいけないからと目を細かくし、又それでも未だいかぬからと細かにする。小作爭議といふことがあると、(小作調停法といふ)法を作る。すると其の法を潜つて争ふから又細かにする。法律が一つ増えれば一つ訴訟事件が多くなる。プラトンも醫者と法律家の多い國は下等國だと云つてゐる。

前識とは前言往行で物識りの事です。道の華にして愚の始なり、道の華はハナヤカなことあれも識りこれも識り華やかです。然し元來根本を掴へたならば、つきりしたものである。然るに根本を見ずして、斯うも云つてあるあゝも云つてあると知識が多いと迷ふ。知識が多ければ知識に迷ふ。惑ふのが愚です。一つしか識つてゐなければ造作はない。根本に明らかかな者はさういふ迷がない。材料が多くあると整理がむづかしくなる。それで多くの人間が居るから其の結論(多數決)が善いとは必ずしもいへない。斯ういふことは例の四十七士の話で、世間の者は論ずる迄もなく其の話を一寸と聞いただけでも如何にも忠臣義士だといふが、徠とか佐藤とかいふ儒者は國の大法を破つた者だと非難したが、今日では明らかに誰も承知してゐるやうに義士である。當時世間の者でも明らかに義士であると感じた。然るに儒者佐藤直方が四十七士は義士ではないと云つた。そこで其れを聞いて、佐藤先生は義士でないといふ

いふから人が質問した。すると結局佐藤の方が言ひ詰つた。そこで困つて、「天下の老中が裁判して罪があると極めたのであるから悪い」と答へた。老中が極めたからといつて、老中で天下の正邪がきまるなら何も學者が義理を詮議する必要はない。佐藤直方は學問があるから迷つたのです。さうすると寧ろ教育を受けない者の方がよい。世間では無教育で何もない者の方がよいこともある。何か専門の事をするには知識がいるが、誰にも天然の良心が具はつてゐるから教育の無い者の方が却つて善い判断をすることもある。

其處で大丈夫は厚きに處つて其の薄きに居らず。厚きは即ち道です。値引きをしても上仁です。仁義禮智といふが、その厚き所は老子から云へば仁も物足らん。其の實に居つて其の華に居らず、實に居つて色んな物識に居らん。その華を去つて實を取る。戊申詔書に「華を去り實に就き」とあるがこゝから出て居るのかも知らん。

昔之得一章第三十九

昔之得一者。天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以生。王侯得一以為天下貞。其致之一。

也。天無^ニ以^テ清^キ將^ク恐^ク裂^ケ。地無^ニ以^テ寧^キ將^ク恐^ク發^ス神^ニ無^ニ以^テ靈^キ將^ク恐^ク歇^ス。
 谷無^ニ以^テ盈^ム將^ク恐^ク竭^ス。萬物無^ニ以^テ生^ズ將^ク恐^ク滅^ス。侯王無^ニ以^テ爲^ル貞^ニ而
 貴^キ高^キ將^ク恐^ク蹙^ス。故^ニ貴^キ以^テ賤^キ爲^ル本^ト。高^キ以^テ下^ニ爲^ル基^ト。是^レ以^テ侯王自謂^ニ
 孤寡不穀。此其以^テ賤^キ爲^ル本^ト耶。非^ズ乎。故^ニ致^ス數^レ車^ヲ無^レ車^ヲ。不^レ欲^ニ碌
 々如^ク玉落^ク々如^ク石^ノ。

昔の一を得る、此の昔は時間上の昔ではない。古今變らぬ一を得ることはどういふことか、
 天は清明なもの、見渡す限り眼を遮るものはない。こんなものです。地は一を得て居るから
 其のために泰然としてゐる。地は萬物を載せて凡ての動亂も地の上に居る。神、これは靈活
 なもの、それは一を得てゐる。例へば人間の四肢五體で、感覺でも髪の毛一本引張つても感
 ずる。身體のどの端に觸つても感ずる。其處が一で響く。天地神明もさうなんです。柳が芽
 を出す、草木が成長する。何れも孤立したものは一つもないのです。
 谷は窪んだ所で、何でも這入る擇り分けがない、残らず皆受入れてしまふ。そこで一を得て

萬物生ず。「生物不^レ貳」と云つてある。二宮尊徳翁は、

夕立と姿をかへて日月の
 恵む情のはげしかりける

と歌つて居られる。詰り夕立がさつと降つて來るといふので、それで稻がよく出來る。いふ
 のは日月がさうするのである。陰陽日月が夕立ともなり、霧ともなる。降る時に降り、照る
 時には照りしてさうして萬物を生ずる。親は一心になつて小供を育てる。藝術家は作品に一
 心になつて作り上げる。萬物は一を得て以て生ずる。王侯は正しいことで天下の手本となる
 それは天下の一を得て始めてさうで、其の之を致す、即ち正を致す、徳を致す、其の徳を致
 すのは夫々一を以て致すので、若し天が一を得て清きことがなければ、恐らくは裂けはせぬ
 か。地は一を得て寧きことがなければ、大地そのものが動搖するやうになりはしないか。神
 靈活なる所がなければ歇まん。谷は一を得なければものが盈ちてゐるのが乾枯びてしまふ。
 萬物は一を得て生ずるといふことがなければ滅びようとする。將に滅びんとする。王侯が萬人
 の手本となるやうでなくて、高い所に居ると危い。萬人の歸一する所なくして王侯とならば
 ひつくり覆る。故に元來貴い王侯は賤しい民を本とするものだ。であるから王侯は自ら孤寡
 といふ。孤寡は天下の弱者である。不穀はよからずといふこと、自分のことを孤といひ、寡

といふこともある。是れは自分を卑めていふことで、これは賤を以て本とするのであるか、さうでないか。

ここでその、我が國では「貴を貴とする」天皇は天皇として位に奉る。天照大神の御胤である、やんごとなきお方であるといふことで日本の君民の位は定まつてゐるのです。支那は仁によつて君となるので、仁を失ふと君の位を失ふ。其處が國體の相違で、我國では人爲に屬せないものである。支那は人の爲に屬するものである。併し人の君となつては仁に止るといふことは要らないかといふとさうでない。臣からいふと君君ならずとも臣臣たるべしであるが、君の方からいへば、それでは國は安まらない。仁君は神の御胤であればある程、民を尊重して君徳を御磨きなされる。日本のみ眞實の仁君がある。そこで儒教は君の御修養に役に立つことはある。暴君の國の亡んだことは人の世の眞理で、其れは鏡である。日本の國體は嚴然として動かぬから儒教は要らぬといふことはない。然し又支那では「臣は惟れ邦の本」と云つてある。民本主義で日本の國體とは全く違つてゐる。然し天皇の御修養としては大事なことで、又事實天皇は民の事ばかり御心配になつてゐる。すると「民惟邦本」も捨てたものではない。君君ならずとも臣臣たるべしといつては君の御修養にはならぬ。君は民意を尊重なさるのである。貴を貴とすとは其の主意と違つてゐる様であるけれども、其の實を得て居る。

民權は日本の國體に反するが、日本の憲法では朕は人民の生命財産を貴重するといはれてゐる。君の方で人にまして民權を大事になさる。西洋のいふ權利と考へたら間違である。然し本さへ立てば民權主義も役立つ。松陰は孔孟餘話を書いて孟子を説いてゐるが、孟子も利用すれば皆日本の國體を説いてゐる。佛教にしても其の然らざる點を擧げれば差支へるが、日本の國の立場に立つて見ればそれを養ふものとなる。日本はさういふ國で、外のものを採る時には其れに溺れる事もあるが、何時か其れを同化して生きて來る。儒教でも佛教でも日本へ來て生きてゐる。其の本の國では既に無くならうとしてゐるけれども、却つて我が國で生きてゐる。賤を以て本とするといふことは貴を貴とするといふことを愈々確實にする。

車は一々數へて來ると此れは軸である、此れは輻である、此れは長柄であると、一々分解すれば車の正體は無くなつてしまふ。家でも此れは納屋、此れは物置と段々分解すれば家といふものがなくなつてしまふ。我々一身でも先づ親が生んで先生が教へる。此の身を養ふ米は色々の人が作り、さういふもので皆んな成つてゐる。大學の學生の學識でも皆人の寄せ集めである。それを分ければ皆んな無くなつてしまふ。元來無我の教である。凡て滅すべきものがなくなつてしまつた其處が道なんです。

碌々ごとくとして塊の如く、落々がら／＼としてゐる。斯ういふものは塊で集つて居る

もの、石や瓦の如き一物あるものを欲せない。寧ろ車の如く集力で出来たものがましだ。一といふものは固つたものではないのだ。道のことを一といつてある。

反者道之動章第四十

反者道之動。弱者道之用。天下之物生於有。有生於無。

反るといふことは本へ歸ること、進に對しては退、反るの道は復へる、退くです。道は往くも歸るもないが、道の用は反る。先に進まずに控へる。謙遜といふことはさうで、道そのものは進退はないが、其の用をいへば弱である。弱と云つても世間の云ふ弱いといふことではない。進むに對しては退く方、謙遜する、控へ目にして居る。それが道の用である。何でさうなるか、天下のものは有ればこそ生ずる。其の有るものは無から出来てゐる。我々があるのは親あり先生があるからであるが、それは有るものではない。さうすると無に歸る。それで謙遜するのが當り前で、威張るといふことがある筈がない。すると反る道は謙遜であり、退くことである。

上士聞道章第四十一

上士聞道勤而行之。中士聞道若存若亡。下士聞道大笑之。不笑不足以爲道。故建言有之。明道若昧。夷道若類。進道若退。上德若谷。大德若辱。廣德若不足。建德若偷。質真若渝。大方無隅。大器晚成。大音希聲。大象無形。道隱無名。夫惟道善貸且成。

上士は一番上等の人物なんです。上等の士は道に至りたいと勉強して行かうとする。中士になると、道があると思つて勉強してゐることもあり、道を聞いた時は道は存するものとしてゐるが、何時か道を忘れて怠つて居る。下士は虚無、柔弱程馬鹿馬鹿しいものは無いと云つて道を聞かず、進んで取るといふことを道であるといふやうになる。さうすると道を大いに笑ふ。そして其の道を行ふ人を狂人扱にする。世間の見方とは違つてゐる。故に建言あり、……故に昔の言葉にもある。老子には昔の言葉がよく引いてある。明道は味が如し、極

く分りよいものは味いに似てゐる。知れ切つたことは氣が附かない。高低があるとよく分るが、何の奇もない平凡なものは見えない。本當に進む道は退くやうに見える。此の事を實際經濟に應用したのが二宮尊徳で、「讓奪の辨」といふのがある。湯に入つて押すと湯が逃げる。退いて逃げると湯が押して来る。勞を讓つて骨を折る。米の出来る迄勞力を讓ると秋は實法

る。
本當の道は退くやうに見える。その如く何でも謙つて、一向好嫌がない。正邪善惡のなにかの如く見える。大いに白いものは汚れてゐるかの如く見える。廣徳は何だか物足らんやうな、はきくしないやうな。建徳は徳を建てる。儉むとは目に見えないことをいふのである。澤庵和尚は「密にして露はさぬなり、是を儉と云ふ、ぬすみは人の知らぬやうにこつそりするからである」と。質眞は滌るが若し。質眞は言葉を違はない。武士に二言はないといふやうには見えない、違ふやうに見える。

盡^{シテ}忠^ヲ勤^ニ不^レ知^ラ其^ノ弊^ヲ不^レ至^ラ忠^ニ信^ニ

盡^{シテ}忠^ヲ勤^ニ知^レ有^ル其^ノ弊^ヲ必^ズ至^ル忠^ニ信^ニ

(二宮尊徳忠信ノ解)

尊徳先生は儒者よりも一段高い見識があるから、仁義仁義と云つてゐると結局仁義に合は

ない。善惡不仁であるといふ事を悟つて居られる。此の兩方を全うして始めて一方を知る事が出来る。日本精神日本精神と云つてゐるとそれに違ふやうになる。

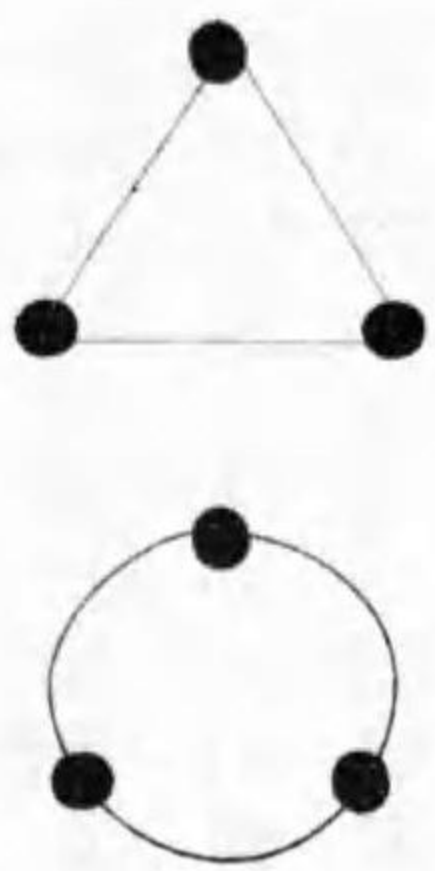
君は重しといふことは臣は重しといふことによつて根となる。彼も此も同じといふ根柢に立つて始めて彼我が分る。根柢を掘り下げると、萬國に通ずるものに出逢はねばならぬ。父が羊を盗んだからと云つて子が其れを訴へることは本當に正直とは思へない。大いに正しいものは角がない。何處へ持つて行つても圓滿で角々しい處がない。差支がない。大器は晩成であり、大音は聲希なり。何も云はずに維摩の一黙、聲雷の如しで、何でも口數多く喋れば其れが善いといふのではない。黙して効があればそれに越したことはない。それで道は推し詰めていふと、道は貸すものである。人に遣つてしまふ。與へてしまふ。よく貸す、そして無くなつてしまはない。成就する。自分で取つて成就するのではない。(九月二十二日講)

道生一章第四十一

道生^レ一^〇。一生^レ二^〇。二生^レ三^〇。三生^レ萬^〇。萬物^ニ負^レ陰^ヲ而^テ抱^ク陽^ヲ。冲氣^ハ以^テ爲^レ和^ヲ。人^ノ所^レ惡^ム唯^ニ孤^ニ寡^ニ不^レ穀^ヲ。而^テ王^ノ公^ハ以^テ爲^レ稱^ヲ。物^ハ或^ハ損^レ之^ヲ

而益^{○シ}益^{レテ}之^ヲ而損^ス。人^ノ所^レ教^{フル}亦^レ我^ノ義^ヲ教^{レテ}之^ヲ。強^ナ梁^ナ者^ハ不^レ得^ニ其^ノ死^ヲ。
吾^レ將^ニ以^テ爲^ス教^ノ父^ト。

是は名高い言葉です。一、二を生じ、二、三を生じ、三、萬物を生ず。三といふのは一、二、三と際限がないからよき程に止めたのではない。必然のことで、物は三によつて始めて成るのである。



三で始めて循環する。三点が形を成すに必要なにして充分な点なんです。元來二つでよいのです。然し二を二とするには其れを超えたものがなければならぬ。

そこで三がなければ二になれない。それで三、萬物を生ずと云つてある。三といふものが萬物のプリンシプル原理なんです。プラトンのチマイオスでは物は△心は○で表はしてある。此の一といふのは一、二、三、の一を超脱したもの、それが道で、道と一とは同じなんです。併しここでは一といふのは道より一段下つたものと見てゐる。

道……↓一……↓二……↓三……↓萬物
一↑……萬法

「萬法一に歸す」とある、道は此の一で、無名なんです。老子の虚無です。

さて出來ました萬物は、陰を負うて陽を抱き、冲氣即ち陰陽でないもので、陰陽を和合せしむるものと現はれて來なければならぬ。負う抱くとは前後のこと、陰が裏にあり陽が表にある。見た姿は陽で表に現はれたもの、山なら山、川なら川、形をなすものは Active 積極的なものである。其の形をなす現はれたもの、裏に陰がなければならぬ。それが虚で、普通我我があると思ふのは表だけしか氣が附かぬ。裏のものを知らん。却つて背後の虚を知つて始めて現れたものが實となる。

虚………陰………裏
實………陽………表

例へば講演をする時、其の表に現はれた所を聞いて、其の人を知ることとは出來ない。其の裏に底の知れぬ學識があつて、其處から現はれて來るのである。ものは修養が大事で、其の場其の場に出て來なければならぬ。譬へば着物が家の藏に一杯ある、お祭に着てゐるのは其の内一枚だけである。

東洋と西洋といふ事で様子の違ふところがある。東洋では虚、即ち裏に力を用ふる。内を養ふところがある。繪を描くにしても西洋は残らず寫實的に畫くが、東洋は簡單に描いて省

き控へてゐる。西洋の教會だと、其れを畫けば善盡し、美盡し、其處だけにかたまつてゐる。日本の神社は鳥居を一つ描いて森を描いて置けば神社に見える。背景に大自然を畫く。大自然といふところのもの、それが虚なんです。其の前面に一寸出てゐる。東洋はさうである。日本の「ことあげせぬ國」とはさういふことにもなる。何でもさうだらうと思ふです。陰を負ひ、陽を前にする。西洋でもさうですが、大體から云へば西洋は表を前に出す。西洋には墨繪といふものがない。東洋では線で表はし墨で畫いてあつても、櫻は櫻と見える。又東洋では單獨に突立つた繪を畫くといつたことはない。人間だけ離して描かない。のみならず畫かすに残してある。此の虚なる所に無限のものがある。その空け具合が大事なものである。虚は隠れて見えない。氣を付けて見ればあるけれども見えない。虚はよく見ればある。虚實元來一つである。陰陽を統一するものがなければならんが此の三つは一で、こんな對立があるのでなく、畢竟は一つなんです。三萬物を生ずといへば *Dialektik* のやうにも聞える。然し此の見地はもつと廣い。 *Dialektik* には道といふものが出てゐない。陰陽も出てゐない。我々は陰の方が寧ろ大事なのです。事實なり道理なり眞偽に東西の別はなく、其の顯はれ方に別がある理ですね。槍を以て突くのは人の首を突くだけです、槍は千人を貫くものを持つてゐる。そこが鍛練で、我々は鍛練を尙ぶ。近頃は小學校で繪を描くのを見るに上手に描く、我々の

小さい頃はもつとまづかつた。然し一つの線を引く習練をせず形をとる事のみ力を入れてゐる。昔は一字一劃を習練したものです。今日のは形は出來てゐるが含蓄がない。字を書いて見ても一がむづかしい、これさへ出來れば出來る譯です。

萬物は陰をバックにして陽を表に現はす。年々の修練を陰に積んで置けば、其れが表に現はれて來る。孤寡(幼にして父母なき者、老いて妻なき者)は人の嫌ふ所、よくない事である。それに王公は人の嫌ふ所の孤寡を以て自ら其の稱號とする。故に物或は之を損す。減らすといふと増す。謙ると人がやつて來る。此方から主張すると嫌ふ。貸すと成就する。二宮尊徳の經濟の原理は貸すこと、讓るといふことなんです。人の教ふる所……これが義に叶ふんだと強ひて附ける所がある。其處を老子は嫌ふのである。忠孝でも理詰で教へる。斯ういふ道理だから忠孝でなければなるまいかと押すと、それでは人は服せない。強梁なる者は其の死を得ず、即ち強い者はいゝ死に様はしないといふことです。強がりをする者は死に様がよくない。斯ういふことをいふのが教の父なんです。

天下至柔章第四十三

天下之至柔。馳騁天下之至堅。無有入於無間。是以知無

爲之有益也。不言之教。無爲之益。天下希及之矣。

天下の至柔といふのは無爲のことなんです。至つて柔かいものは至つて堅いものゝ中に入り込む。水なら水はどういふ處にも這入つて行く、岩をも穿つ。形のないものは針の先程の間にも入る。自分自身を主張しない。それで、丸なものには丸、角なものには角になる。すると無爲の益あるを知る。思想戦をしない。言はざるの教、即ち細工をしない。爲す無き之に及びつくものはない。これが一番效目があるのだ。言ふと反対したがるが唯實行して見せれば其れに真似る。實行しても俺の様にするのだと云ふと最うすぐに反対したがる。イギリスで子供を教へる秘訣として「Don't preach」説教するな」と云つてある。それが子を教へる秘訣である。

名與身章第四十四

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。是故甚愛必大費。
多藏必厚亡。知足不辱。知止不殆。可以長久。

名譽と此の身とどちらが親しいか、云ふ迄もなく自分の身が親しい。身と貨と何れが重き

かいふ迄もなく身の方が重い。身あつての名譽であり、身あつての寶である。斯う反省して見ると誰も知つてゐるが、實際は人は身を忘れて名利や寶を求めて離離してゐる。

得ると亡ふと何れが病ましいか。得る時は嬉しい、失ふ時は悲しい。子を亡つた時は悲しいが、さて得た時の嬉しさと失つた時の悲しみは何方の方が強く感ずるか。失つた時の悲しさの方が遙かにじゆつない。金を得た時の喜びよりも、火事なり泥坊で失つた時の方が悲しい。すると元來得ない方がよい。名を愛し過ぎると大いに自分の身命を疲らすのです。身を苦しめ心を疲らすのです。

多く寶を藏めると多く失ふ。着物一枚持つてゐる者は失つても一枚失ふだけです。多く持つて居れば火事でもあれば多く失ふ。名譽なり寶なり足る事を知れば辱を受けない。止まるを知る、よき程に止まると殆くない。際限なく行くと躓く。足る事を知り、止まるを知ればそこで長持ちがするのであります。

こゝに得ると亡ふと何れが病ましいといふことが出てゐますが、それを林註では何方も別に病ましくなく、論ずるに足らないとしてある。然るに澤庵禪師のは失ふ方が「どちらがじゆつないぞ」と云つてある。それは失つた方が病ましい、それで始めから得ない方がよい。

此處は妙に獨逸譯は其の意を得てゐる。

110

Person n. Ruhm, — Was wird der höher Sein ?

Person n. Besitz, — Was ist hier gross und klein ?

Erwerb n. Verlust, — Was bringst der höher Pain ?

と譯してある。併し多、(重し)を分量的に解してをる。

大成若缺章第四十五

大成若^ハ缺^{シク}。其用不^ヤ敝^レ。大盈若^ハ冲^ム。其用不^テ窮^ク。大直若^ハ屈^レ。大巧若^ハ拙^ク。大辯若^ハ訥^ク。躁勝^レ寒。靜勝^レ熱。清靜爲^ニ天下正^一。

大成は大いに成就すること。大いに出来上つたものは何か缺け目があるやうに見える。さういふものは幾ら使つても減らない。智徳を成就したやうな人は卑近な人の言葉にも耳を傾ける。そんな振をするのではなく、元來さう思つてゐる。そこで却つて天下をよく治める。自分の獨り智慧を用ひない。大盈は一杯でない虚しいやうであるが、幾ら使つても無くならない。盈ちたものはどんなに一杯でも遂に無くなつてしまふ。

大直は屈めるが如し、寸分も枉げはしないぞといふやうな様子が見えない。大巧は拙きが如し、何か拙い所があるやうに見える。大辯は立板に水といふやうではない。何處か訥辯の様である。辯の辯たる所が分ればよい。何か屢々撓んでゐるやうだが、此方の思ふ通りに通つて行く。

躁はがや／＼動くこと、動き廻ると暖かになる。丁度其のやうに心を靜かにして居ると暑さに勝つ。夏でも暑い暑いと云つて氣を焦つてゐると却つて暑い。そこで清靜にして天下の正となる。東郷元帥は靜かに沈黙を守つて居られる。そこで何か中心があつて天下の海軍を抑へて居られる。老子は清靜にして天下の正たりと云つてゐる。法を削り削つて尠くしてしまふ。支那で云へば前漢の初めの遣り方は即ち老子を學んだものなんです。

天下有道章第四十六

天下有^レ道。却^シ走^ル馬^一以^テ糞^ス。天下無^レ道。戎馬生^ニ於^テ郊^一。罪莫^レ大^ニ於^テ可^レ欲^一。禍莫^レ大^ニ於^テ不知^レ足^一。咎莫^レ大^ニ於^テ欲^レ得^一。故知^レ足^一之^レ足^一常^ニ足^一。

足る事を知る、この足るのが本當の足るなんです。天下に道ある時は軍馬を押し除けて田を作る馬にする。然るに天下に道がないと、田野から軍馬が出来る。田畑を耕す馬を軍に使ふ。それは結局欲から起る。皆それから間違ひが起る。故に足る事を知るはこれより大なるはない。かういへば分るが自分自身の問題にすると分らない。富士山も遠方から見れば譯はないが、さて登らうとなると案内者がいる。些細な事でもよく見えない。どうしたらよいか分らない。そして自分で間違つても當然と思つてゐる。實際となると分りにくい。他人の事は分り易くても自分の事は分らない。そこで間違ひが起る。

老子は無欲から云つて居るが、日本では氣節を尙ぶといふこともあつて、氣節を尙ぶから欲を離れるといふことになるので、無欲を全う出来る。教育者の中でも間違ひがあるが、他所から見ると分るが、人ごとではない。自分も知らず知らずそれに陥つて居るかも知らん。よく反省せねばならぬ。

老子では卑しい心を起さないといふことになる。支那ではこれがいゝんです。日本でも勿論これで善いが、日本では名といへば國家といふことに係るから、日本人は名を惜しむ。日本の名は國家永遠の道である。支那は國の歴史が其れ程でないから名といへば名利と位の意味である。恥といふ事に就いての見方に何程かの相違が出て来る。

不出戸章第四十七

不出^{シテ}戸^ヲ知^リ天下^ヲ不^{シテ}窺^ハ牖^ヲ見^ル天道^ヲ其^ノ出^ル彌^ト遠^シ其^ノ知^ル彌^ト少^シ是以^テ聖^ノ人^ハ不^{シテ}行^カ而^{シテ}知^リ不^{シテ}見^ラ而^{シテ}名^{アリ}不^{シテ}爲^サ而^{シテ}成^ル

見聞覺知に至る知識が物の真相を知ることではない。内面を修めることが真に天下を知り、天道を知ることである。出て色々の知識を漁る、即ち外部の知識を得ること、さうせずして心を明らかにする。窓から覗いて見ないでも心の内に天道を見る。内と云つても内外はないものです。ですから内を知れば外を見る。

さて知識といふと老子が書いてゐることが既にさうで、知識に馳せて行けば行く程、主な根本を忘れてしまふ。これは實際其のやうですね。勿論知識が要らぬといふのではない。丁度それは金銭のやうなもので、其の使ひやうを知らんと却つて害をなすものである。外を知つても内は暗がりである。是を以て聖人は行かずして知り、徳を現はさず、細工をしないけれども自然に出来る。斯ういふことは易にもある。行かずして行く、大きな眼を見張つて人の様子が分るのではない。寧ろ目を細くしてゐる方がよく分るですね。

爲學日益章第四十八

一二四

爲^{チハ}學^ヲ日益^ス爲^レ道^ヲ日損^ス損^レ之^ヲ又損^ス以至^ル於^ニ無^キ爲^ス無^キ爲^ス而無^レ不^レ爲^ス矣[○]故^ニ取^ル天^下者[○]常^ニ以^テ無^事及^ニ其^有事[○]不^レ足^ニ以^テ取^ル天^下○

世間の所謂學問をすれば日々に益す、今日はこれだけ覺えた昨日はこれだけ覺えた、さういふやうにすればする程益して來るんです。然るに道を修養する、道を我が身に修養するのは今迄あるものを捨て、しまふのです。今日一つ捨て明日一つ棄て、そして捨て、しまふ。と云つて忘れてしまふことではないが、さういふものを大事にしない。遂に無爲に至る。佛敎でもさう云ひますね。曹洞宗で「我が學は退歩の學である」といふ。老子の道をなすは、之を損し之を損す、坐禪をするにもこれ迄の知識を捨ててしまはねばならぬ。今迄持つてゐる知識を捨ててしまはねばならぬ。丁度今迄溜つてゐた塵を捨ててしまふやうに。さうすると一切の作用らきの發する根原に至る。さうすると今迄の知識は別に邪魔にならない。生きて來る。天下を取らうと巧みをやらない。色々のたくみをして天下を取らうと思ふと却つて取り得ない。やむを得ず天下が轉んで這入つたといふ風なものであれば失ふことはない。故に天下を取るには無事を以てするとある。

聖人無常心章第四十九

聖^ハ人^ハ無^シ常^ノ心[○]以^テ百^姓心[○]爲^レ心[○]善^者吾^亦善^レ之[○]不^善者[○]吾^亦善^レ之[○]不^善者[○]吾^亦善^レ之[○]得^レ善[○]矣[○]信^者吾^亦信^レ之[○]不^信者[○]吾^亦信^レ之[○]得^レ信[○]矣[○]聖^人之^在天^下○樸^々爲^ニ天^下○渾^レ心[○]百^姓皆^注其^耳目[○]聖^人皆^孩之[○]

聖人はあれが善いこれが善いと好き嫌ひがない。常の心なしとは其のことです。「惟嫌揀擇」である。そこで百姓の心を以て自分の心とする。百姓の通りなんです。我々は一杯持つて居る、然るに聖人は百姓の通りです。百姓の中善なるものは我も亦善い百姓だとする。不善な者も亦之を容れる。善も悪も斥けない、すると得る。善も悪も結局善となる。擇り分けをして居ると善なるものはよろしいが不善なるものは背いてしまふ。然るに世の中には不善が多いから悪を斥ければ皆背いてしまふ。善し善しと云つて居る。皆信じて居ると、どうも嘘が吐けなくなつてしまふのです。聖人の天下にあるは、あゝの斯うのといふことがない。本當の

心になる。安からずと天下の爲に角を取るやうにすると、不善なる者も嫌がらず不信なる者も信ずる。すると百姓は皆どうせられるかと思つて見てゐる。所が聖人の方はにこ／＼笑つて居る。頑是ない子供のやうに、僅かに笑ふ子供ですから、其れが善い悪いと云つて叱ることがない。何でも皆いゝ方ばかりに取る。悪戯をすれば、いたづらで善いといふ。すればする通りに何でも宜しい宜しいと云つて居る。すると皆天下の者が善となる。實際はこれと遠いやうであるが、又手を着けて見れば何程か効果はあるものです。天下の聖人でなくとも我々の日常に於てもそれがあると思ふです。聖人の常の心なしとは、我々は常に何か持つてゐるのですね。さうでなく暫く自分をおいて先づ彼の立場を聞いて見る。徒に我々の意見を持つて行つては彼の世間には這入ることは出来ない。

出生入死章第五十

出生入死。生之徒十有三。死之徒十有三。民之生動之。死地亦十有三。夫何故。以其生生之厚。蓋聞善攝生者。陸行

不遇兕虎。入軍不被甲兵。兕无所投何角。虎无所措其爪。兵无所容其刃。夫何故。以其无死地焉。

出ればといふのは老子流では欲の世間を出て行くことなんです。出て行くと即ち其れが生きる道なんです。色んな物を味ひ、多くのものを聞いたり見たりして置かうとするのは死する道である。出づる連中の方は十人中の三人、死の方に向ふ者は又十人中三人、民の中、なかば生きなれば死にするものは又十に三ある。然し死地に行かうとする者は、兕角あまり生きようとするからである。生きた上にも生きようとするからである。欲情を節する者は十中残り一つである。攝生する方は出る方なんです。完全に出づる方は生を攝するもので、さういふ者は陸地を行けば野生の猛獣に出遇はない。軍に行つても鎧兜を被ない。といふのは猛獣に出遇つても危害に遇はない。兕虎の如きも角を投げ掛ける所がない。無抵抗である。それに自然に向ふから感ずる。此方に敵する心があるから向ふの猛獣にも感ずるので、害心が此方に無ければ毒蟲も決して刺すものではない。軍の最中でも墨染の衣で出ると刃の刺し所がない。抵抗する様子がなければ刃を向けない。鎧兜を被て出て行くと、それに向つて出て来る、自分から投げ出してしまつた時には其の上どうしようもない。それ故生きる。出づ

るといふことが死ぬことでさうすると生きる。即ち最う其の上死ぬことがない。命を捨てた者は早其の上に命を取らう様もないものです。其の意味です。
 (九月二十九日講)

道生之章第五十一

道生^レ之^レ德^{畜^レ之^レ物^{形^レ之^レ勢^{成^レ之^レ是^{以^テ萬^{物^{無^レ不^{尊^レ道^{而^{貴^レ}}}}}。夫莫^ニ之^{命^{而^{常^{自然^{故^{道^{生^レ之^{畜^レ之^{長^レ}}}}}}。養^レ之^{覆^レ之^{生^{而^{不^{有^{爲^{而^{不^{恃^{長^{而^{不^レ}}}}}}}。宰^{是^{謂^ニ玄^{德^一}}}。}}}}}}}}}}}}

道生^レ之^レ、之といふのは萬物、凡てのものをいふ。道といふものが萬物の本でありますから物を生ずるのです。道ともいひ、無ともいふ。其處から萬物が生ずる。德といふものも道の外にはないが、德は人間に就いて云つたものである。德といふと色々徳があるが、詰り仁德、慈それが恵む徳である。道とか德とかは形のないものです。形の出来たものは物で、形の現はれた時にはこれを物といふのである。其の根本に道があつて、それが生ずるものゝ本であ

る。徳があつて始めて養はれる。物として形に現はすには勢に乗じなければならぬ。勢といひますと、春夏、春氣がよほさないと其れが成就しない。何時でも木の芽が出る譯ではない。又秋とならぬと實がのらない。天然のものもさうですが人間のこともさうで、道理はさうであつても、力はあつても時節を待たなければならぬ。であるが其根本は道であり徳である。道も徳と違つたものではない。老子の道は一番根本を指すのですね。是を以て萬物を尊ばざるなし。其の道が尊いといふのは命するから尊いといふのではない。例へば位なら位に叙する、官なら官に任命する。すると其れだけの位が出来る。さういふものは命することに依つて出来るのであるが、道の尊いのはさういふ風に取つて附けたものではない。自ら然りである。孟子の天爵といふよりも最つと根本的なことである。

徳といひ、物といひ、勢といひ、畢竟道に外ならないから、生ずるのも、養ふのも、伸ばすのも、皆道であり、成就せしむるのも、其れを熟させるのも、其のものを覆ふのも、畢竟道である。これ程に道といふものは物の本である。それ程尊いものであるが、これは自分が生じたものだ、これは自分が爲したものだといふ様子が無い。斯ういふと何でもないやうですが、一寸と僅かな事をして、これは自分がしたのだと云ひたくなる。黙つては居れない。口に出して言はんでも俺がやつたんだといふ氣持があるものである。然るに道は爲して恃ま

ない。自分がやつたんだといふ様子が無い。之を玄德といふ。奥深いのを玄といふ。

一三〇

天下有始章第五十一

天下有^レ始。以^テ爲^ニ天下^ノ母。既^ニ得^ニ其^ノ母。以^テ知^ニ其^ノ子。既^ニ知^ニ其^ノ子。復^タ守^ニ其^ノ母。没^レ身。不^レ殆。塞^ニ其^ノ兌。閉^ニ其^ノ門。終^レ身。不^レ勤。開^ニ其^ノ兌。濟^ニ其^ノ事。終^レ身。不^レ救。見^レ小。曰。明。守^レ柔。曰。強。用^ニ其^ノ光。復^ニ歸^ニ其^ノ明。無^レ遺^ニ身^ノ殃。是^レ謂^ニ襲^ニ常^ト。

天下始め有り、これは道によつて生ずと云つたのと同じで、虚無から萬物が生ずる。すると始めがなければ物は偶然に生ずるものではない。母はものを生むものであるから母といふ。天下とは萬物の事です。儒教では父と云ひますが老子では母といふことを用ひる。老子は陰を本とするから物の始めを母と云ふ。既に母を得て、母即ち道を體得すると萬物の事がよく分る。子といふのは萬物の事で、萬物の由て生ずる根本を承知したら萬物の萬物たる所がよ

く分る。これが本當の知つたといふものなんです。そこで例へば儒教でも物に就いて其の理を究むれば一旦豁然として凡ての事が分ると云つてあるが、其の理を知ることが母を知ることである。そこで老子はどうすれば其れに至るかは説かない。然し其の心持を知つて今日に處するのが大事で、其れを云つてしまへば儒教の修養法になつて墮落する。それで其處から自分自身工夫するのであつて、老子は高尚な事を云つて居るが全く其の方法を説いてないといふ。非難するのは當らない。

萬物は虚無から出て居ることを知れば萬物の真相は凡て分る。是等の萬物は畢竟虚無から出たものである事を忘れない。これが守るです。有るの極地で、また有の極地は無の極地である。巨萬の富を積んでも其の富はあつても無いものだといふことを知る。それが守るで、殆くない。學問知識でも其れを恃にすると失敗する。有れども無きが如しといふところで殆くからず。高位高官でも元は何もない丸裸であるといふことを忘れない。さうすると、どういふ高い處に登つても殆くない。さう考へると世の中に當嵌るですね。富も學問も地位も善いものですが、得よう得ようとすれば間違が起り、得た上にも又其れを恃にするものである。

口を塞いで言はない、門を閉めて出て行かない。多く人は發表するといへば口で言ふ。然し言はず出て行かずと云つても何も言はず何も見ないといふのではない。言つて言はず、見

て見ずといふ所がある。終日口を塞いで居るなら死んで居るのも同じ事です。勤めて勤めずといふやうであれば終身勤めて苦勞がない。口を開き門を開くと終身難儀をする。小といふのは見難いから小といふ。口を塞ぎ門を閉づるのが小で、その微かい所をよく見る。柔といふのは何とも言はず何もせずといふ様子がある。それが強である。何でも口を出して言ふのは老子から云へば弱である。

其の光を用ひて其の明に復歸す……。光の根源に立ち戻る。何時でも根本を離れない。我を忘れて自分の才能に走るといふことがない、さうすると身の殃がない。襲は包むで、萬古變らない道を黙つて自分の身に包んで居る。其れを襲常といふ。老子は斯ういふ風なことは始終云つて居る。

さて現代を見ると、人が一言いへば自分は二言いふ、人が一つやれば自分は二つやるといふやうに、積極的に行くことをするのが人生の意義のやうに考へられて居る世の中に、老子のかういふ事はどうして處すべきであらうかと反問するが、さうでない。大いに處してよいのであるが、其の根本を忘れて唯活動の爲の活動であつてはならない。我々がものを言つて居る、聞いて居る、歩むにしても、見るにしても、歩む者は何であるか、聞く者は何であるか、其の主人公は一々分らない。唯聞く作用らき、歩む作用らき等を知るだけで根本の主人

公は分らない。其處をしつかり掴へなければならん。それは少し見難いですね。小と云つても顕微鏡で見るといふのではない。我々が處するに就いて心の持方が云つてあると思はれるです。

使我介然章第五十三

使我介然有知行於大道。唯施是畏。大道甚夷而民好徑。朝甚除。田甚蕪。倉甚虛。服文采。帶利劍。厭飲食。資財有餘。是謂盜誇。非道哉。

大道を行ふに當つて介然として即ち物の善し悪しを分けるといふやり方で大道を行ふならば危い哉。さう物事をてきはき道理づくめで行ふことは畏るべきことである。大道は高低がはつきりしない。元來大道はのべつなものである。大道を文字通りに道とすると大道往還ですね。そんなものは紛れもないもので、目をつぶつて居つても行けるんです。然るに人は兎角小徑、横道を好む。坦々たる大道は物足らんと云つて横道を好む。そこが介然として知あ

る所で、此の方が近い、あれは廻り道だといふことになる。一足でも早く行けたら大いに得をしたやうに思ふ。それが世間の情である。世間のやつてゐることゝ云つても人の事ではない。自分自身を反省することである。さういふ様子がある。

朝甚除、……掃除をして綺麗におさまつて居る。或は除を廢除の意味にとると、朝庭の事が廢れて居る、民間の田地が荒れてゐる。上の倉も民の蔵も乏しい。併し若し朝除といふことを綺麗におさまつて居ると解くと、成程表は齊つてゐるやうであるが、それは表のことで、實は民の倉は空つぽになつてゐる。さういふ兩用の意味がある。

文采を服し、……文も采もあやで、譬へば洋服屋に行つて色々立派なものを買つて着、或は呉服屋に行つて此の地がよい此の柄がよいと美しい着物を着、劍を帶き堂々と威儀を飾つて居る。さうして美衣美食しても有り餘る程ある。圓札を木の葉のやうに使つてもまだ餘りがある。さうして得意然として居るのは泥坊して自慢してゐるやうなものだ。元來一個人で巨萬の富を有し、美衣美食して財の餘る筈はない。一方では穢い衣を着、不味い食物を食ふや食はずで足りない者がある筈である。然るに立派な邸宅を構へて泰然としてゐるのは泥坊が誇つて居ると同じ事である。これは世の中の事で當つて居るです。

善建者不拔章第五十四

善建者不拔。善抱者不脱。子孫以祭祀不輟。修之身其德乃真。修之家其德乃餘。修之鄉其德乃長。修之國其德乃豐。修之天下其德乃普。故以身觀身。以家觀家。以鄉觀鄉。以國觀國。以天下觀天下。吾何以知天下之然哉。以之。

上手に建てたものは抜けない。抱きやうが悪いと落ちるが、うまく抱いたものは脱ちない。さて然らばどういふ風に建てたのが善く建てるのであるか。どういふ風に抱いたのが善く抱くのであるか。誰が來ても落さないのがよく立てたのではない。老子の虚無の道をやつて行く者が善く建て善く抱くものである。さういふものは子孫も先祖の祭を絶やさず、其の福を受けることが出来る。其の徳を誇るといふのだつたら落ちてしまふ。之を修むると云つてあるが之即ちこれが問題で、之を身に修むれば其の力、功德は本當のものだ。飾ではない。此の道を身に修めた時には善く建つ、之を善く修めて行くと其の功德が流れ流れて其の家に傳

はる。一郷一家のみならず他の郷にも擴がり、一國も豊であり、天下に行き渡らぬ處はない。其の功德は四海に普しといふところがある。ここを林註では、我が家を以て人の家を觀る。我家も人の家も家に於て變りはないから我が家を本として人の家を考へよと云つて居るが、さうも云へるが、自己自身を觀、家で家を觀ること、身で家を觀たり、家で郷を觀たりしない。身に修め、家に修め、その場その場に身なら身、家なら家を全うする。又天下なら天下で天下を觀る、即ち之を天下に修むれば其の徳普し。獨り天下ばかりではない。身に修むれば其の徳は即ち眞である。どうしてさうかといへば之を以てである。之といふのは虚無の道である。(道を以て道を知る、眞理は自證である)老子は始終禪の考案を提供してゐるやうなものですね。

含徳之厚章第五十五

含徳之厚比於赤子。毒蟲不螫。猛獸不據。攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而峻作。精之至也。終日號而

嗑不噉。和之至也。知和曰常。知常曰明。益生曰祥。心使氣

曰強。物壯則老。是謂不道。不道早已。

含徳、含はふくむ。老子の道は兎角内に養つて外に現はさない。それを含徳といふ。それで徳があればある程ないやうな、と云つても隠すのではない。譬へば赤子のやうだ。我々は赤子になつてしまつてはならないが其のやうでなければならぬ。赤子は實際徳を持つてゐる。赤子のやうに害心がないと、害蟲も刺さず、猛獸も寄りたかつて來ない。攫む鳥、驚、熊鷹などの鳥も迫つて來ない。骨も筋も柔かにして、赤ん坊は固く握る。力一杯いれてゐるやうなことではないが固く握る。赤子の男根は矢張精氣が純粹である。子供は一日中號んでゐても聲が噉れない。大人はすぐ噉れるが子供はさうでない。それは怒つたり悲しんで號ぶのでないからです。無心にして號んでゐるからです。

其の和といふのが常で、常を知るのが明である。斯ういふ風に三つの段階がある譯ではないが其の和の和たる所を知るのが明を知るので。生を益す、生じた上にも生を増すのです。金を作つた上にも金を作らうとし、體重が十五貫の者は十六貫に、十六貫になれば十七貫になりたと思ふ。それが生を益すといふことです。それを祥、わざはひである。支那では亂

を治といひますが、祥はめでたくない、禍のことです。何でも其上其の上に益さうとする知識でもさうである。其れはめでたくない。心氣を使ふといふのは詰り勝氣になることで、自然に任せて行くのではなくして、要するに勝心といふことです。頻りに逸つて一步も人より先に出ようとするのが、それを強がりといふ。老子は始終さういふことを嫌ふ。物壯なれば則ち老ゆ。道を得た者は壯といふことも老いるといふこともない。勢に乗じて進むものは屹度衰へる。身體のあるものには盛衰はあるが、身體を持ち乍ら其れを超えるところがある其れが道ですね。道でないものは早くやめよ、といふのです。

歴史は治亂盛衰の物語であり、日本でも然うで皇室の御威徳といふものも、其れが國民に及んだといふ事實からいへば盛衰はある。盛衰はあつても矢張皇室は皇室であつて、源平の盛衰とは違ふ。(源平は)盛であり、又亡びてしまふ。西洋では盛衰が興亡といふことになる。支那でも然うです。君主のみならず何でもさうです。我が國では盛衰あるに拘らず盛衰なきところがある。其處が何かなければならぬところですよ。日本の歴史は今日なら今日です。すつと六七十年來西洋の文物は大いに採り入れられた。勿論取り入れてよいことです。それが這入らねば國際場裡に立つて行けなかつたんです。然し同時に弊害も這入つて居る。然し日本は本に歸るといふことがある。此れとなり又其れとなつて無くなるといふ小波はあるが

本に戻るといふ常といふ事が失はれないですね。天皇の御即位になる時大嘗祭が行はれますが、これは神代の昔のことをなされる。建國の姿を其の儘高天原を今の世に實現されるのが大嘗祭の意義です。物の道理としては支那でも云ふのですが、民族の生活、流れの中に實際やつてゐるのは其の類がないのです。西洋ではルネッサンスとか改革といふことがある。日本では大化の改新といふことはあるが丸切り古へを忘れて來たのではない。其のところは爲政者、教育者の考ふべきところである。

日本でも時の勢で朝鮮併合といふこともあり、さうせねばならぬ事もあるが、さうでなくして覇圖を逞しくし、覇者になつて強大な國家を作らうとなると、其れは考へなければならぬですね。譬へば天皇の御稜威が世界に及ぶといふことを日本が世界を丸ごと取つてしまふことと思ふと大間違で、四海兄弟の如く思はれ、世界人類の幸福を願はれることが御稜威が萬國に及ぶことで、又そんな心を持つてゐるのは他國の王にはない。獨逸のカイゼルにもない。それで御稜威が萬國に及ぶといふことを日本の領土にするといふこと、解してはならない。然う解する人は恐らくなからうけれども。

常は建國の古へに歸る、其の本を忘れない、他國の文化を採つても其の本を忘れないのが日本の永遠に續いて行く譯です。我々の肉體の如きは壯なものも衰へるが、我が民族國家が

興亡するとは思はれない。永遠に続いて行くものである。

支那人としては此の道を用ふる。仙人の流儀は同じい。支那の流儀は勝つといふよりも負けないといふ行き方で、民族としては支那は永いですね。文化としても日本より永い。世界ではギリシヤ、ローマは亡んでも、支那民族は亡びない。老子は支那民族の流儀をよく現はしたもので、支那人は消極的な所がある。然し消極ばかりでもいけないが。

表に現はさずして養ふ。静といふところを根據として活動する。活動の中にも動かないところがある。繪畫舞踊或ひは日本の文學、日本の言葉の構造そのもの、或ひは日本の神話等色々の點で其れを指摘するものがある。其の道理は何處にも當嵌るものだが、何程か其れが實行されて居る。

一身は赤ん坊から老人になつて死ぬが、家となると家で続けば永續ですね。老子の道は壯なれば則ち老いるといふ自然界の道を超脱する道なんです。道には盛衰がないのである。この道ならざることは已めよといふ。

氣を使ふことをしない。要するに現代は餘り狭い意味の自覺が甚だしい。内に關した意識以下のことでなくして、僅かのことでも意識にのぼせる。それが甚だしい。赤ん坊は知つて知らざる所がある。然うなると赤ん坊は徳があるといふことになる。

知者不言章第五十六

知者不言。言者不知。塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。是謂玄同。不可得而親。不可得而疏。不可得而利。不可得而害。不可得而貴。不可得而賤。故爲天下貴。

これも名高い言葉ですね。知る者は言はずと斯ういふのですが、一藝一能でも長達した人は言はない。言へないといふこともあり、云つて詮無いといふところがあつて、自然に云ふ氣になれない。言ふて言へないことはないけれども言へないところがある。本當に知つたらさう言へるものではない。知るといふのは即ち道のこと、其の口を塞ぎ、其の門を閉ず、心の鋒先を挫くんですね。其の粉を解く、粉といふのは心の亂れ、喜怒哀樂、妄想妄念、佛教でいふ妄念を解きほどこんです。煩惱妄想を逞しくしない。光を和らげる、きら／＼させない。智慧でも徳でも自然光を發するが、其の光が人を射ないやうに和らげる。それで智徳があつても普通の人にはさう見えない。心の中に亂れて居る塵埃の仲間入りをする。俺は違ふと角立たない。其の仲間入をして居る。それを玄同といふ。玄は黒い、奥深い、人と同ず

ると見れども玄同である。

斯様な者は親しまうと思つても、慣れ親しめない。それかといつて疎遠にも出来ない。何か親しい所があるがそれかと云つて慣れることは出来ない。其れに利を興へることも出来ないが害を興へることも出来ない。お上手を云つて向ふがどういふこともない。勿論富貴を興へて私することも出来ん。そんなら害することも出来ず、地位を奪つて見ても彼に於て何ともない。富を奪つて見てもどうもない。手に負へないんです。其れが本當の天下の貴なんです。

實際に就いていふと非常に高い所を云つてある。此の通りといふことはむづかしいが、兎角充分知らんのに言はうとする。感情なり思想なりの雜然と起つてゐるのを益々亂す。又自分だけ際立つて見せるやうにすることがある。そこで老子を知ると其の心得となる。官報に名が出たから貴いと思ふのはよくないことである。それかといつて其れは卑しい事だと云つても世間を輕侮することになる。さういふつもりで見れば我々の心得になるのです。我々に用のない教でもない。老子の趣意も其の時代は文物の盛な時代であつたから、何れ弊害を見て言つたことであらうと思ふです。

以正治國章第五十七

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。吾何以知其然哉。以此。夫天下多忌諱而民彌貧。人多利器國家滋昏。民多技巧奇物滋起。法令滋彰盜賊多有。聖人云我無爲而民自化。我好靜而民自正。我無事而民自富。我無欲而民自樸。

國を治めることは正を以てする。正々堂々と表向きに進んで行く。兵といふものはさうでない。奇を重んずる。天下を取るのには正でも取れず、奇でも取れない。事の無い事といふことで天下を取るのである。又格段のものである。どうして知つたか、無事といふことを知つたからで、眞理は自ら證するものです。さうだからさうなんである。世間では斯うしてはならぬ、あゝしてはならぬといふことが多い。さういふことに束縛されて事が簡單に行かない。民が嫌ふ。これも程度のものであります。老子に云はせると程よくやらねばならぬ。譬へば斯ういふ時には背廣、あゝいふ時にはモーニングといふやうにすると貧しい。支那は禮

儀三百で其れがむづかしいからである。又本膳はどう、其の塗はどうといふやうになると、
 費えが多い。ハンカチを五枚持つて、此れは鼻をかむ時に使ふもの、これは手を拭ふ時、こ
 れは顔をふく時、此れは汗を拭く時といふやうに、さうすると非常に煩はしい。

利器、これは役に立つ人間、才能ある人間、よく切れる人間と、そんな人間が多いから國
 家は愈々昏くなる。といふのはさういふ人間は色々事を拵へる。學校でも事を多く拵へるの
 です。其れは活動の多いやうに見えるが學校の生徒を暗くする。何もせずに居れよといふの
 ではない。才能の無い人間なら何も事を起さんから簡單です。忙はしくしてどれだけ利益が
 あるのか。骨折損の草臥まうけといふところがある。今日の發明發見でもそれによつて便利
 にはなるが其れ丈け事が繁くなる。五年前に買ったラヂオは最う古いからといつて使へなく
 なる。

イギリスのロンドン、ミュージアムの街燈は瓦斯です。夕方になると火を點けて廻る。日
 本にはあんなものは殆んどない。用を其れで済ますのです。新奇に走ら^わない。何時迄も其儘
 放つておくのではないが、あるものは其れで済ますのです。又エジンバラの城の前の番兵の
 服装は何時の時代のものか知らんが非常に美しいものです。時計が動くやうに或る一定の時
 間が經つと此方から彼方に歩いて行つて又戻つて来る。今何も用の無いことです。それでも

普通りにして居る。ロンドン、タワー其處にも矢張元は王様の住居であつたが、何時ぞや獄
 屋になつた。又或る時は裁判の場所になつたが、今は色々ものが陳列してあつて見に行く
 所になつてゐるが、矢張兵士が居つて教練をやつて居ります。さういふやうに次々に用ひて
 行く、さういふものを打ち壊すといふことをしない。よく保存して使つて居ります。オツク
 スフォード大學の建物も五百年位のものがある。建物を昔の通りに保存する。其の修繕とい
 ふ事に費用がある、基本金の餘程の部分をそれに失つてしまふとのことである。それよりも
 新しいのを作つた方が便利ですけれども、金はあるし不便でも本の通りに保存してゐる。古
 へからあるから利用するといふだけでなく教育の意味があるが……。それに對して日本人は新
 奇に走るといふ性質がある。

現代の法律を呪ふ譯ではないですが、法令が一箇條でも多くなればそれだけ罪人が多くな
 る。法は其れを防ぐ爲に作るのだから法を作つたからと云つて罪人が無くなるのではなく多
 く引掛ることになる。頼朝や泰時の時代のやうな簡單な法で今日濟むと思はれないが、其の
 老子の言葉に反省して已むを得ない時の外作らんでも濟むものは作らんやうにせねばならぬ
 然るに法律を兎角形式的なものにしてしまふ。

古への聖人は、我れ爲す無くして民自ら化す。儒教でも「王は正しく南面するのみ」とある

が、人の上たる者はさうだらうと思ふです。地位が高くなる程爲す無く、静を大事にするこ
とは其れが益々必要になる。例へば絶頂です、我なくして凡てを容れる。上の者は餘程考へ
なければならん。上の好むものは是より甚だしきはなし、上の者は何か好めば、下、民は其れ
に合はせようとして色々の事をする。其處をよく考へなければならん。御氣嫌取りをするつ
もりでなくとも、つい御氣嫌を取りに来るやうになる。お師匠さんは鯉が好きだとなると生
きた鯉でも持つて来るやうになる。上に欲することがなければ民は自然に素直である。

(十月六日講)

其政悶々章第五十八

其政悶々^{タルトキハノ}其民醇々^{オリ}其政察々^{タルトキハノ}其民缺々^{タリ}禍兮福所倚^{ヨル}福
兮禍所伏^{セル}孰知^{カシ}其極^ヲ其無正耶^カ正復爲奇^ト善復爲妖^ト民之
迷其日固已久矣^シ是以聖人方而不割^{ケツラ}廉而不劌^{レシテ}直而不
肆^{ノレ}光而不耀^{ニシテ}

悶々といひますのは暗いといふことで、はきはきしないこと、これは眞直である、これは
曲つて居ると曲直正邪をはつきりしない。さういふやうに政治が何か漠然として居ると民は
安んじて居る。おじくして居らん。察々は細かい事まで喧しくいふこと、缺々は何か物足
らないことをいふのですね。いふのは、さう其のこれが正しい、これが邪である、此れは清
此れは濁つて居るとはつきり元來いふべきものではない。凡てのものは流轉して行くところ
で、正も邪となり、邪も正となる。禍には福が倚り掛つて居る。何處に福があるかといふと
禍に倚りかゝつて居る。福は人の欲するものだが、其處に禍が隠れて居る。思はぬ所に禍が
隠れて居る。就職でも善い所に行つたと思ふと其處が却つて思はしくないことになる。これ
は思はしくないと思ふと却つて其處が幸になることもある。世の中の事は凡てさうで、絶對
に善い、絶對に悪いといふことはないのでありまして、長所短所といひますが、長所は短所
となり、短所はまた長所ともなる。

福といふ所に却つて禍がある。例へば位が高いといふ所に禍がある。富んでゐると幸さう
だが其處に禍がある。貧人には無いことが富人に起つて来る。病氣などは人の心を苦しませ
るものですが、又大いに人の精神を練るものですね。全く病氣もせず息災であるといふ事
は必ずしも善いことではないですね。或る田舎の神主で十四回も身體を切解手術したといふ

そんな病氣になつて、十四度の生死の間を往來して、それですつかり神の道を體得し、そこで世の中の人に道を説いて居る。自分も其れで楽しんで居るといふこともある。病氣は病氣で悪いこと計りではない。何事でも絶対に悪いといふことはない。何程か善い所がある。結局禍であらうか福であらうかと分らない。誰が知るか。これが福でこれから先は禍が無いと誰が知るか。悪い事はないとも、禍に極つてゐるとも極つてゐない。

兵法では正兵、奇兵といふが、正兵と奇兵の別があるのではない。正兵が奇兵にもなり、奇兵が正兵にもなる。善であつたものも妖まじはひとなり、妖も亦善となる。さういふ譯であるからこれは正である、これは邪である、これは善である、これは悪であるとして、きはきすべきではない。これが禍だ、これが福だと固執する、其處が迷となる。

そこで老子のいふ聖人は方眞四角であるけれども、削らない。自分の行が眞直でありましても削らない。角があつても破らない。其處に心構への聖人たるところがある。直にして肆おびず、直であるが其れをすつと人に迄推し及ぼして行かない。兎角自分が直であるとさうなり易いが、自分は直であつても人に直でなければならんぞと誇らかに示さない。

光て輝かず。何時でもきら／＼してゐない。事ある時には光らかさうと思はんでも光る時は光る。東郷元帥は大戦以前は舞鶴でじつとしてゐられて光らないが、一朝事があるとロシ

ヤの艦隊を撃滅される。事ある時に出て來るのです。其處がその政まつりごと悶々といふところで、正邪善惡をてきはきしなないと民は安んずる。

治人事天章第五十九

治メ人事タミナ天ニ莫シ如ク嗇ハ夫レ惟ダ嗇ナリ是以テ早ク復ル早ク復ル謂フ之ヲ重ク積ム德ヲ重ク積ム德ヲ則チ無シ不レ克セ無シ不レ克セ則チ莫シ知ル其ノ極ヲ莫シ知ル其ノ極ヲ可以シ有ル國ヲ有ル國ノ母ヲ可以シ長ク久ク是レ謂フ深ク根ヲ固ク帶ヲ長ク生ク久ク視ル之ノ道ヲ

人を治め天に事ふまつるといふのは天を祭るといふこと。儒教では天に事ふるといふことは大事なことですが、茲では天に事ふといふのは手近なことをいふので、これは齋イハヒがよいので、とかく物惜しみするのがよい。人を治めるのもさうである。天に事ふる儀禮でも物を控へ目にするのがよい。復へるとは行き過ぎない、直に後戻りする。其の早く復へる所が齋なんです。唯金銀財寶ばかりのことではない。見るのでも目を大事にする、聞くもの聞く力を保たうとする。耳も目も何れ限りあるものですから、精神の力も身體の力も使へば其れ丈

け疲れるものですから大事にする。心を用ふることを惜しむ、ものを言ふのを惜しむ。時にはぼかんとして居るのがよい。何も考へないのが善い。水火に至る迄惜しむ。前に御馳走が並べてあつても、程よく食べた惜しむ。腹の消化力を惜しむ。餘分なものを腹に入れて腹に厄介をかけると其の時はどうもなくても積り積つて胃腸を害する。世の中で食分といふことがある。また福分といふが、其處で分を過すと食べられなくなる。着すぎると着れなくなる。凡そ人は生れ乍らに夫々分を持つてゐる。妄りに食ひ妄りに着ると分が濟んでしまつて飢渴に迫り寒さに凍えるやうになる。其の分はあつても分らない。此の分を知らないから兎角惜しんでおけばよい。さうすれば何時も餘がある。これは善い教ですね。物質に束縛されるといふことは善い事ではないが、精神力を惜んで控へ目にすることは善い。

其の用ふる所の本に戻る、早く本に戻る。身體の力を養ふのも徳を積む事になる。さういふ風に徳を段々重く厚く積むと善い。克くせずといふことはない。すると此處迄しか出来ないと見限りを附ける事が出来ない。最うあの人はあれが行詰りだといふことがない。それで國を保つことが出来る。國を有つての母といふのは其の膏なんです。老子は何でも根本を母といふ。これは老子流です。膏、をしむといふことは長久の母である。早く復るといふことが根を固くし、根を深くすることになる。

じつと長く見てゐる、瞬きをしない、それが長生で、精神力の力を蓄へて居れば眼力が強い。長く見詰て居つて瞬きをせない。老子の道は養生といふことによく用ひられる。國を治める道にも用ひられるが、成る可くものを言はぬやうにする。成る可く用の無い時はぼかんとして精神力を妄りに費すことをしない。これが養生の道である。

治大國章第六十

治大國。若烹小鮮。以道蒞天下。其鬼不神。非其鬼不神。其神不傷人。非其神不傷人。聖人亦不傷。夫兩不相傷。故德交歸焉。

大國を治むるは小鮮を煮るが如し、これは有名な言葉ですね。小鮮は最う煮えたかと思つて箸でつくと碎けてしまふ。大國を治めるのも、さうつゝき廻してもいかない。世間のいふ無爲無能ではない、高い見識がなければならんです。道を以て天下に望む、どう望むのであるかといふと、鬼は鬼、神は神の徳、鬼は陰、神は陽、鬼神即ち陰陽で、陰は陰、陽は

陽として其の儘働かしめる、いろはない。其の鬼神のみならず、神には神の行き方、人には人の行き方がある。聖人には聖人の道がある。聖人も亦之を傷らず、それ二つ乍ら傷らず、神が鬼を傷るとか神が人を傷る事も、人が神を傷ることもない。凡て何事も善あれば悪あり、悪あれば善あり、男あれば女あり、賢もあれば愚もある。愚が悪いといつて賢が善いとすれば二つながら傷る。それで皆歸すべき所に歸する。此れが小鮮に手を出さずして其の儘に烹るといふことである。

斯ういふことは實際は我々の修養に依るのです。中々一寸した事にもうまく行かない。何故かといふと、先づ感情が動亂する、次に智慧才覚を用ひる、其處からうまく行かないのです。老子の言つた所を當嵌めようとすればする程分らなくなるといふ様子がある。

大國者下流章第六十一

大國者下流。天下之交。天下之牝。牝常以靜勝牡。以靜爲下。故大國以下小國。則取小國。小國以下大國。則取大國。

故或下以取。或下以取。大國不過欲兼畜人。小國不過欲入事人。夫兩者各得其所。故大者宜爲下。

大國は下流す、これが老子流で、上に行かねばならぬと思つた大國が却つて下流する。天下の者が交るのは、牝といふことがあるから天下の交りがある。牝は静かなもの謙つたものである。さうでないとな下の生存競争になる。元來西洋は支那の陰陽でいふと陽性なんです。そこで人間の歴史を闘争と見る。さういふ歴史觀に達する。そして現在さういふ態度を取つて飽く迄戦ふといふことになる。實際をいへばさう喧嘩ばかりしてゐる譯ではない。牝といふことがあるから斯ういふことがない。牝は自分の方が先づ下つて行くので、さうでなく向ふの方から下るのを待つてゐると何時迄たつても下つて來ない。一所に下る事もない。靜を以て牡に勝つ、この勝つといつても戦に勝つことではない。事を全うすることである。最後の勝利といふが、勝利を忘れなければ老子の意に合はない。そこで先づ大國の方から下らなければならぬ。すると則ち小國を取る。取ると云つても大國は人を兼ね蓄ふに過ぎず、下るといふと小國が自然に歸服して來る。力を以て掠奪せんとすると却つて叛く、靡いて來

ない。終に生存競争となる。小國は行つて人に事へんとするに過ぎず、大國の御氣嫌を取つたといふ様子がある。大國の方は殊更に謙る、先づ有意的にする。殊更するところがある。だから以て取るといふ。小國の下るといふは自然の方で、餘程自然な所がある。取るとあるから尙説明して、大國は人を兼ね畜はんとするに過ぎない、小國は行つて大國に事へんとする、一つは馴づけんと思ひ、一つは倚り附かうとする。そして各々其の目的を達する。下るのはお互に下るのですが、普通上の者が謙らなければならん。

ウイリアムスといふ人の支那文化に就いて書いた本がある。其れに支那人が今日の文明國で一番古く生存してゐる。古いといへばエジプト、アッシリヤも古いが、一時は盛であつたが亡びてゐる。支那は四千年も續いてゐる。弱いやうでも國は亡びて居らん。野蠻國ではない。獨立國として永存してゐる。其の譯がなければならんといふので研究したものであつてそれによると支那の根本は道德である(道德によつて國を治める)と云つてゐる。

西洋の生存競争を緩和したのはキリスト教です。西洋の民族性は何處迄も積極的に行かうとするものです。けれども支那では生存競争といふやうなことはない。生存競争といふやうな斯ういふ人生觀を持つ民族は長持しなすね。支那は老子流です。老子は支那民族の性情をよく表はしてゐる。支那でも儒教は陽、老子は陰といひますが、之を合せて西洋に較べ

ますと陰の方です。謙も讓もおだやかといふことです。讓るといふことです。

日本に鬪戰經といふのがある、大江匡房の書いたものだといはれてゐる。孫子を批評して「孫子十三篇、懼の字を免る能はず」と云つてある。此れは日本流の兵法からいへば孫子の行き方は懼るゝといふ行き方であると云つて居る。そこがやはり老子流です。支那は負けて勝つといふ行き方である。「柔よく剛を制す」で、進んで勝つといふよりも退いて亡びないといふことを尙ぶ。孫子の所謂不敗の地位は日本でいふと懼るゝといふことになる。如何にも支那流を表はして居る。勝つ事を求めず破れざることを眼目とする。そこで支那の將來はどうか知らんが、現在の所では支那が一番古い。印度は古いが獨立國とはいへない。支那は弱いやうでも繁昌してゐる。獨特の文化を失はない。老子は支那の民族性を表はしてゐるといふことが出来ると思ふです。日本人は日本人の性情によつて行かねばならん。軍人に云はせると、日本の國防は負けんといふことではいかん、勝つのが防ぐことで、防ぐ事になると負けてしまふと云つてゐるが、一般にさういふ所がある。勝つやうにするのが國防だといふことにならざる様子がある。これは民族の氣質性情が異なるからである。

經濟でも支那人の方が上手である。滿洲事變の起る前には支那に於て日本人は經濟的に壓迫されて困つてゐた。それは支那人と經濟戦に負けたので、支那人の方が上手である。支那

人から買ふ方が氣持がよい、支那人の店へ一度買ひに行くと、次に行けばお金は後でよろしいといふ。お客の後から附けて行つて、あれは誰々だと知ると、確かだと思へば最う喧しく云はない、商賣上手である。支那人は侮られない。如何にも支那人は長生久視といふところがある。老子の教の方が儒教よりも支那の帝王が實行した所である。これを悪く取るといけないが、支那人にはよく合つてゐる。「負けて勝つ」とは日本人は云はぬことはないが、日本人はさういふ氣性ではないのです。

道者萬物之奧章第六十二

道者萬物之奧。善人之寶。不善人之所保。美言可以市。尊
行可以加。人之不善。何棄之有。故立天子。置三公。雖有
拱壁以先。駟馬不如坐進。此道古之所以貴。此道者何也。
不曰求以得有罪。以免邪。故爲天下貴。

これもよく老子を表はしてゐる。道は奥で隠れてゐる。隠してゐる譯ではない、虚無です。これは善人の寶、善人は此の道を寶にして居る。此の道あるによつて不善人を保んじて居る。道がなければ、善人は世の中の仲間入りが出来ることが、不善人は追ひ出される外はないが、道があるから善人なら生かして置くが不善人は追出してしまふぞといふことはない。捨てる神あれば拾ふ神がある。悪い者を國の法で罰する、併し人が捨てても、其れを拾つて行くものがなければならぬ。善人が兎も角も斯うして居ることが出来るのは道があるからである。

美しい言葉で商をする、此れは拾圓もするのだが一圓で賣つておきますとか、中には損をしますけれども皆様のお爲になりますからといふと、中にはまあ買つておかうといふことになる。利言は信するものではないが、利言はさう嫌なものではない。尊行以て人に加ふとは例へば村なら村ですね、多少人と違つて様子が善い、優しい人であるといふことになる、其れ丈でも人が尊敬する。仲間の中でも大人らしい所があるとか、善い所があると人が立てて行く。言葉でも腹でも眞から尊い人でないかも知れないが、言葉でも態度でも善い所があると、世の中の人其れを立てる。さうすると不善だからと云つて見棄てたものではない。口先を上手にしても其れ丈け賣れるではないか、お上手をしても人が立てるではないか、そこで不善人でも捨つべきではない。

勝れた者を天子に立てる。三公も徳の勝れた者を立てる。それで天下の上に立つて治めて行く。支那では賢者を招くに玉をもつてお迎へした。その進物に玉を持つて四頭だての馬車をもつて迎へに行く、さういう賢者であり、天子たるべきものであつても、不善を保つて捨てぬといふ道を進めて行く方がよろしい。善い人間は使ふ、悪い人間は棄ててしまふといふのでは世の中は立ち行くものではない。世の中は何で立つて行くか。道は萬人に具はつてゐるもので、求めさへすれば得られる。天下を治める才能は凡人の得られるものではない。罪があつても道といふものによつて免がれる。一念善心があれば罪があつても免がれる。比處が道の貴いところで、これが本當の貴である。天子三公の貴は比較的の話です。

此處等も徳のある者、才能のある者、其れ相應の地位に上つてやらねばならぬ。併し餘り其れに拘泥するといかない。二宮尊徳は「忠勤を盡して其の弊を知らずんば忠信に至らず」と云つて居られる。善い事は善いとしなければならぬが、又老子の言葉も捨てゝはならない。然し其れを淺薄に考へてはいけない。實際世の中を見てもさうで、善人と悪人と何方が多いかといへば、善人が多いともいへない。不善人が世の中に居らんとすると、何處か缺々する。不善人が居る方が善いといふのではないが、道はどこか廣いところがある。

爲無爲章第六十三

爲_ニ無_レ爲_〇事_ニ無_レ事_〇味_ニ無_レ味_〇大_ナ小_ケ多_シ少_シ報_ル怨_ニ以_テ德_〇圖_レ難_ク於_ニ其_ノ易_〇
爲_レ大_ナ於_ニ其_ノ細_ニ天下難事必作於易天下大事必作於細是
以_テ聖人終不爲_レ大_〇故能成_ニ其_ノ大_〇夫輕諾必寡_レ信_〇多_シ易_ニ必多_シ
難_〇是以_テ聖人猶難_レ之_〇故終無_レ難_〇

無爲を爲す。事々しく爲ない。事あつても事なきが如し、目立たぬ事をやつてゐる。此れは旨かつたといふのではない。麥飯、大根を食つて居れば、さう旨いといふのではない。然るに何處何處で食用蛙を食つたといふのは其れは特別な味ですね。手近に淡泊なものを食つてゐる、そして忙はしくしないのが養生の道だといふが、茲ではもつと廣い意味に取る。大いなる富、高い位でも低いやうにして居る。多くの富でも富がないやうな心持で居る。其れを見せびらかすといふこともない。其れのみならず學問道徳でもさうで、成べく學問が見えないやうにして居る。英、獨、佛は皆んな話せても一向知らんといふ様子がある。

報_レ怨_レ以_レ德、老子は「怨に報ゆるに徳を以てす」と云つて居る。孔子は「怨に報ゆるに直を以てす」と云つてあるが趣意が違つてゐるとはいへない。孔子は眞直に云はれる。老子は其の曲れるを見て一方の方をいふ。何でも斯くするのがよいといへば老子の趣意に反する。世間では何でも自分の善を見せ掛けるし、怨に報ゆるに怨をもつてするから、其の反對に徳を以てするといふことにしてある。

圖_レ難_レ於_レ其_レ易とは、難問題を處するには難問題になつてからでは天下の知識を集めても解決がむづかしい。それで其のた易い内に處置するので、此の事は一身一家の事でも大いにさうと思ふですね。平生よく氣を附けて少しの事でも改めるやうにせねばならん。其れを放つて置くと大きな破綻となる。本當の知者は其處に至らん前に處置する。足を挫いても其の時に直ぐ手當をするとよくなるが、何でもないと思つて放つて置くと化膿などして、天下の名醫と雖もむづかしいといふことになる。

天下の大事は必ず其の細なるに作る。……天下の事は何でもた易い所から起るものだ。其處を知らんからむづかしいと思ふのである。天下の大事は何でも細事から起る。日常反省せねばならんと思ふです。我々の思想上の事でもさうだと思ふです。心の内の事、心の外の事、人に對する事、何でも小事に起り知らん間に大きくなつてゐる。大事業をしたといへば誇らし

いやうであるが、そんな事に氣が附かんでも、小なるものに氣が附けばよい。大事業をしたといふ如きは機を見るのが遅れてゐる、大事業をしたといふのは手後れである。無爲を爲すのは始終大事をして居ることである。

平生に於いて輕請合をする人は信の尠い人である。出來るといふ事が極まらないと請合はない人は信賴される。何でもた易く考へる人は必ず難問題にぶつかるといふ事がある。そこで聖人は何でもた易くは思はない、大事を取つてむづかしく考へる。さうすれば難問題に出遇はない。

其安易持章第六十四

其_レ安_レ易_レ持_レ其_レ未_レ兆_レ易_レ謀_レ其_レ脆_レ易_レ破_レ其_レ微_レ易_レ散_レ爲_レ之_レ於_レ未_レ有_レ治_レ之_レ於_レ未_レ亂_レ合_レ抱_レ之_レ木_レ生_レ於_レ毫_レ末_レ九_レ層_レ之_レ臺_レ起_レ於_レ累_レ土_レ千_レ里_レ之_レ行_レ始_レ於_レ足_レ下_レ爲_レ者_レ敗_レ之_レ執_レ者_レ失_レ之_レ聖_レ人_レ無_レ爲_レ故_レ無_レ敗_レ無_レ執_レ故_レ無_レ失_レ民_レ之_レ從_レ事_レ常_レ於_レ幾_レ成_レ而_レ敗_レ之_レ慎_レ終_レ如_レ始_レ則_レ無_レ

敗事。是以聖人欲不_レ欲。不_レ貴。難_レ得_レ之_レ貨。學_レ不_レ學。復_レ衆人之
所_レ過。以_レ輔_レ萬物之自然。而不_レ敢_レ爲_レ。

安き時は持ち易し。危いものはなか／＼持ちにくい。そこで危くならん前に、安き時によく持ち抱へるやうにする。元來ものはあぶないものではない。其の通りに置けばよい。其の兆さぬ時によく謀り相談する。兆してしまへばどんなに賢者を集めて相談しても及ばない。脆き時は破れ易い。櫛木といふ木がある、芽の出る時は柔かい、嫩芽の内に摘んで食用とするが放つておけばとても折れぬやうな木になる。

ジェームスの云つてゐる「優勝劣敗とか適者生存といふやうな事をいふが、然し彼の相手はなか／＼偉者であるといふやうにさう偉くなつてしまへぬ内に切つてしまへば自分の思ひが達したといふことになる。それで優勝劣敗は自然の法則であるにしても、人は其の法則に支配されるものではない。それを用ひて行くものである。」と云つてゐる。人は適者生存の法則に支配されるものではないといふ事を云つたものですが、これは何でもないので「脆き時は破り易し」といふことに外ならぬ。ジェームスも言つたが既に老子も言つてゐる。

其の微なる時は散じ易い。腫物でも一寸と熱のある時に氷で冷しておけば散じ易い。天下でも未だ亂れざる前に治める。治に居て亂を忘れずといふことがある。合抱の木、幾抱へもある木も毫毛より生ず、九層の臺も累土より起る。千里の行も足下に始る。有名な言葉です。色々巧らんでする者は事を敗る。自分の腕前を見せようとするときよく事を敗る。今度校長になつたから一つ新しい事をやつてやらうとすると失敗する。全うすることが出来ぬ。凡てものは全うせねばならん。然し爲す者は失ひ、固く執る者は失ふ。實際さうですね。軽く握つてゐる方が疲れませんし、動揺しても振り離されない。聖人の如きは細工をしない、爲す事をしない、だから失敗がない。殊更に手柄を見せようといふことがない。才智のある者は細工をするから敗れる。勿論才智の無い者でも無い智慧を絞つて何か爲ようとする。それで敗れる。取りさへせねば失ふこともない。

世間の普通の人が事を爲すのを見てゐると、出来かけた所で敗れる。世に處する道としても考へねばならんところです。成らんとする所で敗れる。よし事が成つたとしても後から敗れる。尻が剝ぐれる。意識的に勝手な事をせんでも何時とはなしにさうなつて来るから終を全うすることが出来ん。終を全うする、これが一大事ですね。凡て終りを全うすることが大事で、盛んにやつてゐる時でもいかず、一つの事を能く成したからと云つてもいかん。お仕

舞へが悪かつたら善いとはいへない。其の人の一生として假令一時は善かつても失敗といふこともある。天龍寺の峩山和尚が「大臣も大將も皆失敗だ」と云つたといふことであるが、意味のあることであつて、終を慎む事始めの如くば則ち敗るゝ事なし、茲に眞の値打がある。是を以て聖人は欲しないやうに欲しないやうにとする。話でも何か云はねばならんやうな氣がするものです。

得難きものを貴ばず、學は不學をなす。衆人の過す所に復へる。氣が附かずに見逃してゐる所に復へる。心を留めおく、以て萬物の自然を輔けてやる。大いに爲してやるのではない一寸と手傳をする。人の仕事でもさうですね。切匙（カギ）をして餘計な世話をやくのではない。手傳つてよい所は手傳ふのです。

（十月十三日講）

古之善爲道章第六十五

古之善爲道者。非以明民。將以愚之。民之難治。以其智多。以智治國。國賊。不以智治國。國之福。知此兩者。亦楷式能。

知楷式是謂玄德。玄德深矣。遠矣。與物反矣。乃至於大順。

老子の文章思想は大抵同じ口調で、同じ思想を繰返して居りますから最う諸君も分つてゐると思ひますが、古へといふものは今のものに出ないところ、今の者の手本になるから古へといふ。又老子からいへば現代はいけないといふ考へから古へといふのです。道、これは老子の道で實は其の道といふものを手に入れる、豁然として貫通する所でせうが、老子はそれを色々形容し、家を治め國を治めるところを書いてゐる。善く道を爲すとは道を體得して道と一致して行くことである。さてさういふものは民を明らかにして國家を経綸することをしない。民を明らかにするとは、老子は仁義すら大事なものではないとする。禮儀三百威儀三千で、禮とか法とかで組織する。それで國を治めるといふ事になるのですが、それがいけないといふ。今日では六法全書といふものがある、民法、刑法、憲法、とかいふやうに分れてゐる。其れを細かに分けると何千何百どころでない。あの道この道と筋道を立てる。そして天下の法令で事を極める。それを明にすといふ。さうすると却つて明らかでないやうになる。却つて愚にする、人を愚にする、そんな事ではない。さういふ面倒なことをしない。民を養ふ親切から來てゐるのである。「知らしむべからず、由らしむべし」。これは支那の專制政治だ

といふが決してさうではない。兎角色々の事を知らさない方が善いのであつて、色々の事を知つてゐるから治め難い、法律でも善く知つてゐる様な場合は善くない。それを利用する場合は多く悪い場合で、眞直にやつて居れば法律など知らなくても済むのです。悪い事をして法を利用するやうに爲しようとすると、辯護士を頼まなければならなくなる。世界の今日でも日本の今日でも中々むづかしいところがある。其れは皆智多きを以てなんです。

智を以て國を治む、智慧で治めて行く、ここは斯ういふ法令を以て抑へてやらうと智慧才覺をもつてやると國を禍ひする。目に見えんやうでも結局國を賊ふことになる。智者は兎角じつとして居らん、何か事を始めようとする。金でも持つてゐると使はずに居るのがむづかしい。さうすると其れだけ煩はしくなり、差支へが起る。智慧才覺を以てしないのが國の福で、兎角餘計な事をしない、それが善い。此の事をよく知つてゐる者も亦楷式のりである。智で治めるのは賊、智を以て國を治めないのが福、といふのも一段上の法則である。よく此の楷式を知るのは智慧を持つてゐるのではなく、見た所さ程の徳がありさうにも智慧がありさうにもないが深い、結局國を全うする。人生を全うするので深く遠し。

世間では法則を設けて段々分れて行く、老子は本へ歸る、世間の者と行き方が逆様であつて、根本に根據を置きさへすれば、どんなに分れてゐてもよいのです。本は唯一つのものな

んです。其處を知れば分れてゐてもいさかい(争ひ)がない。「大順の俗」其の根本に歸る。國といふもの君主といふものに歸る。天皇の政治は祖宗の御精神に歸られる。國民は君に順ふ日本人は素直な民族なんです。日本などは實際「大順の俗」なんです。無理のない所といふことで拵へごとがない。

江海爲百谷王章第六十六

江海所以能爲百谷王者。以善下之故能爲百谷王。是以聖人欲上民。必以言下之。欲先民。必以身後之。是以聖人處上而民不重。處前而民不害。是以天下樂推而不厭。以其不爭。故天下莫能與之爭。

江海……、江といふのは陽子江のことです。此處が一番低い、何でも能く之に下る。そこで百谷の王となる。これは譬です。だから聖人は民の上たらんと欲して言行、先づ言葉から之に下る。下から出る。これは殊更に下から出ることではない。これをよく悪く取る。奸雄は

よくこれをやる。老子のはさうではない。民に先立たうとすると先づ身を以て後れる。民のことは先にして我が身のことは後れるのです。さうすると民が之を先に立てるので。言を以て之に下るといふのは、凡てものを言ふにしても行ふにしても自分の方は後にする。國家人民のことは先にして我が身のことは後にする。さうすると人が今度は崇めるやうになる。さういふことを始から考へてやるのではない、自然とさうなるのです。

人の上に坐る、さうすると重しとなす。然し聖人は人の上に坐つてゐても重いとはいはない。烟たがらないのです。又大將が出掛けたと烟たがらない。前に居ても邪魔にしない。帽子を被つて相撲を見てゐると後の人はあれが取ればよいと思ひ、居なければよいと思ふ。邪魔者扱ひにするが、聖人の方は之を害とせず、さうでないから邪魔者とせない。兎角人の上に坐ると人が烟たがるです。人を尻にして敷かれた者は重いです。こゝで天下推し立てる事を樂しむ。自然にさういふ氣になる。そこで詰り上に出ようとして却つて叩き落される。そこで競争になる。生存競争になる。老子はそんな生存競争といふやうな厭な所を見て來たから、文化とか進歩とかが厭になつたところから老子の無爲が出て來るのです。

天下皆謂章第六十七

天下皆謂我大似不肖。夫惟大故似不肖。若肖久矣其細。我有三寶。寶而持之。一曰慈。二曰儉。三曰不敢。爲天下先。慈故能勇。儉故能廣。不敢爲天下之先。故能成器長。今捨慈且勇。捨儉且廣。捨後且先。死矣夫。慈以戰則勝。以守則固。天將救之。以慈衛之。

我大にして不肖に似たり。……餘り大であるから不肖、知徳も何も無い者に似てゐる。いゝ加減に大であると分るですが、非常に大であると分らない。兎角小慧しい者は大勢に目立つものですが、ずつと勝れてゐると隠れてしまふ。目立たない。天下の者は皆大といふべきだが却つて天下の人は小なる者を褒めてゐる。大なる故不肖に似てゐる。大人物は歴史的に後から西郷は偉かつたといふやうに評判するのですが、其の當時出會つて見たら何處が偉いのか分らない。西郷、東郷は晝行燈である。不肖ならば久し。大にして不肖に似たる所は寶と

して之を持つ、我に三寶あり一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢て天下の先とならずと、慈といひ儉といひ、三には讓といはずに敢て天下の先とならずと云つてゐる。文章に面白い所があると思ふです。慈悲と儉約と謙讓です。これが老子の三寶です。慈はあはれみ深い、兎角なよくした方で、勇とは反対のやうに見えるが、慈なるが故に能く勇である。「仁者は勇なり」といふ孔子の言にも當嵌る。此處は併し「儉なるが故に廣し」と合せて見ると慈愛である。個人的なものでない。大勢の人が盛り立てるから勇です。これに敵する者がありません。勇者です。儉なるが故に廣く、我が身の爲に金を費す者は人に施すことが出来ない。衣食住を始め何でも始終我が一身に施す者は人に施す餘裕はあるものではないのです。よく儉やかにするから人に施すことが出来るのです。

敢て天下の先とならず。先とならず自分は後になる。それで能く人物を成しあげる。人を先に立てるやうにしたら却つて多勢の人を仕上げる。養成するのであります。自分が先となるものは敢て天下の先とならず。今慈を捨て、且つ勇、頻りに自分の勇を振廻す。又儉約を捨て、廣く物を施さんとする。よく物を費す。又後るゝ事を捨て、人に先に立つて行く、さういふ者は死あるのみだ。きつい言葉ですね。

慈で戦へば勝つ、たとへ何十貫の鐵棒を振り廻しても匹夫の勇です。慈で守れば民の心を
得て居るから守りが固い。此處は慈だけ擧げてある。慈といふことが主となつてゐる。天は之を救ふ、慈の人を救ふ。天の道に叶つてゐるから天が慈をもつて慈の人を衛る。元來天は慈悲なものです。萬物を生育するものですから、そこで慈を以て衛るのです。老子の儉、前に嵩といふことがありました、物惜しみといふと悪いですが、餘計なことをしない。もの、を言ふのでも餘計な切匙を費さない。又餘分に物を食べない。餘分に食べると胃を疲らせ、命を縮めることになる。儉約といふことは儒教でも説く、嵩といふと普通悪い事とされてゐるが、惜しむ所が大事だといふ所に老子の特色がある。三つのものは通ずるものがあるが殊に慈は大事なものです。

善爲士者章第六十八

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝者不與。善用人者爲之
下。是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天古之極。

士と云ひますのは即ち士師といふ官の名で司法官のことです。悪い事をした者を引縛つて行く嚴めしいものです。けれども本當の士たる者は猛々しうない。實際に於て司法警察官が

猛々しい事が却つて罪人を刺戟することがあるのですね。人を見れば泥坊と思ふといふやうな眼で人を見てゐる。さういふことであると矢張却つて罪を多くするといふ風なことになるのですね。白状すべきものが却つて白状しないといふ様なことになる。無理なことをして心にも無いことを白状したといふやうなことにもなる。

老子の無爲は滞らないことです。何々氣質かたきのないことです。商人氣質とか教育者氣質とかいふ事がないことです。教師なら教師の職業はしてゐるけれど其處に捉はれない。收税人は隠しては居ないか隠しては居いかといふ心持になつて、少しでも多く税金を取るやうにと傾く。見附ければ何か自分の手柄のやうに思ふ。さうせなば素直に言ふ所を餘りほじくると却つて隠すやうになる。何々氣質にならない。其處をよく超越してゐる所がなければならぬ。士たる者は武士氣質が出来る。よく戦ふといふと怒る、けれども怒るといふと負ける。怒つた兵は敗れる。怒ると向ふに乗ぜられます。戦つて戦はずといふところが老子の無爲で、相手にしない。相手にするのは附いて廻ることです。向ふが一言いへば此方も一言いふのは引摺り廻はされてゐるのです。これは負けです。能く勝つ者は相手にしない。賣言葉に買言葉といふが畢竟弱いのですね。

「隨處爲主。立所皆眞。」といふことがある。自ら主となるはむづかしい。與にせずとは向

ふは向ふ、此方は此方なんです。よく下る者は、さういふ者は能く人を用ふるのです。

これは個人の話ですが、新居濱の住友では人を用ふることがよく行はれてゐるといふ事です、次の話は傳へ聞きであるからどうか知らぬが、鷺尾といふ法學士で學校を出ると間もなく住友に使はれた。其の人が行く前に工夫のストライキがあつた。行つて見ると工夫の待遇は悪くない、それで其の原因が外になければならぬといふので工夫の氣持を調べた。それには自分が工夫になるのが一番よいといふので自分が使はれて見た譯です。そこで工夫の氣持を知つたといふのです。使ひ様が悪いといふのは使用する人の心持が善くない。人を使つてゐるのだといふ考へで工夫を當り前の人間と思はないといふことがある。其處がいけないので、使ふ者を教育せねばいけません。斯ういふので坑の入口の集會所を借りて其處に自分が寄宿して工夫を使用する若い連仲を集めて自分も其の人達と起臥を共にして、人を使ふ事を實際に導いて行つたといふことです。それを數年やつた。そして其れには自分の月給は皆出してしまつた。其後一時病氣で止めたこともありますが、遂に其の効果が現はれるやうになつた。其處で住友の會社が認めて、自彊舎とか云つて寄宿舎が出来て居る。工夫を使ふようになる若い者を養成する所です。(鷺尾といふ人は禪から修養した人ですね)今ではそれが大事なものになつてゐる。又住友では大きな風呂場が出来てゐるのです、それから工夫の宅は非常に

綺麗になつてゐます。

人に使はれるといふ事、其處で始めて人を使ふことになる。荒つばい仕事をする職工を扱ふのに、大體職工といふものは人間扱にすると間違つてゐる、人情を交へてはならぬといふ。職工は喧しく云つても聞かぬ、目を光らせてすら抜けようとするから人間扱に出来ないといふ。ふやうになつて居ると然うなる。さうすると上の者に責任がある。(職工が悪いのは上の者の取扱がよくないからである)上の者は事が分つてゐるのですから、上の者から改めねばならぬ。精神上の融和といふことがなければならぬ。何方にも罪があつても上の者の方が考へるのが正當なんです。

謙るといふ事を具體的に云へば「下となる」といふのとは一なんです。先にせずとは即ち争はず、争ふから使へない、十の力を持つてゐても精一杯しない。悦んでさせるやうにする、それが即ち天の道で、天地間のもは萬物皆精一杯やつてゐるのです。桃の花、梅の花が咲くのも精一杯咲くのです。是れ位にして措かうといふことはない。極所は極所ですね。さういふ譯ですから老子の道を實行することは、手を下す所は知つてゐてもむづかしいやうであります。

用兵有言章第六十九

用^ル兵^ヲ有^リ言^ハ吾^レ不^レ敢^テ爲^ス主^ト而^シ爲^ス客^ト不^レ敢^テ進^ム寸^ヲ而^シ退^ク尺^ヲ是^レ謂^フ行^ハ無^ク行^ハ攘^ム無^ク臂^ヲ仍^シ無^ク敵^ヲ執^ス無^ク兵^ヲ禍^ハ莫^ク大^ニ於^テ輕^ク敵^ヲ輕^ク敵^ヲ幾^ク喪^フ吾^レ寶^ヲ故^ニ抗^ス兵^ヲ相^シ加^フ哀^ム者^ハ勝^ツ矣[。]

老子は兵といふことをよく云ふ、詰り老子は負けて勝つと云ふ。負けるは結局勝で、老子は勝つといふことをよく云ふです。兵を用ふるにはかういふ言ひ傳へがある。此方が主となつて向ふに喉^せかけて行かず、我が受身である。主といふ方が受身で此方が押し寄せて行かない。さういふ意味につかつてある。敢て寸を進まず退く方は一尺退く。一寸進んで一尺退くといふことではない。進まずして退く方を大事にする。腕捲りをしても臂がない。刃物^{きれ}を持つても刃物がない。敵をとつても敵がない。凡て無理の無いことをすれば目立ぬです。強ひてやれば敵を引いたとか刀を引き抜いたとかいふことになる。自然に出た事は目立たない。已むを得ぬ時は臂捲りをしても臂捲りをした様子が無い。無理のない所を行けばさうなる。已むを得ずして言ふのです、さうすると幾ら言つてもお喋りといはれない。何も言はなかつ

たといふ様子がある。

禍は敵を輕んずるより大なるは莫し……、臂捲りをするとか刀の柄に手を掛ける事は相手を輕んずる所から出て來る。無爲といふ寶を失ふことになる。故に兵を擧げて接戦をする其の時は戦をすることを悲しむ。互に相討つ事は好ましくない事であると、互に對陣はするけれども悲しむといふ精神を持つてゐる方が勝つ。やることはやらねばならぬが人の命を取ることを哀むといふ心のある者は勝つ。

吾言甚易知章第七十

吾言甚易知甚易行。天下莫能知。莫能行。言有宗。事有君。夫惟無知。是以不知我者。希則我貴矣。是以聖人被褐懷玉。

吾が言甚だ知り易し、……吾が言は當り前のことを云つて知り易い。言ふと、言つて濟してしまふ。誰でも實行することは却つて實行しない。親の言はれる事を其の通りにする事はや

り易いけれども却つて其れをせぬ。凡て當り前の事は分らんですね。物を言ふといふこと其れが即ち行です。「始に言葉あり」と聖書に云つてある。それを直して「始に行あり」と云つたといふが、我が國では行と言葉は同じい、其處が日本人の深い所なんでせうかね。

言(Wort) = 事(Tat)

我々が言ふことも行ふことも必ず大道を外れては居らん。大道は甚だ知り易く行ひ易いから却つて知り難く行ひ難い。日光の如き、空氣の如き、又白晝に仕事をしてゐて、白晝である事を知らない。「あれは」と人が目を付けてくれるなれば自分は賤しいので、誰も知らないから尊い。褐で織つた賤しい着物を着て玉の尊いものを懷に入れて居る。表面は賤しいが中味は上等である。「知り易く行ひ易し」如何にもさうですが、他の意味から云へば「知り難く行ひ難し」です。譬へば富士の頂上は汽車に乗つてゐても見える。じき行けさうです。知り易く行ひ易し、全貌を露出してゐるんです。然し實際踏んで見ると、行けども行けども段々高くなつて來るやうに思はれる。實行に着手して見ると知り難く行ひ難いと思はれる。本來から云へば知り易く行ひ易い。人情から云へば知り難く行ひ難いのです。繪でも非常に善い繪である素人でも分るです。誰が見ても善いと分るが、中間になると此處がよいと分らない。玄人が見れば此處に苦心してある、此處が善いと分るのです。さて其の繪を畫くとなると、

中々描けないものです。一番善いものは富士の頂でも、美術品でも、善いと分るですね。中間になると此處に苦勞してゐると普通の者には分らん。シエクスピアを読んで見ても矢張コンモンセンスで奥深い所はないが何處となく氣持がよい。ゲーテ、シラーになると一寸とむづかしくなるですね。然しシエクスピア、ゲーテに並ぶ人は無いです。何々の大家といふ人の繪は我々がよく知る、けれどもさういふ所は唯何となく思ふので其處に至るのは非常にむづかしいものであるとは知らない。

知不知章第七十一

知^{ツテ}不^ル知^ハ上^{ナリ}不^{シテ}知^ラ知^レ病^ヲ夫^ハ惟^ニ病^ヲ是^レ以^テ不^レ病^ヤ聖^ハ人^ハ不^レ病^{マシカラ}以^テ其^ノ病^ヲ病^ス是^レ以^テ不^レ病^ス

知つて知らず。……知つて自分が知つたと斯う思はない。眞に知つて居れば別に何處を知つたといふことがない。自分が知つたと思はない、當り前の事であるから。本當に知らない。謙つて居るといふ意味ではない。知らないのに知つたと思ふのが病で危い。知らずして知つたと思ふ。其の病を病む。さうすると其れを去るやうにする。此處が病氣だと思へば要心す

る。身體の病氣でもさうです。實際病氣があるのを知らずに居ると危い。聖人は病を病とするからそこで病まないのです。
(十月二十日講)

民不畏威章第七十二

民^ハ不^レ畏^レ威^ヲ大^ニ威^ヲ至^ル矣[○]無^シ狹^ク其^ノ所^ニ居^ル無^シ厭^ム其^ノ所^ニ生^{ズル}夫^ハ惟^ニ不^レ厭^ム是^レ以^テ聖^ハ人^ハ自^ラ知^テ不^レ自^ラ見^ル自^ラ愛^シ不^レ自^ラ貴^シ故^ニ去^ル彼^ヲ取^ル此^ヲ

人民が上の法を畏れない、徒に賢だてをして法網を潜るやうにする。小賢しい者は法律が何だと云つて恐れずそしてひどい目に逢ふ。法はかうも抜けられる、あゝも抜けられると收賄などやる、すると大威に至る。五年十年の刑罰に至る。斯ういふ意味ともう一つは民が威を畏れないやうに何事なく治めると大威に至るといふ解釋と兩方ある。

今日居る所を狭いと思はない。二十坪の家が狭いと云つて三十坪の家にしたと思ひ、まだ狭いと云つて一段の家を欲しいと思ふ、それが其の所を狭しとするのです。其れは一端ですが色々細工をする、欲を起して色々とするのは自分の居る所を狭くする。狭い家に這入れば其れでよいと思ひ、廣い家に入ればそれでよいと思ふと至る所狭いといふところはない。

宋の苑文正が大臣大將の位になつたから一族の者がここ迄來たのだから立派な庭園でも拵へたらどうかと云ふと、此の都には富貴で立派な庭園を持つてゐる者がある。自分が行つて見たいと思へば誰も拒む者はないから何處へでも行つて樂しめる。それで強ひて庭を造る事は要らんと云つたといふことであるが、それがさうで、自分の居る所に安んずるのである。そこで聖人はよく知つてゐるが自ら知つたとしなない。普通は自ら自分を愛して自ら貴いとする自分を貴いとしようとして自ら愛するとするが、さうではない。彼を去つて即ち居る所を狭しとするのを去つて、此れ即ち厭はざる所を取る。

勇於敢章第七十三

勇^{ムトヤハ}於^{テスルニ}敢^ル則^チ殺^ス勇^{ムトヤハ}於^{テスルニ}不^レ敢^ル則^チ活^ク此^ノ兩^{ツノ}者^ハ或^ハ利^ハ或^ハ害^{アリ}天^ノ所^レ惡^ム孰^レ知^ル其^ノ故^ヲ是^ヲ以^テ聖^人猶^モ難^シ之^ヲ天^ノ道^ハ不^レ爭^ハ而^{シテ}善^ク勝^チ不^レ言^ハ而^{シテ}善^ク應^ジ不^レ召^サ而^{シテ}自^ラ來^ル坦^ト然^ト而^{シテ}善^ク謀^ル天^ノ網^ハ恢^恢疎^疎而^{シテ}不^レ失^ス

敢てするに勇むといふのは大いに外に争ふことをいふのです。敢てといふと果敢とか敢爲

とかいつてよいのですが、茲は勝心です。これが老子の禁物です。佛教で勝心といふことがある、闘志です。之を嫌ふのです。なに負けるものかと競争心を起して争ふ、さういふものは一種の本能ですからそれを壓へるのも勇氣が無ければ出來ない。納めると身を全うする事が出来る。勝たう勝たうとする者は負ける。身體でも餘り強い者は相撲取のやうに長生が出來ない。殺される方は害、長生する方は利です。天の惡む所は即ち此の敢てするに勇む所を惡むのです。それを知る者は尠いから知り難いものである。天は元來あるが儘のものなんです。人間でいへば弱い者もあれば強い者もある。美しい者もあれば醜い者もある。天氣は溫和な事もあり厳しいこともある。強い者弱い者と一方だけのことはない。寒い所もあれば暖い所もあり、敢て一年中暖かにしようとするといかない。

天の道は争はないけれども天が一番強い。人間業で自然を征服するなど云つてゐるが、畢竟皆自然の儘である。人間が自然を征服するといふが如きは螻蛄の牛車に向ふが如きである。老子の云つてゐるのは文化に對するもので、文化はよいが其れに弊といふものがある。それに対するもので自然といふ事を重んずる。文化は怠るとすぐ廢れる。ローマに行つて見ると古への道路の跡がある。今は廢れて元の土になつてゐる。元の土に打勝つことは出來ない。文化といつても道を皆アスファルトで蔽つてしまふことは出來ない。結局天の方が勝つ

然し天は争はない。人間が石疊をすれば黙つて其の儘にして居るが天は勝つ。悪い事をする者は何時とはなしに終を全くしない。善い事をする者は取り立てゝやらうとは天は云はないが結局はよいのです。善し悪しに應じて結果を現はす、悪い事をすれば悪いことが招かずして自ら来る。善い事をすれば善い報が招かずして自ら来る。坦然として善く謀る。天の道は坦然として何もしない。天の網は目の粗いものだけでも失はず、魚が皆とれる。その如く天の網は目の粗いものだけれども逃がさない。法令を繁くして防ぐのではないが善は善、悪は悪とさうなつて行くのです。民族の歴史を見てもどうも其のやうです。悪い者が一時榮えたやうであつても終に悪くなる。さう悪い事をしたら悪い結果が來なくとも其れ自身苦しい思ひをするやうになつて居る。

民不畏死章第七十四

民不_レ畏_レ死_○。奈何_○以_レ死_○。懼_レ之_○。若_シ使_ニ民_○常_レ畏_レ死_○而_レ爲_レ奇_○者_○吾_レ得_ニ執_テ而_レ殺_レ之_○。孰_カ敢_テ常_ニ有_テ司_レ殺_者。殺_ス夫_レ代_ニ司_レ殺_者。殺_ス是_ヲ謂_テ代_ニ大_○匠_○斲_上天_○代_ニ大_○匠_○斲_者。希_レ有_レ不_レ傷_レ手_○矣_○。

匠斲天代大匠斲者希有不傷手矣

人間は死を畏れると思ふからして死を以て威すのです。刑罰で威すのであるが、けれども民が死を畏れないなれば刑罰で威しやうがない。人は死を恐れるものであるが事ある時には案外死を畏れぬこともある。無事の時は死を畏れるが其の時は威す必要もない。又一人一人は懼れても群集になると懼れない。個人の心理状態と群衆の時の心理状態は違ふ。そこで死を以て威してもさうは行かぬものだといふ意味である。

人は死を畏れるのも人情であるやうだが事ある時には死を懼れない。それで事ある時には法で死を畏れさせることは何にもならない。民をして死を畏れしむるやうにすると、怪しい奇怪な事をする者は之を殺す事を得。誰か敢て之をせん。上命を聞かないことは誰もしいであらう。死を畏れないならば奇、尋常を外れたことをする。歪んだ事をするそういふ者は捕へて之を殺す。さうすると人が悪い事をしない筈である。けれどもどういふものか其の奇怪な事をする者が絶えない。法律を用ひて人を罰しても少しも罪人が少くならない。死を畏れるなら誰も悪い事をしない筈だが事實はさうでない。

元來殺を司る者があつて殺すのです。殺さるべきものは殺されるやうになつてゐる。さう